
魔力世界の時操者 (CHroNuS)

逆様夜見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力世界の時操者 (Chronus)

【Nコード】

N7863W

【作者名】

逆様夜見

【あらすじ】

——魔力、魔術、魔道、魔導。

この世界にはそれらのものが存在していた。

そんな中魔力を有するものの魔法が使えない者がいた。

しかしその者だけが持つ異能いのうを授かっていた。

その世界で異能はどれだけ特殊なのか。

その世界で異能はどんな役割を果たすのか。

これから編集して、出来るだけ文体を変えていきます。

応急処置程度にしかならないと思いますが、23話以降もそれでいくつもりです。

登場人物（前書き）

随時更新していくつもりです。

設定集を要望があれば、時間のある時に作ります。

登場人物

魔術優遇第三区空明ヶ崎学園

・羽間刻季

魔術優遇学園1年次

魔術が使えないが魔力所有値が高い。

自分の近くで発動している魔術を分解し、その魔力を吸収することが出来る。

魔力は異能により時間を止めることが可能だが、能力に関しては嫌気がさしている節がある。

・天原華音

魔術優遇学園3年次

学園の生徒会長で、魔術でも実力者。

12師団の一角『天原家』の当主の娘。

刻季を崇めているところもあるが、もっぱら振り回す。

自称が色々あるため、作者としては下僕しもべで固めたい

・南雲萌葱

魔術優遇学園1年次

刻季の幼馴染でクラスメイト

12師団の次席『南雲家』の当主の娘。

刻季に対し好意を持っているが周りが濃いため、若干薄いのが悩み。やはり魔術の才能は高い。

・碓氷仁吾

魔術優遇学園1年次

刻季と同じ中学出身でクラスメイト

国家側の魔術一家『碓氷家』の当主の息子

碓氷は師団との関係も意外と良好で、仁吾自身も師団との繋がりが
ある。

でてないが割とお坊ちゃん。

・陸奥竜也

魔術優遇学園1年次

刻季のクラスメイト

入学時、仁吾と萌葱と一緒にいる刻季に興味を持ち、声を掛けてか
ら仲良くなる。

華音の非公式ファンクラブなるものに参加している。

・阪野果歩

魔術優遇学園1年次

刻季のクラスメイト

大人しい子で、萌葱と仲良くなってから、刻季達のグループにいる
ことになった。

刻季の果歩への呼び方は「阪野さん」

・金城巽

魔術優遇学園3年次

学園の生徒副会長。

華音のクラスメイト。

・法等保美

魔術優遇学園3年次

学園の生徒会書記。

華音のクラスメイト。

・永峰柚穂

魔術優遇学園2年次

学園の生徒会会計

刻季は幸継へのツツコミ役との認識で固まっている。

・鷹司幸継

魔術優遇学園2年次

学園の生徒会所属

刻季を嫌っているふしがある。

学園外

・羽間濤桜

刻季の4歳上の実姉。

刻季との色々（言葉を濁さなければいけないこと）ばっちこいな子。
かなりのブラコンで刻季以外の男嫌い。父親は普通。
魔術的な実力も高い。

・天原音彦

師団の一角『天原家』の現当主

華音と音弥の父親。

『羽間』を見下している。

・天原音弥

師団の一角『天原家』の当主の息子

華音の兄。

刻季に結社の頭首を頼んだ。

登場人物（後書き）

第00話 プロローグ

——魔法、それは神にあらがう力

——人間はその力を持ったとき、一族の安寧の為だけに使おうと決めていた。

——しかし現代、魔法は世界の常識として蔓延っていた。

——これはそんな世界の、神に神に匹敵する力を持った人間の中でも「王」と呼ばれる者の物語である。

「我が君、刻季様^{ときせ}。お願いしたいことがあります」

学園のトップであるところの生徒会長である天原華音^{あまはらかのん}が、羽間刻季^{はざま}の元に来るなり恭しく頭を下げて言った。

「せっかくのプロローグなのにな……」

刻季は訳の分からないことを呟くと視線に気づいて周りを見渡した。1—Cの教室中の生徒という生徒がこちらを見ていた。いや、教室の外にも集まっているようだった。

その視線の原因はわかっている。

もちろん華音だ。

魔法の専門学園、魔術優遇第三区空明ヶ崎学園^{まじゅつゆうぐうだいさんくからあけがさきがくえん}の生徒会長

魔術師としても強力と有名。

頭脳明晰、家柄も良し。

その上とても、とてつもなく美人なのだ。

大きく澄んでいる目や高く整った鼻、ぷるんとしている柔らかそうな唇を持ち、それらを包み込むように絹のような長い髪が神々しいばかりに輝きを放ち。その上身長が高く、揺れるような胸にくびれた腰もまた魅力的すぎる。

そんな完璧な淑女を地でいく彼女の視線の先には、ただの一年生にしか見えない少年。

顔は整っているものの、長い髪を結び、それに覆われていて影が残り少し根暗な印象に見受けられる。

魔法に関しては入学して程なくなのでまだ分からないものの、クラスでも特に異彩を放っているわけでもなさそうだ。

名前も知らず。

うすいじんこ 碓氷仁吾と南雲萌葱なぐももえぎの友人としか知らない。

そんな少年。

そんな特筆すべきところのない目立たない少年。

現状ではかなり名前負けしてる刻季とききは誰に聞かせるでもなく、しいて言えば空の先にいるであろう神に向かい問いかけた。

「なんでこんなことになったんだろう……」

それほど注目されることの慣れていない刻季が注目されることになった原因を思い出そうと思案し始めた。

思い出すには昨日まで時間を戻さなければいけないな。

そんな言葉もひとりごちた。

第00話 プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
これからも随時更新するので、チェックしてくれたら感激です。

第01話 優遇学園

入学してまだ10日ぐらいなのに寮から学校までの道を慣れ親しんだ道のように中学校からの友人である碓氷仁吾うすいじんごと僕——羽間刻季はなとききは歩いていた。

仁吾は数少ない同じ中学校からの新入生だった。

彼と初めて話した日もちょうど三年前のこれくらいの日だったと思う。

そんなことを思って横目で彼を見るとちょうど目が合い、ニカッと笑いかけてくる。綺麗な白い歯だ。

仁吾は筋肉質で野獣のようなカッコよさを持っている。

それも某映画のキスをして王子様に戻る野獣のような生ぬるいものではなく、本物の獅子のような獣臭さ、男臭さを兼ね備えているような存在。

そしてその上彼の実家は魔術師一家としても有名だ。

背はそれほど小さくないが、痩せ型と見える僕が仁吾と仲良くなっただばかりの頃は周りの人から虐められていると誤解されていた。

その誤解も、僕と仁吾の仲の良さを知るとすぐさま立ち消えになったようだが。

「いや、それにしても同じクラスになれてよかったな。これで中高含めて4年連続で同じクラスだよ。やっぱり入学したてはそれなりに不安だから慣れ親しんだやつがいると助かるぞ」
笑いかけたまま仁吾はそう言った。

「ホントだよ。普通の学校でもそうなのにウチは特殊だからね…」

「ホントホント！特殊過ぎるっての」

仁吾は大げさに肩をすくめた。

同じ中学校からは僕・仁吾を含め3人が魔術優遇第三区空明ヶ崎学まじゅつゆうぐうだいさんくからあけがさきが園くえんに通っている。

この学園は日本に6校しかない魔術優遇学園だ。

魔術優遇学園とはその名の通り魔術を優遇している学園だ。

古来より宗教徒と魔術師の間で抗争があった。しかし50年ほど前に抗争が収まり同盟を組むまでに至った。

そこで宗教徒は宗教徒を、魔術師たちは魔術師を堂々と増やせる状況になり、こぞって若い人材を集めようとした。

元々どちらも子孫に受け継いでいたモノ（魔法や剣技）だったのを公開し、今ではそれらが蔓延り、各国の軍事よりも力を持った。

そこで国々も危機感を感じ、魔術学園及び教徒学園の設立、法改正、軍備増強をおこなった。

それにより宗教徒・魔術師・国家の3すくみの状態になった。

尤も現在は「国家」が一番力をもち他の2つの派閥を抑える形になっているが、単純な力で抑えるより取り込むことを考え作ったのが「魔術優遇学園」だ。要するに国家に属する最大の魔術育成学校ということだ。

もちろん「教徒優遇学園」もある。

優遇学園は優秀な生徒しか取らず、個人が望む望まないにかかわらず、優秀であれば国家からの依頼ということで入学させられる。一応受験枠もあるが、それも全体の2割程度だ。残りは推薦ということになる。

僕自身は推薦枠に入ってしまった。

それほど望んだものではなかったのに……。

しかし推薦枠に入ってしまった以上、入学するほかに手立てがなかったので仕方なく入学した。

あと3年は仁吾達と通えるのであまり悪い話ではないのかもしれない、とポジティブに割り切って、今は通っている。

そうこうしている内に校舎に着いた。学生寮は学園内にあるのでそれなりに近い。

校舎の前で人ばかりを見つけた。入学して10日程度だが入学式以降この人だかりを見ない日は無い。またか、と思い人だかりの出来ている中心を見てみた。

案の定学園の生徒会役員だった。全員アイドルやモデルのような美少女やイケメンだ。

相当見栄えのする顔立ちや^{スタイル}体格をしている。

その中でもひと際輝いている人が見えた。

第02話 人ばかり

その中でもひと際輝いている人が見えた。

——あまはらかのん天原華音生徒会長。

彼女が放つオーラのようなものは神々しいばかりに光って見えた。それに彼女の周りには心なしか集まる人数が多い気がする。

実際、中には本気で告白している人も見える。

噂では年間の告白回数が1年の日数では追いつけないそうだ。

さすがにそのようなことは噂の域を出ないだろうが、しかしその噂が流れる気持ちもわかる気がした。

そして、魔術の名家に生まれ、学園内でもかなりの有力な実力者らしい。

それもそうだろう。

天原家と言えば数百年の歴史を誇る、日本の数ある魔術連盟のまとめ役である12師団トゥエルフスの一角である。

12師団はそれこそ世界中に魔術が広がる以前から存在し、宗教徒しゅうきやうととの戦争に控え結成した連盟で日本の魔術歴史とは切り離せないと言われるほど、長い間日本の魔術界の頂に結成以来君臨し続けている。

勿論12家とも有名すぎるくらいなのだが、天原家は12師団トップ1stフラーストである、50年に一度決められる主席に幾度となく選ばれている

ことから一番高名な家。

そんな名家中の名家のお嬢様である。

そして伝統こそないが、魔術優遇学園の生徒会長である。

その上とんでもなく美人だ。

もともと綺麗な原石を磨きに磨きあげて作った宝石のような練成された美しさが彼女にはある。

高校生にしてすでに、完成形のような存在だ。

僕は真横にいる仁吾^{じんご}に目をやると、天原会長を見ていた。

確かに綺麗だよなあとあんまり興味なさげに欠伸をしながら

「仁吾なら会長とでも会える機会多いんじゃないの？」

仁吾の家柄も良い。

「そうだな。でも特別仲良いってわけでもないし、まず家格が違うからな。あっちは魔術派閥だったのに対しこっちは国家派閥に属していたわけだ。まったく別物なんだよ。ただ同じように魔術を使っていたってこと以外はな。最近は家同士がそれなりに仲良いみたいだからパーティーに誘われたりするけどな」

「ふーん、羨ましい限りだね」

僕はまるで羨ましくなさそうに言った。

その態度に大笑いする仁吾。

仁吾は笑ったまま高い身長を生かし人ごみを見下ろし

「それにしても本当にいつもいつでもすごい人気だよな」

「生徒会に入る条件でルックスって項目でもあるのかな」

軽く皮肉を込めた冗談を言った。

「あるんじゃないのか？ 南雲も生徒会に入ったようだしな」

と今はここにいないが、友人にして僕の幼馴染の名前が出てくる。

「……確かに、萌葱が入ったとなるとその条件の信憑性がすごく高くなるよ」

「あいつもものすごい美人だろ。そんなでもって現生徒会役員はみんなイケメンや美人ばかりだ。なんか疑う要素すら見つからないんだが……」

仁吾が改めて人だかりの中を見ると、ため息をもらした。

「あれで全員魔術の実力者だろ？」

「まあ優遇学園の生徒会に入るくらいだから相当なものだと思う」

「実力にルックスか……。何か足りないモノあるのかな？　ねーよな」

仁吾が軽く自問自答する。

そして思いついたかのように

「そういや、実力にルックスならお前も相当なもんだけどな」

「はあ？　何を言ってるの？　こんな根暗そうに見える奴のドコがルックスいいのさ」

「その長い髪を切ったら大層男前……。女前な顔が出てくることだろうよ」

「仁吾に言われると皮肉にしか聞こえないんだけど……」

なんか気になる単語があったみたいだけど

「ふーん……。まあお前がそう言うならいいけどな」

「それをいうなら仁吾が生徒会に入っちゃいなよ」

「俺には無理だよ。事務仕事とかもありそうだし」

「無理そうな理由ってそれ！？」

「お前のが生徒会には合ってるって、融通も利くし人との調和が得意だろ？　それに実力だって相当な——」

「魔術も使えないのかな？」

仁吾の言葉は僕の柔らかい声音に遮られた。

「魔術も使えないのに、魔術優遇学園に入っちゃってこれからどうしようって感じだよ」

「……」

「魔力所有値だけが高くても魔術が使えないんじゃない宝の持ち腐れだなあ」

「実力つてのは魔術だけの話じゃないだろ。しかも持ち腐れているわけではないじゃないか」

「けどね」

一言一言区切るように、僕は大切な我が子に諭すように

「魔力っていうのはね、魔法に使うものなんだよ。それ以外に使うようなら魔術師でも魔法使いでもないんだ。」

「……」

「僕は魔法使いになりたかったよ。戦いの実力は二の次でいいからさ」

「まあお前の気持ちもわかるけどよ…、そこまで言うなら一回くらい俺に勝たせてくれてもいいんじゃないのか？」

苦笑して言う仁吾に僕は

「仁吾は強いよ。本当に強い。学校でも有数の強さじゃないのかな？でも僕の能力は少しだけ異常だからさ。それに手加減したら君怒るじゃないか」

「当たり前だろ。真剣勝負に手加減なんて恥さらしも良いとこだ。」

「今の戦績は？」

「うっ……、156敗だ。次こそ勝つぞ！」

「めげずに向かってきてくれるのは仁吾と萌葱だけだから嬉しいよ。しっかり魔力使わないリアルファイトならたぶんボコボコにされてるね……」

「そんなの魔力世界じゃ有り得ない戦い方だろ。それで勝っても嬉しくないし面白くもない。」

敗績を着実に伸ばしているのに何故か仁吾は自慢げに胸を張った。

「まあ実際、仁吾と戦うと恐怖する面もあるよ。すごい鬼気迫る感じで近づいてくるからね。」

「そうか？ 別段意識してやってるわけではないが……」

「なんかいつも怨念籠っているな。『勝つぞお…、勝つぞお…』って声が聞こえてくる気すらしてくるよ」

「俺はただだけ飢えてるんだあ！」

仁吾は自分の勝利への執念に一抹の不安を抱く。

しかしケロっと手のひらを返し

「でもそっちのが少しでも勝率が上がるからいいか」

「そんなに勝ちたいのか……」

「おうよ！ 俺の中学時代からの目標だ！」

「それはありがたいね。まあ頑張って勝ってよ」

仁吾の目標と言う言葉に照れくさくなりながらも素直に嬉しそうだっ

そろそろ教室に向かおうと思い、最後に人ごみを見ると、たまたまなのだろうか天原会長と目が合った。

会長はにっこりと微笑みかけながらも、何故か意味深な視線を送ってきた。

（なんなのだろう）

何かと不思議に思っていると隣で仁吾が僕の肩を掴んでいた。

「そろそろ行こうぜ。遅れちまうよ」

「うん、そうだね。急ごうか」

仁吾に急かされてすっかりと意味深な視線を忘れる刻季。
この視線の意味がわかるのがもう少し後である。

第03話 幼馴染

教室には半数程度の生徒がいた。この教室は1―Cだ。

Cクラスだからといって魔術強弱とか魔力量とかそんなことは関係ない。

1年次は関東甲信越かんとうこうしんえつを7つの地区に分けて、その地区ごとにクラスが形成される。

刻季とき――僕や仁吾じんご、それに加えて萌葱もんそうはもちろんC地区に該当する住所を持っている。

そして2年次に入ると成績や能力によってクラスが決められる。

2―Aと2―Cクラスは実力の高い者たちが集まる。

そして少しレベルは落ちるが、他の生徒はDとGに配属されることになる。

そうはいつでも下位クラスが弱いということでは決してない。

基本的に優遇学園の生徒は魔術のエリートや家柄がいい人が多い。というかそれらがほとんどだ。

だから差異が大きくあるわけではないのだが、それでも多少は差があるため生徒会執行部役員・風紀委員会委員なども大抵はAとCクラス所属である。

学園内の魔術での争いが頻繁に起こるので生徒会役員や風紀委員は学園秩序の維持のために、魔術を使って治める。

生徒会や風紀委員は魔術によほど長けてないと学園の警備などがで

きないので仕方ないだろう。

僕と仁吾が教室に入ると、入学してすぐ早速生徒会に抜擢された幼馴染がこちらに寄ってきた。

中学校も一緒の3人の内の1人だ。

まあ僕にとって彼女は中学だけでなく産まれたときから一緒に育ってきた存在なのだ。

その寄ってきた幼馴染なぐもの南雲萌葱は気まずそうに顔を顰めた。

「おはよう、刻季。今日は少し遅くなっちゃって、朝の集まりに間に合わなかったよ……。」

「おはよ、萌葱。生徒会入ったばかりなのにそんなんでいいの？」

「お父様にバレたら大変なことになっちゃう……。」

青ざめながら助けを求めてくるようだった。

そういえば朝、あの生徒会の集まりに萌葱がいなかったなと思い至った。

萌葱は新人生の中で抜群の人気を誇っており、早速上級生から交際を申し込まれたとの話を昨日聞いた。それもそのはず、彼女は少し赤みがかかったポニーテールと大きくて少し切れ長で澄んだ緑色の瞳がとても綺麗で、顔立ちも整っている。身長も女性の平均身長以上あるしスタイルも良い。これで人気が出ないわけがない。

そしてご多聞に漏れず12トゥエルフス師団の一角だ。

現在は122nd師団セカンドの次席の位置に家長である萌葱の父親が付いている。萌葱がビビっているが本人の名誉のために断っておくと、萌葱の父親は優しい。

ただ少しばかり厳しいときがあるのだ。

僕もそれほど怒られたことはない。

ただ娘ともなると色々あるのだろう……。

その次席の家の長女である萌葱はただのアイドル集団ではない生徒会に入学前からスカウトを受けていて現在所属しているのだ。

つい数日前まで風紀委員と生徒会が彼女を取り合っていると萌葱はげんなりとしながら言っていた。

それほど魔術に長けていて魔力が高いのだ。

その萌葱が、

「刻季、少し話があるんだけど…」

少し言いづらそうな彼女を訝しい目で見ながら言ってくるので、不審に思いながらも、なにかな？と僕は言った。

「ウチの生徒会長わかる？」

「わからない人なんてこの学園にいないんじゃないかな」

「そ、そうよね。その会長が……」

「うん、会長が？」

彼女はすごい勢いでもっている

「あ、あたしは無理だと思っただけだよ！ でもどうしても頼まれて……」

「だからなんなの？」

苛立ちをあまり隠さずに言う。

そして萌葱は僕の目を見て、決心したかのように姿勢を正した。

「……生徒会に入ってくれないかな？」

「……………え!？」

僕の目が驚きで色を失わせるように薄れていく感覚があった。

「……な、何言ってるの？」

「だーかーらー！ 生徒会に入ってほしいのっ」

「スカウト？ 正気？」

「別に正気よ！ でも生徒会長直々に何度も頼まれて断れなくて……」

「なんで僕なの？ もっと優秀なのは周りにいっぱいいるよ。しかも僕は魔術が使えない。萌葱にスカウトが行ったのは納得だが僕に来るのは納得できないよ」

そう、魔術が使えない。

それも全く。

それでも入学出来たのは、きっと魔力所有値の高さによるものだ。

魔力所有値が高いからといって必ず魔術が使えるとは限らない。

その逆で、魔法の使用には必ず魔力を必要とするが、適正のない僕は、魔術が使えない。

適正は人それぞれだが、無い人も稀にいる。

それでも魔力所有値だけは人より数倍高い。

『魔術優遇学園』や『教徒優遇学園』は大抵魔力所有値や魔力量、

魔法・魔術適正で入学が決まる。

僕は適正のマイナスを帳消しに出来るくらい魔力所有値が高い。

ゆえに入学依頼（依頼という名だが強制的だ）がきた。

それでも事情を知ってる萌葱は、

「あんたは別に魔術なんか必要としないくらいじゃない。あたしよりも強いくせに……」

「バカ言うなよ。魔術が使えないのに」

「バカはあんたよ！ あたしに確氷にもまるで負けたことないくせに……。ねえ、そろそろ隠すのをやめない？」

おそろおそろといった感じで聞いてくる

「やだよ」

一喝する。

「能力を見せると群がる奴等がいる。そういう奴等を萌葱も見てきただろ」

「でも生徒会は信用できる人ばかりだよ。まだほんの少しの付き合いだけでそれだけはわかる」

萌葱の人を見る眼はすごく長けていると、長い付き合いなので知っている。

その彼女が言うからには、本当に信用できる人ばかりなのだろう。しかし、

「生徒会内で能力を使うのは萌葱の言うとおり信用できるなら良いと思うけど、他の場合どうするの？」

萌葱は気づいたみたいに手をポンつとのせた。

「あっ！ そっか……」

「生徒会の仕事ってそーゆー仕事ばかりでしょ？ 僕は能力を使わない以上役に立たないよ。生徒会長には断っておいてね。」

「でもでも、あたし個人としても入ってほしいんだより！ まだ一年私だけだし、これから入る予定もなさそうだし、寂しいの……。ねっ 刻季！ 助けると思っで。」

目を潤ませて言う萌葱。

それにしてもこう言われると辛い。

萌葱自身あまりわがままを言わないからだ。

本当に寂しいのだろう。

しかしそれを断ち切るように、

「悪いけど今回は力になれないよ。まあ、暇な時ならいつでも、遊びでもなんでも付き合うから諦めて」
必死の懇願を諭すように言う。

「そうかあ……」

萌葱は案の定悲しそうにうなだれる。

そうした原因は僕にあるんだけど、こうも悲しそうな顔をされると何とかしたくなる。

どうすべきかと悩んでいるが答えは出て……こないね。

その時は萌葱は何か思いついたみたいに、あつ、と小さく声を上げた。

すると突然、演技じみた悲しそうな表情を浮かべた。

品行方正な彼女にはあまり似つかわしくないことをしている。

なにかな？と僕が戸惑っていると、彼女は大げさに、そして可哀想になるほど強くため息をついた。

「わかったあ……。……でも一応直接会って断ってくれる？ あたしの友達が礼儀知らずだなんて思われたくないから」

「うーん、まあ、それもそうかもね……。……うん、そうすることにするよ」

「じゃあ今日の放課後開けといて。一緒に生徒会室行こう！」いきなり声を張る萌葱に僕は吃驚した。

「わ、わかった。わざわざ悪いね」

「いいよ、それぐらい。じゃあ後でね。」

そう言って彼女はごきげんで自分の席に戻って行った。

話のどこかに喜ぶことがあったのだろうか。

稀によくわかんない萌葱。

しかしそれでも刻季は萌葱の機嫌がよかったのになんとなく嬉しくなって自分の戸惑いを忘れていた。

もう少し考えて行動すべきだったのだ。

これを明日にはもうすでに後悔していることになるのを僕は気付かなかった……。

魔法学を混ぜた授業が終わって放課後、仁吾が来た。

「おい刻季。帰ろうぜ。」

いつものように返事をしようとしたところ、

「ダメダメ！ 刻季は用事があるの！」

その会話を耳聴く聞いていた萌葱が僕の腕を胸に引き寄せた。忘れていたところだった。

「用事？ なんだよ、それ？」

仁吾が萌葱に向かって聞く。

「あんたには関係ないでしょ！ ほら行くよ！刻季」

「あ、ああ……」

萌葱が腕を引っ張って歩き出す。

僕は仁吾に向かって手を顔の前でかざし、「悪いね」のポーズを取った。

すっかり忘れていた。

彼は何かだかわからないみたいに首を傾げている。

教室を出ると萌葱は憤慨する

「まったく、約束もう忘れたの？ 放課後って言ったじゃないの！」

「まあ軽く忘れてたけど、仁吾に説明してからでもいいんじゃないの？」

「そんなの必要ない！」

萌葱はわき目もふらずに生徒会に急ごうとしている。

「他の生徒会役員はもう集まってると思うよ。」

「……え？ まだH R終わって数分しか経ってないよ。あり得ないでしょ」

「ウチの生徒会に今日刻季が来ること知っているからたぶん全員集まっているわよ」

「うわっ！ 全員いる前でとか断りづらいにも程があるね……」

「それでもこういうことはしっかりと本人から断らないとね」

「それはそうだけどさ……。まさか萌葱が全員呼んだの？」

「そんなこと新米に出来るわけじゃないじゃん。でも会長に呼んだ方がいい、とは伝えただけ……」

「やはり元凶はお前か！！」

刻季が憤慨して声を張った
なんだよ、それ！

「それぐらいいいでしょ。せっかくの誘いを断るんだから少し罰を与えないと」

「どんな思考の持ち主だ！ 余計なことをしないでください……」

「あたしだって全員いる前で迫られたんだから刻季にも味わわせようと思って」

「萌葱のことなのになんで僕まで……。何とかならないか？」

その後僕はなんとか回避しようと努力するが、

「ならない。」

の言葉で一蹴された。

仕方なく、という感じで、諦めてしつかり、面と向かって断ろうと思いいおした。

そうこうしている内に生徒会室の前まで着いた。

ドアは少し厳格そうな雰囲気を見せている。

不安になっているのがわかったのか萌葱は、

「大丈夫大丈夫。慣れるから」

「慣れるつもりはないよ！」

危なく断る道すら断とうとしてくる。

油断も隙もない。

僕は深呼吸すると決心してドアを開けた。

第04話 生徒会室（前書き）

相も変わらず拙い分ですみません…
しかし読んでもらえて幸せです。
感想いただけるともっと幸せです。

それにしても新キャラを空気にしないか心配です。

第04話 生徒会室

刻季は深呼吸すると決心してドアを開けた。

そこは、ここ学校なのか？と思うぐらい荘厳な部屋だった。

アンティーク調な雰囲気もありつつ荘厳さも失われていない。

そして部屋の中の楕円形テーブルを取り囲むように役員たちが集まっていた。

朝の集まりにいる人たちだ。

その中心にいるのが生徒会長一天川華音だった。

やはりとてつもなく美人だった。

彼女は一歩前に出ると、

「3年生徒会長の天川華音です。羽間さん、これからよろしく願
い致します」

（——ん？何か聞き逃せない言葉が……）

そのあとその横にいる茶髪の高身長イケメンがにこやかに

「3年生徒会副会長の金城巽きんじょうたつみです。歓迎するよ」

（——うーん……。聞き間違いだろうか）

生徒会長の左隣りの眼鏡を掛けた青髪の美少女が

「3年生徒会書記の法等保美ほつらやすみです。新たな戦力として期待していま
す」

（——もう聞き間違えじゃ済まねえよ！）

その横の赤髪の活発そうな美少女が満面の笑みで

「2年生徒会会計の永峰柚穂ながみねゆすほだよ。仲良くしてね！」

（――あの…仲良くしない予定なのですが…）

その横の少し仁吾に似た雰囲気のがたいの良い男前の人がブスツとした顔をして睨みながら

「2年の鷹司幸継たかつかさゆきつぐだ。言っとくが俺は歓迎なんてしない。なんで會長もこんなヒョロそうな奴を…」

（――あ、やっただいぶ理想の反応が…）

そう思っていると、一番遠くにいた柚穂が幸継のところに行くところとガッンと殴った。

「ようじ、まだそんなこと言ってるの？　ほぼ満場一致で迎えるって可決したじゃない！」

「俺は歓迎しないって言い続けているぞ！　こんな奴が生徒会でやっていけるわけないだろ！　帰宅部が良いところだ。それとようじって呼ぶな！」

「じゃああんたなんかつまようじでいいわね！　彼は魔力も高いんだからやっていけるでしょ」

「誰がつまようじだ！！　魔力が高いからなんだってんだよ！」

お互いにフンッと顔をそむけた。なんか刻季を置いて喧嘩をしている。

その上いつのまにか入ることが確定しているみたいな展開になっている。

刻季が萌葱を睨むと、気まずそうに顔をそらした。

しかたなく前を向きとりあえず空気を変えようとした。

「あの……」

すると一斉にこちらを向き、そして生徒会長が

「ああ……、ごめんなさい。あなたたちもう止めなさい。鷹司君も、もう決まったことです。従ってください」

すると幸継も渋々と

「……はい」

と引き下がった。

しかし引き下がられても困る。

なにしろ刻季としては入る気がないのに勝手に話が完結している。ここらで断っておかないと大変になると思い

「あ、あのですね……。実に言いにくいことなのですが……」

また天原会長がこちらを向き直り

「はい、何でしょう？」

しっとり微笑みながらその美貌を見せてくる。

刻季が言葉に詰っていると、

「諦めて入ったら？」

萌葱がボソッと、それでもハッキリ聞こえるように言ってくる。

「バカ言わないでよ」

刻季も萌葱にだけ聞こえるようにそう言った。

そして今度こそはっきり断ろうと声を絞り出した。

「あの……、僕生徒会に入る気ないんですけど」

その瞬間、刻季・萌葱を除く全員が息を止めた。

萌葱はこれ見よがしにため息をついている。

そして少ししてから天原会長がみんなの意見を代表するように

「……入らないのですか？」

「ええ、こちらには断るつもりで来ました」

「でも南雲さんは……」

「萌葱が何を仰ったのかわかりませんが、この話はお断りさせていただきます。」

その言葉に天原会長は少し何かを考えるようにして

「何故入らないのですか？ 確かに危険の多い職ですが、卒業後の待遇はかなりよろしいですよ。OBの方々も優しい方ばかりですし、今の役員の皆様も優しいですよ？」

「はあ……、まあ魅力的なお誘いなのですが……」
そこで言葉を切った。

ホントに魅力的な誘いだった。

卒業後のことをまったく考えていない刻季にとってこういう誘いは正直言っておりがたい。

しかし、

「僕魔術が使えませんので……」

そうなのだ。

こればかりは仕方ない。

みんながまた驚いた。それもそうだろう。

大抵魔術師は魔力量で勝負が決するからだ。

魔力が多ければ、魔術が使える、それが当たり前の世の中になりつつある。

だが俺は使えない。

会長が絶句から復帰したように声を出した。

「本当なのですか？」

「ホントです。魔力所有値は高いんですけど、魔術は全く使えません」

「ですが……」

「お気持ちはわかります、ですが事実なんです。僕の魔力は無用の長物なんです。な、萌葱」

萌葱は悔しそうにした後、こくんと頷いた。

締めにかかるうと刻季は口を開いた。

「そういうわけで申し訳ありませんが……」

その言葉はそこで切られた。

幸継がいきなり大きくふんぞり返りながら偉そうに腰に手を当て嘲笑するようにいった。

「やっぱりそうだ！ 俺は使えない奴だと思ってたんだよ。こんなヒョロくって体力もなさそうなら、極めつけは魔術が使えないときだ。お前もう学園をやめたらどうだ？」

それなりに温厚な刻季もさすがにいらついた。

事実なのだがやはりこのような手合いは表面的には慣れたくても深層では拒絶している。

思い切り睨みつけてやると、鼻で笑うようにした。

「なんか文句があるなら言えよ。言いたくても怖くて言えないか？」

ハッ！ とんだ臆病モンだな」

中傷の眼差しを向けている。

限界が近づいてきたので一歩前に出ようとする、萌葱が刻季の裾を掴んだ。

不安そうな表情をしている。

刻季は軽く、――幸継に対する眼つきの1／100くらいの眼差しで睨む。

（萌葱がつれてきたんだぞ、止める権利があるの？）と非難も込めてそれでも面持ちはそのままに裾を離そうとせず首を振る。

その行動にすこし頭が冷えた。

刻季は萌葱がどこか懇願するような目をしていることに気付いた。そういえば、と思い至った。

萌葱は今現在生徒会に所属している。

ここで刻季が暴れば、それは自分自身はすっきりするかもしれないが、萌葱としては長い間付き合っていかなければいけないのだ。一時的な興奮に身を任せてはダメだ、そう熱くなっている自分に言い聞かせる

そもそもこの幼馴染はあまり刻季に対して嫌になるような事や不利益になるようなことはしない。

こちらがいくら迷惑をかけても取り締まり、解決すると微塵も悔恨を残さずにいつも通り優しく接するのだ。

刻季は仕方ないとばかりにため息をついて萌葱だけに見えるように微笑む。

萌葱は少し顔を赤くし照れながら、ありがとうと彼女がいつも合図にしているウィンクをしてくる。

安心してとても魅力的な表情を向けてくる。

その表情に刻季は更に相好を崩した。

「おいおい、ウチの新しいのに慰めてもらってしあわせか？」

一部始終見ていた幸継の言葉にその雰囲気をぶち壊しにされる。

せっかく丸く収めようとしたところに新たな爆弾を投げ込むみたい

に。

刻季が萌葱に迷惑がかけられない程度の非難をしようとすると華音が

たしなめるように

「やめてください。この学園生徒会役員ともあろう方が誹謗中傷をするなど言語道断です。本当に申し訳ございません、羽間さん」
自分の立場を取られた立場の刻季なので

「あ、いえ。大丈夫です。確かに言うとおりの魔術使えないでしょうもない奴ですの」

と、何故か更に自分を卑下する様な言葉になってしまいが言った。
そして会長は首を振った。

「そんなことはありません。そしてやはりあなたの魔力は私たちに
とって魅力的です。」

「え？」

「魔力にはいろいろな使い道があります。自ら魔法に変えて使うこと。普段私達が行っていることです。それから魔力を物体に込めて、魔力を有したモノに変えること。たとえば、宗教徒が使う剣術や他には魔術書なんかがそうです。そして魔力を他者に授与することです。羽間さんはこちらができるのではないのでしょうか？」

「はあ……。まあ出来なくもないですが……」

「それでは改めてお願い致します。」

会長が恭しく頭を下げた。

刻季はあわてて

「ですが、そのようなことだけで所属させてもらうのは申し訳ないですよ。皆さんが体をはるのに、俺だけのうのと魔力の譲渡だけだなんて」

すると幸継が

「そうだぞ！ そんな楽な仕事でいいなら猿でもできる」

そして柚穂が

「だからやめなさいって会長も言ってるでしょ！ それをいうならあんたの学習能力も猿並みよ」

「うるせえな！誰が猿並みだよ。ホントのこと言ってなにが悪いんだ」

「いいから黙ってなさい！」

また頭を思いつきり殴る。幸継は痛みにも悶えて黙る。今度は柚穂も魔術を使って殴ったようだ。

すると横目でそれを見ていた巽が口を開いた。

「幸継君が言ってるのは気にしないでいいからさ」
そして保美も

「私達はホントに歓迎しています。是非お願いします。」

そんなこと言われては断りにくくなるとばかりに縮こまる刻季。
仕事は魔力だけでいいなら、それほど楽なことは無い。
しかし万が一にも公で能力を使っては面倒どころではない。

そう誘惑を断つように

「いえ、ホントに申し訳ありませんから。お断りします。」
出来る限り丁寧に頭を下げ断る。

「全く考え直す気、ありませんか？」

会長が最後の打診とばかりに語りかける。

「すいません、せつかくのお誘いですが」

社交辞令的な断り方をする。

そして会長はいきなり剣呑を変えたかのようにして、

「それでは、生徒会権限を使用させていただきます。」

「ちよっ！それは……」

「自発的に入ってくださらないのでは仕方ありません。それでは羽間さん。あなたはこれから生徒会役員です。いいですね」

強引に話を進めようとしてくる。
なかなかうまく交渉術？

……強制術だ。

「え！？ ちょっと待ってください！　ねえ、萌葱」

助けを求めて萌葱の方を刻季は見ると彼女も動揺している。
萌葱は当てにできない、と踏ん切りなんとかしようとする。

「生徒会長！　少し待ってください」

「申し訳ありませんが、それは聞けません。生徒会権限を使用しましたから。」

生徒会権限とはそこまで強制力があるのだろうか？

最後の綱と思い質問した。

「それは全く取り消せないんですか？」

「可能と言えば可能ですが、不可能と言えば不可能です」

「どういことですか？」

怪訝に思って聞く。

「権限の使用者と決闘して勝てば帳消しになります。決闘の結果はこの学園では絶対ですから」

会長が淡々と、そして有り得ないと思っっているような態度で言う。

——決闘をすれば帳消しにできる。

その言葉を聞いて助かったと刻季は思った。

決闘ならば能力を使っても見るのはここにいる役員だけだろう。

それに萌葱は信用出来ると言っていた。

外部に情報が洩れる心配も限りなく低いだろう。

そう頭の中で素早く計算し声高に

「天原生徒会長、決闘を申し込みます」

全員の息をのむ音が聞こえた。
少しの沈黙が流れる。

そしていち早く復帰した巽が、

「本気？ 会長ホントに強いよ」

「ええ、本気です。確かに強いのでしょうね」

そして会長は

「ホントにいいのでしょうか？ 勝ったらしっかり入っていただきますよ」

その言葉に首を縦に振る。

萌葱がまた不安そうな顔を浮かべている。

刻季は安心させるように声を落とす

「やりすぎないようにするから大丈夫だよ。心配しないで」と優しく囁く。

それでも萌葱はまだ不安そうな表情が隠れない。

しかし他にはどうしようもないので萌葱を放っておき華音の方を見た。

華音は驚きから回復させて言った。

「決闘をお受けいたします」

彼女の声がアンティーク調な部屋に響いた。

第05話 能力（前書き）

読者様ありがとうございます。

それでは……

刻季いっきまーす！（笑）

第05話 能力

あれから役員達と空明ヶ崎学園第5体育館に来ていた。刻季は最初この学園の地図を見たとき驚愕した。

学園が東京都の約1／20を全て所有しているのだ。

その中に校舎や寮や医療機関、国道やモノレールの線路に空港、飲食店やショップやレジャースポット、そして政府や研究機関など。ここにはないものは、歴史的な建造物や海くらのものだ。山はある。

学園都市、いや都市学園に近いのかもしれない。

ちなみに他の区の優遇学園はこの学園よりも規模が大きい。

学園生で庭付き3階建ての家なんてのがある人もいる。

古い名家の人たちは、その大抵の家が学園の一部を所有しているの
で寮住まいせず実家から通ったりもする。

萌葱もそのうちの一人だ。

空学は生徒数も尋常でなければ、日本規模の学校なのでここでなんでも済ませてしまえる。

その代わり極力学園外へ出ることは原則禁じられている。

そして彼らがいるここ第5体育館は学園が所持している12個の体育館の中の一つだ。

現在開いている体育館が第5の他に第11しか空いていなかったの
で、どちらかと言えば近い第5体育館へタクシーで来ていた。

近いと言っても20分程かかったが。

保美によると学園内の体育館は魔術の使用を想定して作られている
ので、壁や天井などは鋼鉄でできていてその上に詳しくはわからない
いそうだが強力な耐久魔法・防護魔法がかけられているそうだ。

これほど対策をたてているにもかかわらずまれに修復が必要になることがあるらしい。

今回もそうなるのであろうか、と役員みんなは不安がっていた。会長はそれほどまでに強いのか、と刻季は不安になるどころか楽しみにになった。

別段戦いが好きなのではないが、強い人は単純に興味があると彼は言う。

タクシーの中で異が必死になって説得していた。

こんなの入った後にやりにくくなるだけだ、魔術が使えないのにとうするつもりだ、等々。

もう異の中で刻季が入ることは確定しているみたいだ。まだ戦う前なのに関わらず…。

失礼な、と刻季は少し思ったが言わないでおいた。

体育館の半ほどまで行くと、刻季は華音と向かい合う。

離れている役員たちの緊張感が伝わってくるが、華音は平然としている。

役員はきつと僕を心配しているんだろう、と刻季も気づいた。

萌葱も不安そうな面持ちを切らずに眺めている。

「二人ともいいですか？」

臨時審判の異が確認する。

今二人の距離は決闘で一般的な初期距離の10m程度離れている。

「ええ、大丈夫です。羽間さん、よろしくお願い致します。」

離れている華音が優しい声音で言う。

決闘前なのに、仁吾とはえらい違いだ、と刻季は口元を緩ませる。

「こちらこそよろしく願います。」

俺は軽く頭を下げて応じる。

異は確認が終わると一回深呼吸をし、落ち着きはらった。

そして二人を交互に見ると

「始め！」

決闘が始まった。

「行きます！」

華音が動き出す。

遠隔的な攻撃魔術は使わず、強化魔術と加速魔術を使用してこちらへ一気に近づく。

自分が魔力を使用していないので消耗の早い攻撃魔術を使わず、手短で、安全で、魔力の消費も少なく済む打撃で終わらせようとしたのだろう、と刻季は理解した。

ものの一瞬で華音が右足、左足とたった2歩進むと二人の間にあった距離は半分ほどになる。

彼女は体の動き方できつと身体の硬化魔術も使っている、と悟っていた。

打撃だと勝負は決しやすいがカウンターに気をつけなければならぬ。

その華音は刻季の近く3 m程に来ると、途端に動きが遅くなる。

まるで重たい何かを背負っているような動きだ。

それは錯覚でしかないのだがそう比喻するのが一番しっくりきた。

先ほどより数段動きが鈍くなる。

何が起こったかわからない。わかってない。

あまりのことに反射的に刻季から距離を取るようにする。

華音はその時使用していた魔術、そして魔力が消えていることに気が付き、

そして驚愕した。

魔術を消滅できる魔術。

魔力を消散できる魔術。

そのような類の魔術は、現在この世界では存在が確認されていない。同じ威力の魔術同士をぶつけることによって似たようなことは可能だが、目の前にいる彼は魔術が使えないと言っていた。

そんな嘘をつくとも思えないうえ、魔術の使用動作もまるで確認できなかった。

しかし確かに華音の魔術は消えていた。使用した魔力ごと……

魔術自体昔からすると決して常識とは言いがたい。

だが目の前の彼に比べると、非常識の度合いに開きがありすぎた。

そう思うと、そう思い始めると、目の前の存在に恐怖する。

決闘をすると決めてから、手を抜こうなど全く思っていなかった。確かに魔術が使えないとは聞いていたが、それでも決闘を申し込むからには何か他の手立てで勝利をとりに来ると思っていた。

だから彼に失礼のないように、入ってもらった後も諍いが残らないように、気絶程度におさえるように、それでもしっかりと闘おうとした。

そんな気遣いを微塵も必要としていなかった。

目の前の少年は決闘が始まると、年相応の笑みを浮かべていた。つい先ほどの勧誘していた時の大人びた様子は残っていない。

本気で楽しんでいる。

生徒会長である華音を前にして……

この学園に今までそのような生徒が入ってきたことは無かった。少なくとも華音が入学してからはいなかった。

それどころか決闘の申し込みも数えるほどの生徒からしか来なかった。

この学園での一番の規格外、それが――空明ヶ崎学園生徒会長、天原花音だ……

それ以上の規格外――”それ以上”で片づけられない程の……それではおこがしいほどの――と今対峙しているのだと身体中が警告を発している。

しかし、その危機を眼前に晒しながら、驚愕しながらもそれを隠さず華音は笑みを浮かべる。

刻季はそれを見て、更に無邪気に笑った。

「羽間さん、私は少し……いえ大分あなたのことを侮っていたようです。申し訳ございません。そして……」

彼女は息を溜めるようにしながらも笑っていた。

今まで見た表情で一番愛らしい笑顔だ。

「本気を出させていただきます！」

きつと会長は力を抑えに抑えて戦っていたのだろう、と刻季は思った。

役員は驚いている。このヒョロそうな生徒に本気を出すということはどうなるか分かっているようだ。

その上魔術も使えない。

下手すれば死ぬこともあるだろうと当然のように役員は思っていた。幸継は早く終われ〜とわかりやすい顔をしていた。

萌葱は別の点で不安になっているようだ。
しかしやめられない。

強者との戦いを……。

——あくまで相対的な強者だ。

——絶対的な強者は自分だ。

——だから負けない。

「会長に本気を出していただき光栄です。だから……」

意地悪そうな笑みを浮かべ、

「この能力は内緒ですよ？」

能力をしっかりと使うことにする。

華音が動く。

先ほどに比べられない程、段違いの速さで近づく。近づいてくる。

刻季は能力の範囲を広げる。

華音が魔術の消滅と思っていた行為は似て非なるものだった。

実際には、魔術を強制解体し、魔力を吸収する。

相手の魔術を、魔力を自分のものにする。

そして自分で使う。

唯一自分で使える方法で……

華音は人間に出せる速度をとんでもなく超えて刻季の後ろを取る。

後ろから攻撃を加え一瞬で勝負を決しようとしている。

刻季はそれを見越していたような様子で、空気中にて浮遊している魔力（その場合、マナという）の吸収と華音の使用魔力の吸引を感じ、能力の使用条件が整ったことを把握した。

異能だ。

使う能力は魔法ではない。

異能だ。

能力を発動する。魔力の世界では散々忌み嫌われ、研究対象とされかけた、自分だけの能力。

僕だけのもの。

この能力は僕だけのものだ。

能力を発動させる。

途端に華音の動きが止まる。周りのみんなも止まっている。

もちろん驚いて止まっているのではない。

物理的に止まっている。

魔法の代わりに使える能力。

時を止める能力。

制限時間は今の自分の魔力の蓄積量だ。そう余裕はない。

相手はさすが会長だけあって魔法の使い方に無駄がない。

これは確かに本気だ。

予想より魔力の吸引が出来なかった。

しかしそれでもやることはやれる。

徐々に減っていく魔力に気付きながらも華音に近寄り拳を握る。

能力を解除しながらそのままそれを腹に叩き込む。

女性に対してなので優しめに、と一応言い訳はしておく。

ぐふっと衝撃で息を吐き、華音は膝をつく。苦しそうにせき込んでいる。

そして恐る恐る刻季の足元あった視線を上げる。

見上げる華音の眼には、鎮痛の思いと驚愕――何が起こったのかわからないといった思いが書いてあるようだった。美貌が揺らいでいる。

周りも萌葱以外は状況の把握をしていない。

男性陣に限っては口をあんぐりと開けていた。きっと華音は畏敬の対象だったのだろう。

数十秒時間が流れる。

誰も口を開こうとしない。

無言に堪えかねて俺は、「え、ええと…」と声をもらす。

まだ誰にも動きも返事もない。

「あの、だいじょうぶですか？」

その声にやっと我に返ったかのように、眼に力が戻った華音は

「あ…、はい。心配いりません」

ようやく返事をした。

「い、一応僕の勝ちでいいですかね」

「はい。それは良いのですが、何が起こったのですか？」

言いにくいことをいきなり聞いてきた。刻季は視線をあちらこちらに逸らす。

そこで体に力が戻ったらしい華音は立ち上がり

「羽間さん、私は負けました。参りました。」

と深く頭を下げた。

役員みんながこちらに集まってきた。

みんなの視線が刻季に集まる。萌葱は彼を安心したような、しかしどこか非難するような目で見てくる。

甘んじて受けようとは思いながらも怖くて目を合わせられない。

「えーと、よくわかんないけど刻季君の勝ちってことなのかな……？」

巽が驚愕を隠さずに言った。

「ええ、たぶん……僕の勝ちだと思いますけど」

「それで、どうやって勝ったの？」

巽が疑問をぶつけてくる。他の役員も同じのようだ。

助けを求めて萌葱に目線をやると、怒ったように、フンッと無視をしてくれる。

要するに長い永い付き合いの幼馴染は助けてはくれないらしい。

この状況はもとはと言えば萌葱のせいじゃないのか……、疑問が湧いたが結局のところ自分のせいだ。

それだけのことをしてしまったのだから仕方がない。

その間も巽たちはこちらへ向ける疑問と困惑、興味をそらさない。

そこまで身長が低いわけではないが皆を上目づかいで見るような感じになっていく。

「あのですね……、これには事情がありました……」

「事情とは？」

「それは……色々な……」

「色々とは？」

「そ、それは……」

攻撃の手を緩めようとしない役員達。

気を使うだけの余裕は華音が負けてなくなったらしい。

あまりにも問いかげに困った刻季が次に取った行動は
「し、失礼します！」

逃走だった。

それはもうボルトも吃驚の逃げ足だった。

「羽間さん！？」

「刻季！？」

二人のそろった驚く声が聞こえる。

「あの馬鹿……！」

ついでに罵倒も後ろで微かに聞こえた。

第05話 能力（後書き）

次回華音がデレる予定です（笑）
はやーとかの意見は勘弁してください。

出来る限り早く更新したいですが、少し遅れるかもしれません。

第06話 主人とメイド？（前書き）

長かった。

今回もきつと修正がいるでしょう。

気になることあったら何でもお聞きしてください。

第06話 主人とメイド？

その日の夜、寮の自室の隣の仁吾の部屋に来ていた。

「じゃあ、完全に南雲に騙されていたわけだ。ハッハッハ……！」

「笑い事じゃないよ……」

一通り説明した後起こったのは、仁吾の爆笑だった。

「でも別に入ればよかったんじゃないのか？ 考えればおいしいことだらけだろ。卒業後の事もバッチリだし、あの生徒会長と一緒にいられるわけなんだし、なんで断ったんだ？」

「確かに良いことは多いよ。でも魔法が使えるわけじゃないしね。そんなの申し訳ないから」

「それでもいいって話なんだろう？ 決闘してまで断らなくても……」

「でもそれだけ僕的能力が人に知られる。」

刻季は決然としたように言った。

そして仁吾は気づいたみたいに

「そういえばそうだな……。でもお前生徒会の面々で使ったんじゃないのか？」

「うっ……。けどそうするしかなかったし、萌葱は生徒会のみんなは信用できるって言ってたし……」

「南雲がそう言ってたならそうかもしれないけどな。できる限り気をつけるべきだろ。刻季はどこか問題を好む傾向があるからよ。」

「仁吾ほどじゃないよ……」

そうかな、と仁吾はポリポリと頭を？く。

「中学のときに問題を起こしてなぜか一緒に僕まで怒られていたのを忘れてないだろうな」

「まあ……過去は過去、だろ」

「そんな台詞で済まされるほど軽い問題ばっかじゃないでしょ……。あの小学生のときはそれなりの温厚派で知られていた萌葱が規則とかに厳しくなりだしたのは仁吾のせいだからな。本当に可愛いやつだったのに……」

純粹で無垢な子だったと刻季は記憶している。

「確かに俺が知ってるのは厳しい南雲だけだな。でも今でも可愛くないわけではないだろ」

「まあ……。ね。容姿は抜群に可愛いよ。それこそ生徒会入っても良いくらいにね」

「その点は刻季も劣ってないだろ」

「冗談やめてよ。別に冴えない奴でいいから……。それくらい自分でわかってる」

謙遜しているようには見えない。

「別に冗談じゃねえけどな。お前がそう言うなら良いよ。どうせモテても南雲のモンなんだし」

「萌葱とは別になんでもないただの幼馴染だよ」

「ふん」

仁吾は意味深な笑みを浮かべる。

「まあとにかく一件落着したのか？」

「萌葱がうまく言っといってくれれば……。たぶん、あるいは、」

「どちらにせよ明日になればわかるか。どうせ朝はいつものがあるだろ」

「見ない日はないからあるんじゃないの？ んじゃ部屋に戻るよ。おやすみ」

「おう！ おやすみ。明日が楽しみだな」

「変わってくれるか？」

「あの会長なら……。構わない」

なんて軽口をたたきながら仁吾の部屋を出る。

相談のつもりで来たのだが相談にならなかった。

しかし気持ちはそれなりに晴れているようだった。

なんか愚痴を言いにきたみたいで情けない、と自嘲気味にそう思っ
て隣にある自室のドアを開ける。

まだ6時を回った程度だが、今日はいろいろあったからシャワーを
浴びて直ぐに布団に入ろうと意気込みながら……。

ドアの奥には何かいた。

いや何かでは失礼だろう。

華音がいた。

制服姿にエプロンをかけて。

顔には表情らしい表情がなかった。

今日は色々あった為、何かと思うことがあって彼女の顔に笑みは浮
かんでいたが、実際はクールな人なのかもしれないな、と異常事態
に瀕して刻季は冷静に分析していた。

やっ和我に返る。

だが我に返ったところで目の前の異常が変わるわけではない。

……なんだ？ 何が起こっているんだ？

何故僕の部屋に天原会長が？

ていうか何その格好！？ 若妻なのか！？ 若奥様なのか！？

、と刻季の頭の中に様々な疑問を駆け巡る。

思考が追いついていかない。

今日のことの疲れや華音に対する罪悪感に加え、目の前で起こって

いることのせいで混乱に拍車がかかる。

彼女は無表情ながらも確たる意志を持ってこう言った。

「おかえりなさいませ、羽間様」

・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

あまりのことに唾然とする刻季。

その様子にキョトンと小首を傾げながらも一度

「おかえりなさいませ、羽間様」

聞こえてないと思ったらしい。

二人しかいないこの空間で聞こえないなんてこと有り得ないのだが
……

「え、ええ……。ただいまかえりました……」

色々な疑問が生まれるなか、やっと出てきた言葉は何故か普通の返事だった。

「はい、おかえりなさいませ。ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも……」

そこで頬を赤らめて言う華音。

その表情は世界中の男を虜にすることができる力をきつと持っているだろう。

ホントになんなんだ！？

こんな表情をもらえるようなことを僕はしていないはずなのだが……

刻季の今日したこと

・生徒会に入ると思われていたのをあっけなく断った（原因は萌葱にもあると言っているよね？）

・失礼にも決闘を申し込んだ（やむを得なかった事情有りと思われる）

・魔術が使えないと言っておいて似たような能力を使った（もしかして騙したことになるのか？）

・腹に拳を叩きこんだ（……………）

……思い返してみても洒落にならないことばかりやっていた。

特に最後のは酷い……

それなのにも関わらず目の間にいる女性は刻季に向かって素晴らしい表情を向けている。

（やばい、惚れそうだ。）

……と刻季が思ったかは定かではないが、そうなるのも仕方ないと思えるほど魅力的な表情だ。

華音は頬を赤らめたまま、刻季の返事を待っているようだった。

「あの……会長？」

「はい？ ご飯の用意もお風呂の用意もしてありますよ。そして……」

そしての後が気になったが

「いや、それは一先ず置いておいてください」

「そう……、ですか？」

ちょこん、と首をかしげている。

「それではなんなのでしょう？」

「では……。何故会長が俺の部屋にいるのですか？」

「それは、羽間様にご奉仕をしようと思ひまして」

「そしてその羽間『様』ってのはなんなんです！？」

あまりにも聞き逃せない言葉だ。

「お仕えする方をその様に呼ぶのは間違っているでしょうか」

「お仕えする……？」

当然のように哑然となる。

もちろん「仕える」という意味が理解できないわけではないが、理解を拒んでいる感覚を脳に感じている。

「はい。私は決闘の敗者ですから」

とあっさり言い放つ。

「なぜ負けると仕えることになるんでしょうか……？」

「私は天原家ですから……」

と華音の顔に少しの影が差した。

「天原家は魔術師の家です。魔術師とは弱者が強者に仕えるとなっています」

確かに刻季も昔の魔術師はそうにして家を大きくしていくと、家格を高めると聞いたことがあった。

たしか必修科目である『魔法史』で習った。

しかし、

「今はそんな時代でもないじゃないですか」

現代では魔術は誰にでも学べるところにある。

昔の魔術師の数百倍、数千倍の数があるのだ。

そんなことをしなくても家は大きくなる上に、才能さえあれば人が集まる。

実際弟子などを取っている例もいくつもある。

それでも華音はそんな返事を予測していたかのように

「私の家は天原です」

「……」

天原家

トウエルフス

12 師団の一角にして魔術の歴史そのもの。

それこそ日本魔術史の最初から名前が出てくるほどの古い家だ。その名前が出てくるとなかなか言い返せなくなるが知り合いに一人師団の家の出がいる。

「でも萌葱とは決闘をしてもその様なことにはなりませんでしたよ？」

萌葱とは物心がつく頃から戦いをしていた。

刻季が負けることはなかった。

南雲家も師団の家だ。

萌葱の父親の代で現在の師団の次席に就任している。

「南雲家は新しい血を入れることを積極的に行っています。そして現在の当主も寛容な方です。そのようなことになることは無いでしょう」

刻季は、確かに萌葱の父親がそんなことを気にしている素振りはなかったなあ、とどこか他人ごとのように思っている。

「しかし天原は違います。記録によると現代まで20旅団以下の家格との婚姻がなされたことは一度もございません」
フリゲイト

20 旅団は師団の直の下位組織にあたる20の家だ。

成立は師団の成立から50年後だったと刻季は記憶していた。

要するに、根っからの古い家ということだ。

魔術師の血を薄めないように婚姻まで仕切っている。

そんなことまでする家柄で過去の事だと、過去にだけ行われていた事だと割りきれなかったようだ。

「たとえ羽間様がお仕えないことをお許しなさると申されましても、私のお父様は許すことは無いでしょう。なので是非、私を傍に

置いてください」

ここにきてようやく、どうやら自分はどうでもないことをしてしまったらしい、と刻季はようやく思い至った。

華音の意思は固いようだった。

この部屋に来てからの確たる意志を持った瞳は少しも色を損ねていない。

その瞳を見ながら刻季がしたことは

「あの、とりあえず仕えるとか仕えないとかは置いておいてください」

先延ばしだった。

「色々聞きたいことがあるんですが聞いても良いでしょうか？」

「はい、我が君。なんでもお答えしましょう。それと敬語をやめてください」

敬語の事は無視をして質問をすることにした。

「では遠慮なく……」

前置きをしっかりと置き

「その格好はなんなんですか!？」

制服姿にエプロンという男子高校生が彼女にやってもらいたいシチュエーショントップ10に入るであろう憧れの格好だ。

「これですか？」

と華音はエプロンの裾を掴んで言った。

刻季が首をコクコクと振ると珍しくすこし不安そうな表情を浮かべ

「似合っていないでしょうか？」

「いやめっちゃくちや似合ってますよ!!」

思わず叫んでしまったようだ。

そして華音はその答えに安心したように微笑んだ

「それは良かったです。ありがとうございます」

彼女の笑顔には魔力が込められているのではと推測出来るほど魅力的な笑顔だ。

「ってそうじゃなくて！　なんでそんな格好してるんですか？」

「羽間様がお喜びになると思いました……」

「確かに僕は今この降って湧いたようなこのシチュエーションになり喜んでますが……」

本音をぶちまけている刻季。

ありがたく状況を享受しているようだった。

「まあそれは置いておいて……」

しかも嬉しいからそのままにしておくようだった。

意外とちゃっかりとした少年なのかもしれない、と華音は分析していた。

「それから、ここ男子寮ですよ？」

刻季がそう言ってもキョトンとして、なにが？　って様子だ。

「どうやって入ったんですか？」

「生徒会権限です」

「それ悪用しすぎですよね！？」

たしか刻季が生徒会に入ること断った時も使っていた。

「ですが、なかなか入ってくださると仰らなかったもので……」

「僕の意味は！？」

拗ねたように言う華音に刻季はつつこんだ。

もしかしたら彼はツツコミなのかもしれない。

「南雲さんから入ると聞かされていて、突然断られると意地になっ

てしまうものです」

頬を膨らませて華音は懽然して言った。

萌葱は何と伝えたのだろうか、と気になっている。

「僕入るだなんて全く言っていないんですけどね……」

「そんなに生徒会に入るのが嫌でしたか？」

「決して嫌なわけではないですが、……むしろかなりの高待遇でぶっちゃけ入りたかったです」

「ならどうして……」

「僕魔法が使えませんから」

にこっと笑って言う刻季。

すると何故か華音は顔を赤らめた。

「あなた様の笑顔はどこかずるくて、凶悪ですね……」

「え？　なんですか？」

刻季は華音がボソッと小さい声で言ったため聞こえていないようだ。

「いえ、なんでもございません」

「そうですか……」

刻季もそこまで気になっていなかった。

「それでは何故私は羽間様に負けたのでしょうか？」

華音は赤らめた顔を元の無表情に戻すと言った。

「魔術が使えない羽間様にどうして私は完敗したのでしょうか？」

「答えなきゃダメですかね……？」

「もちろん、強く聞くことは出来ません。しかし仕えることになった以上主人の事は出来る限り知りりたいと思っています」

それは真剣な願いだった。

「仕えるとか主人とかうんぬんかんぬんは置いてお教えします。ですが約束があります。他人にこの情報を教えないでください」

「他人とはどの辺りから他人に該当するのでしょうか？」

「先程あの場にいた方達なら大丈夫でしょう。萌葱も信用しているようでしたし、僕の代わりに説明してもらえると逆にありがたいくらいです」

「かしこまりました、我が君」

恭しく頭を下げる。

刻季は何かこの女性がやることは全て様になっている気がすると思っていた。

説明を始める。

ここまで踏み込んできた人は久しぶりだった。

「僕は魔術が使いません。しかしそれは魔力が無いということではないと昨日も言いましたよね？」

「はい。人より魔力所有値が高いぐらいでした」

「そうです。魔力の所有値が高いということは即ち、魔力をより多く身体に溜めることができます。そこに昨日はあなたの魔術で使用していた魔力を吸収し溜めました」

「魔力を吸収し溜める……？」

「僕は特異体質なんです。最高で5mほどの近さにある魔力を吸収することが出来ます」

「もしかして魔術が突然消えていたのは……」

「失礼ながら僕が吸収しました」

「ですが今は何ともありませんが……？」

「魔力を吸収する範囲は自分である程度調整できます。だから現在は僕の0距離のところの魔力が吸われているということになります。それと僕が吸収出来る魔力は体外に無いとダメなんで一度魔術などを使用しないと吸収できません」

「色々と制約のあるモノなのですね」
しみじみとした感じで華音が言った。
なかなか順応能力が高い。

だがこの能力はそれだけで終わらない。

「そしてこの魔力を僕は使うことができます」

「ですが羽間様は魔術が使えないと……」

「魔術は使えません。いくら練習しても使えないままです。ですが魔力は使えます」

「魔力を使うと魔術を使うとはどう違うのでしょうか？」

確かにほとんど同じ意味の言葉だ。

「吸収した魔力を使う能力です」

「能力ですか……」

吸収よりも恐ろしい能力。

忌避された能力

「それは時間を止めることです」

「時間を止める能力……？」
ちから

「はい。自分にある総魔力量の分だけ止められます。そしてその間だけは僕以外の存在は何もすることができません。ただただ止まっています」

淡々とその様子を思い浮かべながら刻季は説明した。

「もしかして突然殴られたのは……」

「もちろん使いました。あの節はどうもすいませんでした」

殴ったことを思い出してペコリと頭を下げる刻季。

「しかし能力を使わない限り勝てないと思いましたから使いました。会長は本当に強いです。能力を使わなきゃあっけなくぼろ負けして

いたでしょう」

「いえ、我が君。その能力も含めてこそ羽間様です。私が勝つなどというそんなおこがましいこと仰らないでください」
なんか本気で言ってるようだった。ほぼ心酔の域だ。

困りながら刻季は言った

「僕なんて碌でもない人間ですから。そんなこと言わないでください」

「羽間様が碌でも無いなんてことは万が一にもございません。冗談でもそんなこと仰らないでください。私悲しいです」
思わず同情したくなるくらい悲しさが伝わってきた。
僕の事なのに……、と刻季が刻季自身に同情しかけた。

刻季は埒があかなかったたので話を進めることにした。

「と、とにかく！　僕はこの能力があるから生徒会に入ることではできません。せつかくお誘いいただきましたが……」

「もう生徒会は良いんです」

「……へ？」

刻季は情けない声を出した。

「役職上とは言え、私の下に羽間様を据えることはできません。まさか生徒会長をやめるわけにはいきませんし」

「そっちッスか！？」

「そっちッス！」

華音が碎けたセリフを初めて聞いた。

言った本人は照れて顔を赤らめている。

なんかギャップっていいね！！

と、刻季は声高に叫びたかったが、華音の手前我慢した。

「それでは質問は終わりでしょうか？ 羽間様」

顔を赤くしながら華音は言った。

「あと二つほどいいですか？」

「はい。なんでもお聞きしてください。」

「その羽間『様』と言うのは何とかならないんですかね？」

2つも歳下に様呼ばわりは無いだろう。

「『羽間』様、ではお気に召しませんか？」

「気に入らないってわけではないんですよ。ですがやっぱりこう……、そうだ！ 出来るだけ親しみを込めた呼び方がいいんじゃないんですかね？」

「親しみですか？」

華音はその言葉を聞いた瞬間ぷるぷると震えだした。

何かやらかしたかと刻季は不安がるが。

「私、嬉しいですよ！ 主人となられる方にそこまで気を使っていただいて」

苦し紛れに言った言葉で思いのほか喜んでくれた純粋な華音は満面の笑みを浮かべて言った。

「えっ……あっはい！ 喜んでもらえて嬉しいなあ……」

目が完全に泳ぎながら言っている。

いつの間にか主人という単語を許容していることに刻季は気づいていない。

「嬉しいですがその前に羽間様、私への言葉づかいを何とかしてくださらないと困ります。これからは私の事を華音と呼び、敬語をやめてください」

「えええっ……、それはちょっと……」

「それでは呼び方は残念ですが、そのまま据え置きとさせていただきます」

厳しく言い放つ華音。なんか通販番組みたいではないだろうか。

「わかりました。……いやわかったよ。華音………さん」

「『羽間様』」

睨まれた。

あの美女がこんな威圧を放てるのかと思うくらい。

萌葱も怖い……、と刻季は思い至った。

しかしこれでは呼び方を変えないらしい。

恥ずかしさが頂点に登りながらも意を決して

「華音」

名前を呼んだ。

華音自身も恥ずかしくなりながらも

「はい、刻季様」

にっこりと……

笑ったのは良いのだが！ 笑ったは良いのだが！ 可愛いのだが！

「刻季『様』じゃなんにも変わって無いんじゃないかな？」

「『羽間』様から『刻季』様ではだいたい変わっていると思いますが、親しみも込みますし」

根本的な解決になって無かった。

「ダメでしょうか……？ わかりました。あまりに生意気すぎでした。反省します」

無表情だがどこか悲しそうにしながら言った。

しかし華音はその後も

「でしたら『旦那』様とお呼びさせていただいてもよろしいですか

？」

爆弾を落とした。

エプロン着てもらい『旦那様』とは良い身分である。

今の時点で萌葱に一回、仁吾に一回、学園の生徒に数百回殺される心配があるのだ。

刻季の新しい友人にも華音のファンは多数いる。

だからなんとかそれだけは回避しようと刻季は頭を下げながら

「それだけは勘弁して……、刻季で構いませんから……」

華音はパツと顔を明るくして言った。

「はい！　我が君、刻季様」

結局根本的な解決には至らなかった。

しかしこの表情が今僕にだけ見れるなら良いかな、と刻季は思っていた。

殺されることは変わらない気がするが……。

「それで刻季様、もうひとつの質問は何なのでしょうか？」

刻季は今一番向きあいたくなくて目を瞑って逃れようとしていたものに触れることにする。

逃れられないと判断したのだろう。

そして声を張り……

「そのでかいボストンバックはなんなの！？」

見えていたのだ、しかし見たくなかった。

思いつきりバックの口は開いていて中には服やら化粧ポーチやらが顔を出して覗いている。

短くても1週間程度外で過ごせそうな量の日用品だろう。

またしてもキョトンとしている。

「それはお泊ま……」

刻季はそこで華音の話を区切った。聞きたくない単語が聞こえてきそうな気がしたからだ。半分以上聞こえているようなものだが

「華音は自宅から学園に通っているんだよね!？」

強引にそこまで聞きたくないことを聞く刻季。

不審に思いながらも丁寧な華音は答えた。

「ええ、私の家は都市学園内にありますから。……あの、それがなんなのでしょうか? 刻季様」

「帰る家が近くにあっという間! 僕なんかも10日以上も帰ってないから、姉さんが今頃寂しがってるんじゃないのかなあ! いやあ羨ましい。僕も家が近くにあったら毎日そこに帰るよ!」

まるでわけのわからないことを言いながら、何とか華音を自宅に帰そうとしている刻季。

ただそんなのが通じるわけもなく。

「私も今日から当分帰れないですね。少し寂しいです」

何処から帰れないんだ? とは聞けなかった。

答えははっきりしている。

あまり権力を使うことを良しとしなさそうな彼女が権限を使ってまで男子寮に入っていることが何よりの証拠だろう。

でも聞かなければいけない。

答えが未定から確定に変わってしまったとしても。

今日何回目だ思えるくらい意を決して刻季は聞いた。

「華音はこれから帰るんだよね?」

「何言ってるんですか? 刻季様。もちろんこれからのお世話をさ

せていただくに決まっているじゃないですか」
ものすごいいい気味で答えをかぶせてきた。

刻季が帰ると発するとほぼ同時に返ってきた。
少し声が弾んでいる為、表情は無いがどこかルンルンしているように見える。

やはり聞きたくなかった。

学園は国立の為お金あるが、生徒に使えるのは限られていて学生寮はいくつもあるがそう大差はなく、すべてワンルームである。

このあとこの美女を返すのに3時間程かかって、華音が作った食事を食べる前に寝てしまった。
それにしても良く帰ってくれたな、と夢の中で刻季はおもった。

第06話 主人とメイド？（後書き）

華音キャラ変わりすぎだろ、とかすいません。
好みのキャラにしすぎました。

今回で完璧にストックが無くなりました。

プロットはあるのですが、合っていないようなもんです（笑）

出来る限り早く更新したいと思います。

次回でやっと冒頭に戻ります。
ホントに長い一日だ。

第07話 ビーフシチュー（前書き）

結局プロローグ行く前に切ってしまいました。
すみません……

第07話 ビーフシチュー

朝になって刻季は狭い所に設置されたキッチンに向かった。キッチンには一つの鍋が置いてある。

蓋を取ってみると中には美味しそうなビーフシチューが鍋いっぱいに入っていた。

美味しそうな料理を見てする行為ではないとわかっていつつも刻季はため息をついた。

運が良ければ昨日の事全て無かったことになってないかなあと思っていたが、そう都合のいいことは起こらないらしい。僕がいったい何をしたんだ……、と刻季は嘆くがそれなりのことをしちやっているの神に見放されても仕方ないだろう。

刻季は珍しく仁吾を朝から部屋に呼び入れた。

「さあ食べよう！ いただきます」

無理にテンションを上げて、仁吾にビーフシチューを勧める。

「なあ刻季。なんで朝からこんなの食わせんだ？ 俺正直腹もたれそうなんだけど……。しかも量もこれ一人分じゃねえだろ」

「いやあ、昨日楽しくなっちゃって作りすぎちゃったかな」

「昨日あの落ち込みようだったのに何があったんだ？」

仁吾が不振に思い始める。

内心では焦っているが隠しながら言い訳を始める。

「悩んでいても仕方ないし。よくよく考えてみれば、萌葱は事情知ってるからきつとなんとかしてくれたんじゃないかって思ってたね」
「まあ南雲ならそうするだろうな。……それで気を持ち直してこれ

か？」

「仁吾ビーフシチュー好きじゃなかったっけ？」

流石に3年の付き合いともなると好物も知っている。

そして刻季が料理好きな上、家事万能男だと知っているから味の心配はしてないだろう。

過去に刻季はホントに嫁にしたい男だよなと、本気とも冗談ともとれる顔で言われたことがある。

気を落としながら仁吾は

「好きだけだよ……、好きだけど朝食食べるのはちょっと……。それに量も半端ないぞ」

「大丈夫、大丈夫。ていうか朝しっかり食べないと元気でないよ」

「これは食べすぎだろ！」

仁吾は声を上げた。

ダイニングテーブルの上にはシチューを始め、フランクパン、サラダが約5人前ぐらい置いてある。

客観的に見ると確かにかなり多い、と刻季は思っていた。

華音は一体、どれほど刻季に食わせるつもりだったのだろうか。

自分の事を棚に置いて仁吾に消費させようとした。

仁吾は大食いだが、それでも残りそうなくらい多かった。

しかし悩んでいても仕方がないので刻季は一口、スプーンを口に運んだ。

美味い。

声を失わせるほど美味しいシチューだった。

体の細胞がなんか喜んでいるというなんとも奇妙な経験をしている。目の前で恍惚こうこつとした刻季を見ながら、なんだこいつ？と思ひながら

仁吾も一口啜る。

恍惚となった。

頬が緩んで男前の顔を台無しにして。

「お前の料理ってこんな美味しかったっけ？」

実に張りのない声を出して、どうしてもよさそうに聞いている。

「ハハハ、ウフフ」

刻季はなんとも気持ち悪い声を出して誤魔化していた。

「ハハハ、アハハ」

なんか仁吾にも伝染^{うつ}ってる。

気持ち悪い二人が5人前をたいらげたのは、それから30分もしない頃だった。

結局全て美味しくいただいたちゃったみたいだ。

今刻季と仁吾は二人で寮から出て学園の校舎に向かっている。

学園までの距離はそこまで遠くない。

通常の学校に通う学生の半分くらいの短さなので、割合楽に、悠々と通っている方だろう。

食事時は無理に明るくしていた気分は、やはり生徒会のいつもの集まりがあると思うと刻季は歩きながら憂鬱になってきた。

時間を止めるなんて云うとんでもない力があるくせに、学園に着こうと経っている時間が止まらないかなあ、と冗談にならないことを思っていた。

やがて校門が見えて、その先にいつも通りの人ばかりを見つけた。心がどんどん曇っているのを理解しつつも通らなければいけない――校門（壁）を超える。

しかし壁はひとつではない。

むしろ次の壁を越えたら本日はそれなりに幸せな時間を過ごすことができるだろう。

横で話しかけてくる仁吾の事を見る余裕すらなく一人ごみ（壁）の横を急いで抜けようとしている刻季の心臓はドキドキのバクバクだった。

そんな状態の刻季を訝しみながらも、昨日の事を知っている仁吾は気をつかい刻季と並んで横を通り過ぎようとする。

人ごみの真横に到達した頃だろう、刻季はチラッと中心を見た。

中にいる生徒会の面々は悉く刻季の方を見ていた。

実際は人ごみのせいでこちらが見えるわけではないのだが、みんながモデル体形で身長が高いことと、横にいる仁吾の大きさが目立つことからだいたい視線がこちらに向いていることがわかっていた。

今日は萌葱もその中にいた。刻季を思いっきり睨むような眼つきで見ている。

睨まれてもその場を離れることしかできないのでいそいそと動きをはやめる。

仁吾もその動きに気付いたのか、それとも萌葱の眼つきに恐れをなしたのか、刻季の動きに同調する。

人ごみに混ざらない人自体あまりいないのに、二人組で避けるように通ろうとしているので奇異の目からは避けられなかったが、刻季はこの場で止まって大変なことになるかもしれないほうが嫌なので甘んじてその視線を受け入れていた。

眼つきはそれぞれだが生徒会に加え、人ごみの人まで見ているという状態をなんとか耐えて下駄箱までたどり着いた。

そこまで来てようやく肩の力を抜く。

とたんに視線と喧騒から離れて安心したのか、刻季はため息をつく。それと同時に隣からもため息をつく声が聴こえた。

刻季たちは疲れ切った表情で顔を見合わせて苦笑いをするこゝろできなかった。

教室について仁吾は鞆を自分の席に置くと、そのまま座らずに刻季のところへ向かった。

昨日からの苦悩で参ってしまったている親友を慰めてやるためだろう。野獣の風貌で誤解されやすいが、こう見えて意外と世話焼きなのだ。

「刻季」

仁吾が声をかけると衰弱した様子の刻季が顔を上げた。

そのまま仁吾は刻季の前の席に横がけで座った。

「まあ元気出せよ。さっきのでこれからは手を出さないって意思表示だったんじゃないかねえのか？」

「だといいんだけどね……」

うなだれながら弱弱しい声で刻季が返した。

昨晚の事を知らない仁吾はこれで終わったと思っている。

だがこれだけで終わらないだろうということを刻季は何となくわか

っている。

「誘うつもりがないから来なかったんじゃないのか？ それに決闘の結果で誘うこともできないだろ」

誘われるより厄介なことになったとはもちろん言わない。ていうか言えない……

「決闘の結果が絶対の学園規律だからね。強い者がひたすら上に行くという実力主義は魔術師の学園らしいよ」

「幸いあの今代の生徒会長は平等主義なのか、割と居心地のいい学園になってるけどな、創立当初は結構ひどかったらしいぞ」

「ひどかったって？」

刻季が顔を上げて聞いた。

「たしか初代がクラスのAとGで格差をしっかりと作りそれを確立したとか、その次の代で、初代に心酔していた会長が生徒一人一人ランク付けにして、ランク上の人に対しては逆らえないような決まりを作ったりしたとかな」

「それは……」

ある程度予想していたが、それを超えていて絶句した。

「もしかして今もAとC、DとGで一括りにされているのってそれなの？」

「たぶんな。でもそういうのってなかなか消えるもんじゃないだろう？ だから残っていたって魔術師の風習みたいなもんだと思うしかないな。OBが改正を止めてると親父にも聞いたことがある」

「……なんのために？」

「実力主義を変えられたくないんだろ。上に立つ者としては」

魔術師は実力主義のもと形成されていると言っても過言ではない。

いや、魔術師は実力主義に徹しなければ衰退していっただろう。確実な上下関係を作り生き残ることを選んだ。

師団と旅団しかり、刻季と華音しかりだ。

前後では、希望したとしてないの違いがあるが。

「表向きは平等を謳ってるから一番質が悪いよな」

「それをわかっててもどうしようもないっていうのが悲しいね」

「長年この体制だったから変えるには時間がかかる。変えようと思わない連中が上にいるからもしかしたら永遠に変わらないのかもしれない」

「そのほうが安定もしてるし、仕方ないのかもしれないね」

「まあ安定感で言えば、平等主義より実力主義のがあるのは当然だな」

わかりきったことに、当たり前といった感じで返す仁吾。

「ま、一学生がこんなこと話しても意味がないけどな。将来出世するとしたら別の話になるが、師団が上にいるからには変わらないだろうな」

「師団かあ……」

「ああ、いや別に師団の家全部が悪いわけではないぞ。南雲家とかは柔軟な家だしさ」

「萌葱のお父さんも良い人だしね。師団が全部あんな家ならいいのになあ」

「無茶な話だな。上にいる連中が下に降りたいと思うわけがないだろ」

それが道理だった。

こんなこと話しても何も変わらないので、刻季は声を大きく出して言った。

「学園内が楽しいならいっか！」

「そうだな！ 学園生活を謳歌しよう！」
仁吾も奮い立った。

無理に元気をだそうと思っても出ないと思っていたが意外となんとかなるものだあと変なところで刻季は関心していた。

第07話 ビーフシチュー（後書き）

やっぱりプロローグの直前から話を始めたかったなので今回は少し短かったですが、前回の話と足して2で割ってください（笑）

第08話 始まりの物語の初め（前書き）

タイトルこそ格好のつけたものになっていますが……（笑）

第08話 始まりの物語の初め

——これまでの事は物語の始まりでしかない。

昼休み、教室内で食事をとろうとすると、席に数人集まってきた。

一人目は碓氷仁吾。

刻季の中学からの友達である。

二人目は南雲萌葱。

刻季の幼馴染で、生徒会に所属している。

三人目は陸奥竜也^{むつりゅうや}。

学園に入って知り合った同じクラスの友達だ。

四人目は阪野果歩^{さかのかほ}。

萌葱と仲良くなったことから、仲良くなったクラスメイトだ。

いきなり二人も新しいのが出てきて驚くのもわかるが、入学して10日程度経てば新しい友達ができるのも高校生の嗜みとしては当然のことだろう。

最近はおっぱら刻季を含め5人で食事やら班行動やらをしている。ちなみに朝の萌葱の不機嫌さはいつの間にか直っていた。

刻季の席を中心に群がるとまず竜也が口を開いた。

「天原会長、朝から綺麗だったなあ。あんな綺麗な人が同じ学園にいるっただけでテンション上がるぜー！」

初っ端からテンション全開の彼は、長身短髪で若々しさがにじみ出ているような男だ。

刻季は竜也に入学してすぐに声を掛けられた。

なんでも野獣の仁吾と美人の萌葱といつも一緒にいて仲が良さそうに見えたことから、少し？不思議に思ってた話しかけたそう。

声を掛けた人こそ竜也だけだったが、入学当初は色々注目を集めた。

だが、仁吾は言うまでもないが、師団次席の愛娘である萌葱もやはり声を掛けづらいのだ。

そしてこの長髪の根暗そうな男も……。

だが竜也の場合興味が上回ったらしい。

初めこそたどたどしい話し方だったがすぐに打ち解けて仁吾も含めてつるむようになった。

この3人に加え、萌葱と彼女の友達となった果歩とも自然と一緒にいるようになり気づけばグループのような形になっていた。

「ホントに綺麗でした。どんな生まれ方すればあのような美人になれるのでしょうか……」

こう言う果歩だが、実に愛らしい容姿をしている。

目鼻立ちがぱっちりしている童顔で成熟している美人とはお世辞にも言い難いが、無邪気さが多く残る表情には魅力があふれている。

「大丈夫よ。果歩も可愛いから」

ウインクして返す萌葱。

「そんなん。わたしなんて萌葱ちゃんにそんなこと言ってもらえる権利ありませんっ」

「なんの権利よ、それ……」

自分の魅力を当たり前のように理解していない果歩に呆れる萌葱。

「ねえねえ 刻季もそう思うでしょ？」

「うん。阪野さんも可愛いと思うよ」

「そんな……。ありがとうございます、羽間君まで。お二人ともお世辞が上手ですね」

そこまで自分を否定して楽しいのか、と思えたがもちろんそんな態度はおくびにも出さない刻季だった。

「ああ……。会長とお近づきになりたい」

「じゃあ南雲に頼んでみるよ。もしかしたら紹介してくれるかもしれないぞ」

ぼそつと言う竜也の言葉に無責任な仁吾。

「そうかその手があったか！ 南雲！ いや南雲様、ぜひこの卑しいわたくしめにしょ『断る！』——ってまだなんも言っていないだろ！」

「あんたみたいなの全員につきあってたら、きりが無くなるから絶対いや。それに会長が陸奥なんて相手にするわけないでしょ」
無然として言い放つ萌葱。

「わからないだろ！ もしかしたらいつの日か会長が俺のところに来て『あの雨の日、子猫を助けていたあなたに惹かれていました』って告白してくれるかもしれないだろ」

「あんた実際猫助けたの？」

「助けてないけど……」

「「「だめじゃん！」「」「」」

竜也以外の言葉が揃う。

あのおとなしめな果歩まで言葉遣いが変わっている。

こんな会話をしながら昼食を楽しんでいた時だった。

途端に空気がざわつく。

なにか廊下から波になって教室に来てはいけないモノが向かって来

ているような感覚だった。

刻季は背中がぞわっとするような寒気を感じ、直感で困ったモノが来ると理解した。

理解が早かったのは実に感心できることだが、その理解をこの後に活かせなかったのは悔まれるだろう。

いかんせん、こういう感覚に対する経験が浅いため仕方のないことなのかもしれない。

経験でどうにかなるかは分からないが

その困ったモノは人の波と動揺を伴い1ーCに到着したもようだ。すでにクラスメイト全員が廊下との境にあるドアに視線が注いでいたが、そのモノはドアの前で躊躇していた。

あれほど賑わっていた教室の中にはいまや、沈黙しか残っていないかった。

もう一つの境である窓から見える生徒達も首を一樣に横に向けてモノを見ている。

ここまで引っ張ったが、実際にはドアの曇りガラスから長い黒髪が刻季にはチラチラと見えていた。

お察しの良い方も良くない方もここまでくればわかるだろう。

モノはやがて決心したかのように、首をコクンと振ってドアに手を掛けた。

ひと思いにガラリとドアの開く音が教室に響く。

その者は黒く綺麗な長い髪をたなびかせて教室に入ってくる。

刻季の姿を確認するとホッとしたように顔を見えない程度に緩め、決して刻季以外見ず、文字通り一目散に目的へと向かった。

刻季は弁当と箸を持ち、者がいる横を向くというあまり行儀の良い

格好とは言えない状態で迎えた。

刻季の目の前に着いた者は恭しく頭を下げながらこんなことを言うのだ。

「我が君、刻季様。お願いしたいことがあります」

1-C+αの驚愕を以って彼女――天原華音生徒会長を迎えることになった。

「か、会長……」

萌葱の口から驚愕を文字にしたような震えがこぼれる。

そこでようやく刻季以外の存在がいたということに気付いたかのよう
に萌葱の方へ振り返り

「南雲さん。こんにちは。刻季様のご友人の皆様方をはじめまして。
天原華音と申します」

先程、刻季にしたように頭を下げた。

会長が頭を下げているという事実、仁吾は苦笑し、萌葱・果歩は
驚き、竜也なんかは震えている。

「こんにちは、天原会長。だけど俺ははじめましてではないっすよ」

「……？　もしかして碓氷家の方ですか？」
表情をつくらず考えて答えを返した。

「はい、碓氷仁吾っす。たぶん去年の天原家でのパーティ以来だと思
うんですけど……」

「今年のパーティですか？　あの日は人が多くてひっきりなしにお
声を掛けられていたので……。申し訳ありません」

「いやいやいいっすよ。こっちもお呼ばれたパーティで楽しめま
したから」

「そうですか。それはなによりです」
ふたりで会話をしてしまっている。

ふたりで空気を作っているのをずるいと思ったのかなんなのか、竜也は憧れの会長を目の前にしているという状況を享受しながら会話に入っているを試みた。

「あ、ああ、天原会長」

震えが言葉に籠っている。
っていうかどもっている。

「はい、なんででしょうか？」

華音が竜也の方を向いた。

「は、は、はじめまして会長。お、俺、陸奥竜也って言います。むっちゃんでも、竜也でも、竜くんでもお好きに呼んでください！」

「はじめまして、陸奥くん」

竜也は自分で作った選択肢になかったが一番無難な答えだったそれを聞き肩を落とした。

刻季は華音が来たという事実には驚きはしたものの、みんなよりいち早くそれから回復していた。

回復したその頭で、華音が初めに言ったことを何故か忘れてくれているとわかり、安堵の息をもらす。

特に竜也に忘れられているのは大きかった。

華音のファンである竜也に聞かせられないことがたくさんありすぎる。

というか華音との出会いから全て言えない気がする、と、刻季は思った。

仲良くなってから毎日一緒に食事を摂っている刻季と竜也だが、刻季は竜也が華音の話をしなかった日を知らない。

だから許可したわけではないが、許容している華音との関係を知れるわけにはいかない。

このままいけばあと数分で授業が始まるため、みんなには忘れたまままでいてもらうことにする。

そう刻季は頭で決定づけた。

——しかし……。

萌葱がしっかりと覚えていやがった——数分後の刻季談。

驚きから回復した萌葱が言った。

「会長！ その刻季様って何なんです！？」

「萌葱さん。突然どうなさったのですか？」

「だから刻季様ってのは！？」

「……？」

キョトンと首を傾げる華音。

何を指摘されているのかわかっていない様子だ。

「刻季っ！」

標的を刻季に変えた。

「さ、さあ？ な、なんだろうねえ」

とぼけるが汗が止まらない。

「とぼけても無駄！ 何年一緒にいるとおもってんのよ？ あんたの嘘なんて見抜けないとも思ってるの！？」

ヒステリック一步手前の状態の萌葱。

その後ろには果歩がビクビクと隠れている。

怖いならそっちなきやいいのに、と刻季は冷静に思った。

「さあ、白状しなさい。今ならある程度で許してあげるから、ほら」
「その、ある程度ってのは……？」

「鳩尾」

「急所じゃないかあ！」

きっぱりと告げる萌葱に恐れながらも声を張る刻季。

「なによ。もっと『程度』を上げてほしいの？」

「いやあ……」

「嫌なら今すぐ正直に言いなさい。嘘を言うなら……」

笑って言うが眼が全く笑っていない。

綺麗な深緑色の眼がただただ淡々と言葉の続きであるだろう、『わかつてるわね』とだけ告げる役目をおっている。

刻季は助けを求めて仁吾と華音と竜也を流すように見た。

しかし、仁吾は肩をすくめて明らかに事の経過を楽しんでいて、華音はキョトンとしているままで、竜也はその華音の方を見て目すら合わせずにいた。

男友達二人に心の中で、おぼえていろよ……と言い、自分ひとりだけでの解決を目指すことにした。

刻季は冷静に分析し始めた。

このまま正直にいつて鳩尾パンチだけで済むはずがない。

だったら危ない道になるが誤魔化す方が被害が少なくなるだろう。

萌葱のパンチはくらくと一日は痛みが引かない。

もちろん経験談だ。

刻季自身がそれを引き出したことはそれこそ数えるくらいしかないが、仁吾に付き合ってくらった回数は優に歴代の天皇の数を超える程だろう。

小学生の時なんか自分以外の男に触れるのも怖がるくらいだったのに今ではとんでもなく成長してしまったなぁと刻季は感慨深げに嘆きのため息をもらす。

ともあれ誤魔化し回避への道を進むことに決めた。

「萌葱の言ってることがよくわかんないよ」

言った途端に殺気が萌葱からわきあがる。

自分とて魔術は使えないモノの魔術師の名乗る身としてオーラという言葉は使いたくなかったが、殺意のオーラとしか呼べないものが萌葱の背後から漂っていた。

そのオーラだけで人が斬れそうだった。

ここからは引き返すことも、選択肢を間違えることもできない。

間違えたその日には刻季の血まみれの姿を見ることになるだろう。なんとかその状況から避けるため奮い立たせる。

「刻季、いい？ あたしね。嘘が大嫌いな。刻季なら。わかってるよね？」

一言一言区切り諭すように言う萌葱。

「だからね。嘘つくといつい手が出ちゃうな」

「どんな嘘発見機なんだ！」

「大丈夫よ。嘘つかなきゃ可愛いモノよ。この萌葱ちゃん嘘発見機は」

ウインクする萌葱。

やはり眼は笑っておらず、殺気もそのままだった。

やはり萌葱は何かあったと確信している。

言質が取りたいだけみたいだ。

「えーと、やっぱり萌葱の言いたいことがわからない。どうしたの

急に、さ」

言葉を選びながら言う刻季。間違えたら血まみれだぞ。

「ふうん、優しくしてあげても嘘をつくんだ？ 誤魔化すんだ？」
悪戯した子供に誘導尋問をかけているような怖さがあった。

「じゃあ質問を変えてあげる。ちなみにこれが最後の質問だから……ね」

言外に最期と告げている萌葱。

「昨日天原会長と何があったの？」

まるで浮気をした男への聞き方だった。

それはとことん刻季への核心を突いた質問だった。

だから精一杯誤魔化した。

「萌葱も一緒に居たから知ってるでしょ？ なんでそんなことを」
会長を置いてけぼりにして会長の話をしている。

華音はいまだに起こっていることまるで理解していなかった。

「昨日生徒会に誘われて……それで終わりだよ」

「ホントにその答えでいいのね？」

最後の審判を下そうとしている。

「うん。会長とはあのままだよ。だからなんで来たのかもわからないよ。萌葱に用事じゃないの？」

目の前に華音がいるのに酷い言い草だとは思ったが命が懸かっている。

「え？ そうなのかなあ……」

萌葱も疑心暗鬼になっている。

攻め時はここだ。

と思ったがこの後思わぬところから爆弾を落とされることになる。

もちろん、華音だ。

「やですわね、刻季様。私の事は『華音』とお呼びしてくださいと仰ったではないですか」

……終わった。

たった一言で今までの苦労を全て水泡に帰された。

しかも指摘するところこかよおおおと最期のツツコミを刻季は心の中でした。

もう萌葱のほうを見られない。

その方角から熱を感じた。

なんか熱を発しちゃってます。

「……刻季？」

皮膚の表面では熱く感じるものの、耳に届く声は冷え切ったモノだった。

「やだなあ、刻季は。嘘は嫌いだって言ったのにね。なんか途中信じちゃいそうになったよ。なかなか御上手になったんですね？」

耳にどんどん冷たい声が届く。

「もう、ホントにお茶目なのは相変わらずね。もっと落ち着いて優先順位を考えてほしかったなあ。どうなるかなんてわかっているはずなのにねえ」

「萌葱、待って!!」

徐々に近づく拳。

どんだん大きく見えてくる。

もう次の瞬間には俺はいないのか、と感慨深く思っていた。

のだが……。

届く直前に拳は刻季の目の前で止められた。

もちろん萌葱が自発的に止めたわけではなかった。

じゃあ何故？と刻季は思ったが、その解はすぐに解けた。

いつの間にか刻季の横に侍従のように着いていた華音の右手によって止められていた。

そして無表情ながら声を高らかに上げた。

「申し訳ありません、南雲さん。いくら生徒会役員であるあなたでも『我が君』を傷つけることは許すことはできません。私は刻季様にお仕えする身として刻季様に危害を加える者からお守りすることを義務付けていますので、どうか」

彼女が落とした爆弾はさっきよりも更にドでかいそれだった。

第08話 始まりの物語の初め（後書き）

新キャラ氣に入っていただけるとありがたいです。

ちなみに刻季の名字は最初、『羽間』ではなく『陸奥』でした。
むつときって言いにくいので変えました。

もしかしたら陸奥が主人公だったかも（笑）

次話は華音のお願いの話になります。

第09話 お願い（前書き）

アクセス解析しました。

9000pvと1500ユニークという、たくさんの方に見ていた
だいて嬉しい限りです。

ですがこれおもしろいんですかね……？
（笑）

第09話　お願い

「申し訳ありません、南雲さん。いくら生徒会役員であるあなたでも『我が君』を傷つけることは許すことはできません。私は刻季様にお仕えする身として刻季様に危害を加える者からお守りすることを義務付けていますので、どうか」

華音の落とした爆弾は色々終わったと思う刻季のみならず、注目をしている全員に驚愕といった形の被害を与えた。

一人何に驚いているのかわかっていない加害者の華音は、またしても沈黙が横たわるこの教室に疑問を抱いていた。

「我が君……、刻季様……、お仕えする……、お守りする……」

萌葱が華音の言った衝撃な単語を一つ一つ呪いのように呟まじないている。いまだ刻季に向かっていった拳は彼の眼前で華音によって止められていた。

だがそこに込められた力は先刻ほどのモノではなく、ただ拳を降ろすことを負けることと同義だと勘違いしている子供のように下げるに下げられなくなっていた。

萌葱はこれを下げたら刻季との繋がりを失ってしまうのかもしれないとお門違いのことを思っていたが、それだけ華音の言ったことが今までの『萌葱と刻季の繋がり』より大きく聴こえたからだ。

そんな萌葱の様子に気づかず、刻季は先程から爆弾を卸市場のたたき売りか何かと勘違いしているような華音を見て、ここ二日で何度

目か数えるのも億劫になるぐらいの回数のため息をついた。
そしてそこでちらりと周りを見た。

華音が来たことに動揺して自己紹介の終わった後はただただ華音を見つめる為だけに作成されたロボットのようになっていた竜也は蕩けていた表情を驚きへと切り替えていた。

仁吾はやっぱり苦笑していたが、刻季には表情の節々から驚きが見え隠れしているのがわかった。

果歩に関しては華音が来てから驚きの表情を一寸たりとも動かしてなかった。

刻季はもう一度大きくため息をつき、とりあえず一番混乱の度合いの酷い目の前の幼馴染を呼び掛けた。

「萌萌」

「……………」

返事がない。

原因である一連の騒動を起こしておきながらなにがあったかは理解こそしていない華音は刻季のやりたいことをなんとなく把握したらしく掴んでいた萌萌の拳を離れた。

腕がだらりと支えが無くなり床に向きを変える。

離れた途端に萌萌は、あっ……、と声を漏らした。

そこで正気に戻った萌萌が寂しそうな顔をして、刻季を睨みつけた。

「あの、萌萌さん……?」

睨みで竦み上がりながらも恐る恐る萌萌の返事を待った。

「刻季」

毅然とした声を出す萌萌。

「は、はい！」

「あんた、会長とどんな関係なの？」

「えーと、ただの生徒と生徒会長の関係としか……」

「嘘いいなさい！ 生徒会長が一人の生徒に『様』呼ばわりするはずないでしょ！」

尤もなことを言う萌葱。本日何度目の指摘なのだろうか。

確かにそうなのだが、刻季にもやむにやまれない事情が有ったと主張したい。

「そうですよ、刻季様。私達の関係はただの生徒と会長なんかの関係では無いではないですか」

また余計なことを言う華音。

しかも顔を赤らめて

「ちよっ……、会長！ 誤解を招くようなことを言わないでください！」

「会長とお呼びになるのはやめてくださいと言ったはずですよ」

「いいから誤解を解いてください！」

「いくら刻季様からの命令とはいえ、呼び方と言葉づかいを直していただかないと聞くことはできません」

ぷいっと可愛く首をそらす。

そんなことをしたら、今度こそ萌葱がどうなるかわかったもんじゃなかったが、今は誤解を解く方が先だった。

なんか殺気が教室中に蔓延しているように黒ずんでいた。

茶色の綺麗な髪の毛は今や逆立っていた。

なんらかの魔術を使っているのだろうか床が揺れ、ゴゴゴゴゴ、と音がしている気すらする。

早いとここの状況を打破しないと、刻季どころか教室の生徒全員の命が危なくなりそうだ。

そう思い、

「華音、なんとか誤解を解いて」

蚊の鳴くような声で言った。

だが教室は静けさの中にあっただので、聞こえないクラスメイトはいなかった。

「はい」

久しぶりに笑顔を見せた華音は萌葱の方へ向いた。

「本当の事を仰ってください。天原会長」

萌葱が華音に促す。

「はい、南雲さん」

言葉を一言一言大事放つように言った。

「私と刻季様はご主人様と従者？ メイド？ 奴隷？ などの関係に当たります」

今日の爆弾だった。

「華音ーっ！っ！」

「はい？」

相も変わらず自分の落とした爆弾の威力を理解していないらしい。キョトンとしている華音は呼ばれたことで新しいご命令をいただけるのかと心待ちしていた。

果歩は、あわわわわ、と奴隷と言う単語に必要以上に反応していた。

「刻季いーっ！っ！」

刻季は魔力の流れを感じた。

「わわ、待って待って萌葱！ 教室がー！ 机がー！！！」

近くにあった机――（刻季を含め複数）が全てのつなぎ目を無くしたように音をたてて部品と化した。

そしてその部品は形を変え、人を殴るのに適しているような人の身長ほどある巨大な拳の形態になる。

南雲家にのみ伝わる形態魔術だ。

変化した物質の質量の分だけ自由自在に物体を操ることができる。生物以外に有効な魔術で範囲こそあるが、生命さえなければなんでも形が変わる、南雲家先祖代々使用してきた魔術。

刻季と華音の周りに巨大な拳がいくつもできた。

光が差す隙間さえ少なくなり逃げ道は無く囲まれる。

このままいけばボコボコに殴られてしまうだろう。

そう判断した刻季は、能力を使って巨大な拳から魔力を吸収した。

吸収した途端に、拳はくしゃり、と弱弱しく崩れて横たわった。

拳だったものは、多少の面影は残っているが指の位置が分からなくなるくらいにただの物体へと変化した。

刻季たちと周りを遮るものは無くなり明るくなる。

その光を見て安心した瞬間、萌葱がまたしても近づいて殴りかかってきた。

「刻季ーーーー！！」

しかしやはりその拳は華音によって止められた。

「南雲さん、我が君の害になるような事をなさるおつもりなら私が相手になりますよ」

「会長はどいてください!!　こいつを更生させないといけないんです!」

「我が君以上に清廉潔白な方はいないでしょう。更生なんて必要ありません」

「メイドだ奴隷だ言ってる人のどこが潔白なんですかつ!」?

二人がやんややんややってる間に竜也が鬼気迫るといった形容が正しいだろう歩き方で刻季に近づいてきた。

「刻季っ!　お前生徒会長と何やってるんだ!?　ずる……いや、人として見損なったぞ!!　なんでお前ばかり羨まし……いや、お前に倫理観というものはないのか!」?

思考がダダ漏れだった。

竜也の瞳には4割の怒りと4割の嫉妬と2割の羨望が混ざっていた。やはり羨ましいのか……。

「メイドや奴隷はご主人様の趣味なんです」

そこら中に爆弾をばら撒いている華音が、もう止める気にならないほど自然と爆発を促していた。

「なっ……!　刻季そうなの!」?

怒りと恥ずかしさで顔を赤くする萌葱。

「俺もメイドは好きな方だけど奴隷はやりすぎだな。もっと健全な方がいいぞ」

仁吾はにやけながら言った。

思わぬところから伏兵がでてきた。

「仁吾……!!　なんで!」?

裏切りを受けて愕然とする。

仁吾の表情には『面白いから』と書いてあるようだった。

「俺はメイドが大好きだ!!」

もう取り繕うこともやめた竜也からも遠距離口撃をくらう。

「わわ、わたしはそーゆーのよくないと思いますっ」

一番まともな果歩からも言われる。

「うっ……」

戒めなのだろうが、傷だらけの刻季の精神には一番のダメージがあった。

「刻季どうなのっ!？」

「ははっ、メイドに奴隷ねえ」

「羨ましいぞ!! 羨ましすぎるぞ 刻季、俺にもご奉仕してくれるように頼んでくれっ!」

「私の身も心も刻季様のモノですので」

「ふ、不健全ですう……」

各々好き勝手なことを言ってくれている。

教室の中も『メイド』や『奴隷』やらの単語が飛び交っている。

「もう、やめてくれーっ!!」

刻季のせつな願いは空へと放たれた。

あのままでは収拾の兆しすら見えなかったので、落ち込んでいる刻季を華音が連れだって生徒会室まで来ていた。

刻季・華音以外にも仁吾と萌葱がいる。

果歩は遠慮し、竜也は厄介だったので強制的に遠慮させた。

刻季は着いて華音の出してくれたコーヒーを飲み、落ち着くと昨晚

の話をし始めた。

華音が話に加わると面倒なことになりそうだったので、とりあえず口を出さないでもらうことにした。

「――というわけなんだ」

全部語り終わると華音が口を開いた。

「刻季様、今の話の中に何回『不本意ながら』と使えばよろしいんですか？」

「いや……だって本意じゃないし……」

それが本音だった。

「とにかく、刻季。それで全部話し終わったの？」

また二人で話し始めてしまいそうになったのを危惧して萌葱が言った。

「うん。とりあえず、こんなもんだと思う」

「ほお、あのシチューは会長の手作りだったのか？ どおりで何かおかしいと思ったよ」

罪悪感に押しつぶされそうになりながら刻季は

「騙すつもりは無かったんだけど……」

「刻季様、食べていただけたんですか」

「ええ、美味しかったです」

「それは何よりです。腕によりをかけて作ってよかったです。でも今度は私と二人で食べていただけるとありがたいです」

少し不満げに言った。

「じゃあ今度一緒に食べましょう」

「はい、よろしくお願い致します」

恭しく頭を下げる華音。

また取り残されている萌葱があわてて

「会長、刻季の話に間違いはありませんでしたか？」
まだ疑わしいといった眼を向けて言った。

華音は、そうですね……、と考えて

「そういえば、ベッドでの情事が入って無かったですね」
今度は虚言のボムだった。

「じょっ……、刻季い!!」

「いやいやちよつと待って！ 会長！ 嘘はやめてくださいよ!!」
慌てて訂正させる刻季。

「そんな……、一夜だけの関係だったのですね……。そうですか……。でも私は大丈夫です。あなた様と一回でもそのようになった、という思いだけで生きていきます。もし子供が産まれたら一文字いただいてもよろしいですか？」

思わず同情してしまいたくなるほどとてつもなく可哀想な眼で見つめる華音。

「ご主人様に責任を取れだなんてそんなこと言わないので安心してください」

「刻季ーーーーー!!」

鼓膜が破れそうになるほどの大声だった。

「あんた、学園^{ウチ}の会長に何してんのよ!! 信じられない! あんたはそんな奴じゃないと思ってたのに……! せめて責任はとりなさいよ!」

完璧な華音の演技に完璧に信じてしまっている萌葱。

「ご、誤解だつて！ 会長、ホントにやめてください！ 萌葱は信じやすい子なんですから」

その言葉に、無表情でお茶目を薄く塗ったような美貌を見せて「先程から刻季様の言葉づかいが悪かったですから、お仕置きです」それはさながら、若い王にたいして説教する宰相のようだった。

「その言葉づかい直さないと……わかりますね？」
これまでの華音のやってきたことが思い出されていろいろ怖くなつた。

「はい……」

「ぜひお願いします。あなたは私の主人なのでですから」
毅然とした態度で華音は言った。
もう逆らうまいと決めた刻季だった。

「それで、なんで俺らは授業中にここに来てるんすかね」
確かに仁吾の言うとおりだった。
もうとつくに昼休み明けの授業が始まっている時間帯だ。

「もちろん、生徒会権限です」

「あんた、またそれかよおー！」
さも当たり前のことだといった様子の華音に刻季がツツコミをいれた。

「この学園の生徒会の権限ってのはどれだけ強力なんだ……」
「聞きたいですか？」

「いや！ いい！ 怖くなってきた」

「そうですか……」
あからさまに落ち込んでいる華音はもうほおっておいた。
どんな藪蛇がでるかかわかったもんじゃない。

「……あたし、生徒会にいるのが嫌になってきた」
ぼそつと萌葱が呟いた。

そう思うのも仕方ないだろう。
あれだけ品行方正を地でいくような会長がこんな状態になっているからだ。

「……まあとりあえず、なんで会長はウチのクラスに来たんすか？」
さっきまでずっと笑っていた仁吾が空気を改めるように言った。

「そうでした……。碓氷くんありがとうございます。そして刻季様……」

華音が仁吾を見てから刻季の方へ向き直り姿勢を正した。

「はい、えーと、なんかお願いがあるって聞いた気がするけど……」
遠い過去の話进行思ひ出すように刻季が言う

「はい。私が刻季様にお願いを申すことなどおこがましいにも程が有りますが、聞いていただけると嬉しく思います」
長い前置きだ、と刻季は思った。

「とりあえず言ってよ」

「畏まりました。あの実はですね……。私の父に会っていただき

きたいのです」
言いにくそうにした後に華音は漸く言った。

「「お父さん!?」」

全員の言葉がきれいに揃う。

「はい」

とだけ華音は返した。

「なんで会長のお父様に刻季が？」

萌葱が華音の説明を待たずして、早く話し始めることを要求した。

催促を気にした様子もなく華音は

「昨日一度目の帰宅のあと、父にその話をしたら、渋々ながらお送りしていただけたのですが。そのあと無理やり帰されたことを知るとものすごく怒りまして……。それで『その若造を連れてこい!!』と思います切り怒鳴られまして……。それで『明日出来ればお連れします』と……」

「……………」

「あの……。刻季様？　どうなさったのですか？」

「行けるわけないでしょ!!」

心配そうに華音が言っていると刻季は声を張った。

「もうガチギレじゃん！　お父様には失礼だけどそんな状態で行ったら何されるかわかったもんじゃないよ！」

「やだ、刻季様ったら、『お義父様』だなんて……。表情は変わらず、顔だけ赤らめて華音が言う。」

「そこにいくつくなよ！　……それに『渋々』って、昨日は行かないとお父様に許されないって言ってたよね!？」

「それは嘘です」

「悪びれもせず言うなよ!」

無表情で淡々と刻季の言うことにくいついていく華音に、刻季はひたすらつつこんだ。

結果……

「はあ……はあ……」

ぜえぜえ息が上がっていた。

「……あの、刻季様？」

「はあはあ……、ふう……。……えっと仮に僕が華音の家に行ったとしたら、何をすればいいの？」

話を進めなければどうしようもないので、刻季は息を取り戻して訊いた。

「有ったことをありのまま説明していただければ父も理解してくださると思います」

「それは華音の説明じゃダメなの？」

「私は自分の都合のいいように説明しましたから」

「ホンットにいい性格してるなあ！」

全く悪びれる様子もなく言う華音。

「それで？」

「えっ？」

唐突に訊く刻季に質問の意味がわからない華音は訊き返した。

「だから、何時に行けば良いの？」

「え……、来てくださるんですか？」

「行かなきゃしょうがないんでしょ……」

つまりなそうに言う刻季。

「本当によろしいのですか？」

「いいよ」

「……えっと、放課後時間が空いていればすぐにでも……大丈夫で
しょうか？」

「わかった」

即決で返す刻季。

あまりにもあっけなく了承をもらい肩すかしをくらっていると

「あの……会長」

萌葱から話しかけられた。

「なんででしょうか？ 南雲さん」

「私も一緒にお邪魔しちゃダメですか？」

「南雲さんですか？」

「あっ、ダメならもちろんいいんですよ」

何か慌てて言いたいことをぼかすように言う萌葱に少し疑問を抱いたが、別段気にすることでもないのだ

「うちで良ければ、別によろしいですが……」

「ホントですか！？ ありがとうございますっ！」

突然手を握り喜びを表現する萌葱。

刻季も気になったので

「ねえ、なんで萌葱も？」

「な、なんだっていいでしょ！」

「でも師団どうしの接触は避けた方がいいんじゃないかな？」

「あっ……」

いくら同じ組織とはいえ礼儀を重んじるのが魔術師なので、あまりイレギュラーなことはしない方がいい。

その上南雲家と天原家となると、師団の中でも手を組まれると力を持ちすぎるため少しの接触でも気使いが必要だ。

「大丈夫ですよ、南雲さん。私達は当主でもなければ実際同じ生徒会に所属している身ですから、いまさら接触がどうか関係ないで

しょう」

「そ、そうですよね！ ほらみなさい、刻季！」
鬼の首でも取ったように言う萌葱。

「あんなに入るの嫌がってたくせに……」

「うるさいなっ！」

凶星をつかれてつい手が出そうになる萌葱だったが、またしても刻季に届く前に華音によって止められた。

「刻季様への攻撃は許しません」

ただそれだけを告げる華音の迫力はおよそ女子高生に出せるそれでは無かった。

刻季はいじめっ子から母親に守ってもらう子供のようにあまり気分が良くなかったが、痛みを伴わなかったので良しとした。

仁吾が萌葱に近づくとぼそっと

「家に行くなんて婚約者みたいで困ったんだろ」
にやけながら言った。

萌葱は顔を真っ赤にして今まで刻季を殴れなかった鬱憤をはらすように思い切り刻季への分も力を込めて仁吾を殴った。

「な、なんてことというのよ！ これは刻季の分もよ……」

「理不尽だ……」

確かに理不尽だったがタイミングが悪かった仁吾も悪い。

刻季はなんで仁吾が殴られたかわからなかったがとりあえず黙祷した。

「では放課後に教室までお迎えいたします。刻季様、南雲さん」
華音の声が生徒会室に響いた。

第09話 お問い合わせ（後書き）

ラブコメ書くのって楽しいです。

もつとバトル要素入れたいんですがなかなか入れるタイミングがなくて困っています。

第10話 奴隷く性奴隷（前書き）

タイトルは有って無いようなものなんで気にしないでください（笑）
今回は文字数はさほどではないですが結構書くの大変でした。

第10話 奴隷く性奴隷

授業の遅刻は『生徒会権限』とやらのおかげで不問となっていた。授業途中に帰ったためクラスメイトの疑惑の込められた眼は逃れられなかった。

しかしそれはまだ耐えられたのだが、竜也からの悪感情しか込められてない眼からは本気で逃れたかった。

……悪感情とは要するに、嫉妬などである。

まだ仲良くなる前の奇異の眼差しのほうがマシな気がしたのだが、仲良くなったことは仕方ないし、刻季自身も仲良くなって学園が楽しくなったのは事実だ。

これからの関係改善が大事だと刻季は前向きに捉えて、授業のある間は竜也の熱い眼差しを甘んじて受け入れていた。

やがて昼休み後の座っているだけでいいような退屈でしかない授業は全て終わり、放課後を知らせるチャイムが鳴った。

一年生はまだ魔術の実技を受けていない。

実技は学期ごとに2回ある筆記テストのうち、1回目のテストが終わり次第始まる。

何故そのような体系をとっているのかと聞かれれば簡単だ。

実技はチームで行うことになるからだ。

チーム——集団演習のことである。

魔術師は古来より家に集まる。

規模の小さな戦争や合戦と思えば近いのかもしれない。

もちろん個人で戦う場合もあるのだが、それは騎士道精神に基づいてとか何とかで決闘があったりするだけでほとんどは集団対集団という形になる。

個人で戦うには戦略に限度がありすぎる。

たとえば身体を強化する魔術を使う魔術師がいたとする。

その魔術師は、チームにいればとても有効に働き、戦うことができるだろう。

強化魔法を使えば、最前線で相手と渡り合えるからだ。

フットボールでいえばフォワードとして攻めることも出来れば、相手の攻めも壁として止めることができる。

しかしその魔術師が一人で戦っているとする。

相手に遠距離戦が得意な魔術師が一人でもいれば、その時点で近づいて近距離戦にもちこむことが難しくなり、その時点でほとんど一人で戦っている側が不利となる。

相手にダメージを与えることはおろか、相手に近づくことすら難しくなるのだ。

そのため、魔術師は集団戦を選ぶ。

もちろん、強化魔法しか使えない魔術師というのは少ないだろうが、魔術師にも得手・不得手が存在する上に、ただでさえ使える魔術が少ないのに得意魔術しか使わないような魔術師が大勢いる。

魔術師はいくつもの魔術の中で自分に合ったそれを見つけるため、その純度を高め、訓練して、その魔術を――自分の中に確立――、することによって魔術師となる。

要するに魔術を覚えるのは誰にでも出来ることだが、魔術を使う、使いこなすには時間をかけにかけて形になるのだ。形にするのだ。

だから魔術師はその魔術を我が子に愛情を向けるように大切にする。それだけ時間をかけて形になった魔術に愛着が沸くのだ。そのためその魔術を大切に扱うのと同時に、その魔術に――依存する。

新しい魔術を覚えるより、魔術の強化・練成を選ぶ。

それにより得手・不得手の差がさらに拡がるという悪循環に陥る。

故に戦いの中で使う魔術は初手であり、切り札でもあるのだ。

その切り札すら簡単に手放せないため悪循環の一要因でもあるのだが……

閑話休題

集団戦を選ぶ理由は以上の通りだが、だからといって実技が何故遅くなるのかと聞かれれば、クラスメイトに慣れる為というのが一番の理由だ。

結局は、クラスメイトで仲良くなり魔術での諍いを減らそうとし、連携をうまく組めるようにし、そしてあわよくばチームを組んでくれれば儲けものといったところである。

さすがにそのような準備期間を与えられるのは一年生の内だけで二年次からはクラスこそ変更になるが、一年次のチームをそのまま使うことが大抵だ。

そうになると、刻季たち5人組みはほぼチーム化しているため学園にとって一番の理想形であろう。

なんか今その理想が崩れそうで危ないが……、竜也も本音では仲違いたいたいわけではないと刻季もわかっている。なので問題ないはずだ。

チャイムの音が鳴り終わると竜也が刻季の方に歩いてきた。

教室中の目が刻季と竜也に向かう。

「刻季、あのさ……」

「ん？」

ある程度何を言われるか予想のついた刻季だが聞くことに徹するとした。

その予想とは「お前、会長と付き合ってるのか？」が妥当なラインである。

奴隷だなんだは冗談と受け取るだろう。

「お前会長に『ピー』な服を着せて『ピー』で『ピー』に『ピー』なことさせた上に、『ピー』に『ピー』と『ピー』をいれて『ピー』なプレイしてるって本当か!？」

「……………」

もう色々大変なことになっている。

刻季の予想という壁を数十枚突き破っている感じだ。

「……ナニソレ？」

「噂になってるぞ! 刻季と会長が夜な夜な『ピー』なことしてるって」

噂になるのは免れないと思った刻季だが、尾ひれがつきすぎている。

「なんなのその噂……?」

声にならない声を上げて訊く。

「噂だよ、噂! ま、俺が流したんだけどな!」

「はああああ!？」

とんでもない噂を流してくれている。

完全に18禁の噂だ。クラスには年齢制限を越える生徒がない。

「な、なんで？」

「ん？ 妬ましいから」

理由を聞くとあっさり返ってきた。

「学園のアイドルであろう生徒会長にあんなことやこんなことをしやがって。ずるいぞ。俺にもその権利を分けてくれ！」

「渡せるならいくらでもあげるよ！」

切実な願いである。

「なに……？ 今度は『ピー』なプレイに飽きたからって捨てるのか……？」

「そんなことしてないからあ！」

「お前せめて責任はとれよ！ 会長を傷モノにしたくせに……」

「もうやめて……」

教室がざわつく。

もはやこの話を聞く以外の行為をしていない。

「釣った魚には餌をやらないってか！？ 会長をあんなにしておいてよくも……」

「あんなってどんなだよ！」

「よくも性奴隷にしておいて……」

「してな……！」「はい、私こと天原華音は刻季様の性奴隷です」……

いつのまにか華音がいた。

「どんだけタイミングいいんだあ——！」

「私は、いつも我が君のおそばに……」

「ほらやっぱり性奴隷じゃないか！」

言質をとったとばかりに大きく出る竜也。

「違う違う、竜也！　華音、違うって言って」

「出来れば嫌です」

毅然として言う華音。

「なんで!？」

「面白そうだからです」

「お前えー！ー！！」

「ちなみに私、陸奥くんが話しかけるところからいました」

「最初っからじゃん!」

「だから出るタイミングを選んでました。どうでしたか？」

「絶妙なタイミングでしたね!！」

実に満足そうなしたり顔をしている。

「それでは面白かったところでそろそろ行きますか？　南雲さん」

「は、はい!」

萌葱が刻季たちのもとへ来た。

「ちょ、ちよっと待って華音！　この誤解を……」

「さ、行きますよ。刻季様」

刻季の腕をぐいっとつかんで引っ張る華音。

「か、華音！　頼むからあ……」

刻季の声が徐々に小さく響いていった。

「華音は僕の事嫌いなのかな……?」

「いいえ、そのようなことはございませんよ。刻季様」

とぼとぼ歩きながら呟くと天使のように慈愛の目で見つめてきた。

「それにしてもずいぶんなこととしてくれたけど」

「それは愛情ゆえです」

「へ？」

情けない声を出す刻季。

「あれだけ言っておけば刻季様以外の方に尽くすことは出来なくなりますから安心ですね」

「安心できないよ！」

「性奴隷がいる高校生なんてそうそういないですよ」

「そのカテゴライズの中に僕を入れないで！」

ずいぶんな括りである。

そのなかに入る者が刻季以外いるのか気になるところだ。

いや刻季も入らないのか……？

「あの、会長！」

ふいに萌葱の声が聞こえる。

「なんですか？」

刻季と楽しく話していたつもりの華音は話の腰を折られて少量の虚しさを感じながら訊いた。

「家に刻季を呼んでどうするつもりですか？」

「どうするつもり、とは？」

「ホントに会長のお父様に会わせるだけですか？」

「えっ？」

驚いたのは刻季だ。

「師団の一家の長である会長のお父様が会いたいなどと簡単に仰らないと思うんです」

「なぜそう思うんでしょうか？」

「天原の家格は日本でもトップの一つですから『羽間』のような家の者に謁見を許すと思えないんです」

「それは南雲家も同じじゃないでしょうか？」

「南雲は自由な家風ですから。ですが天原は違いますよね？」

「……………」

伝統を重んじる家はどこか、と聞かれれば多くの家の名前が出てくるだろう。

魔術師にも宗教徒にも伝統を重んじる家は多数存在する。

というより、古い家はほとんどが伝統というものに縋っている。

南雲が異質なだけだ。

質問を、最も伝統を重んじる家はどこか、と変えると答えは自ずと絞られる。

いくつかの家名があがるが、間違いなく天原はその中に入るだろう。

そのような家の当主。

萌葱の言うとおり、たかだ『羽間』刻季に会おうと思うのか、と刻季は考える。

答えは否だ。

会うなど考えるはずもない。

刻季は『羽間』刻季だからだ。

羽間のしたことは表に出てきたわけではないが、師団の家が許すはずもない。

まして会うことなんて言うまでもなく拒否するだろう。

ならなぜなのか……？

「南雲さんの仰る通り、私は天原です。しかし父が会おうと申しましたのは真実です。羽間の家が何をしたのかは、私の知るところで

はありませんし、ただ私は父の意向にそうことをするだけです」

「……ほんとですか？」

「はい、父が何を企んで、何を望んでいるのかはわかりませんが、会いたいと申してました。それから……」

そこで一度言葉を切る華音。

「兄も刻季様に会いたいと申しておりました」

「お兄さんも？」

「やですわ、刻季様。お義兄さんだなんて……、気が早いですね」

「いやそれはもういいから」

先程と同じ流れに呆れる刻季。

「でもなんで？」

「予想はつきますが内緒にしておきます」

「ええっ？」

少しだけ楽しそうに声を弾ませている。

「刻季、いいの？」

萌葱が声をひそめて刻季に聞いたです。

「え？ なにが？」

警戒心の無い声で聞き返す。

「行ったらあんた何されるかわかんないわよ」

「んー？ 大丈夫じゃないかな？」

「あんたねえ……。知らないからね」

萌葱の忠告は尤もなことだったが、あまり気にした様子もなく安心してきっている。

「それに、^{みお}濤桜さんに知られたらどうするのよ？」

「あゝっ！」

突然声を張り上げる刻季に華音は怪訝な表情を少しだけ浮かべたが、すぐに無表情に戻った。

「あんた、今までのことも知られたら、大変なことになるんじゃない？ あの人あんたとあたしが少し一緒に買い物しただけで豪く騒いだくらいだから、今回はどうなるのかしら。濤桜さん嫉妬深いんだから……」

「どうしよう……」

濤桜との事をいきなり思い出して、その思い出の密度の濃さに刻季は眩暈した。

「まあ自分のことなんだからなんとかしなさいね」
まるで最終通告でもするように言う萌葱。

今言わないと断れないよ、と目は告げている。

今からでも断れば遅くないか？

あの人のことだから許しはしないだろうが、断る姿勢を見せたから減刑してくれるか？

いやそもそも断って華音は帰してくれるのか？

等々、刻季の頭の中を駆け巡る。

やはり断ろう、そう結論づけた刻季に非情にも時間切れのベルが鳴った。

「着きました」

「はやっ！」

まだ歩き始めて5分も経っていない。
寮よりも近い家とは何なのだろう。

「どうかなさいましたか？」

「い、いや……」

華音が見ている方を見ると、いつも寮から学園の校舎まで行くときに通る道沿いにあった大きな木造の家があった。というか大きすぎだろ、と思わず眩きが洩れる刻季。

一言で伝えると、荘厳だった。

それ以上にうまく伝えることのできないような古風な家。さすがの天原だ。

華音が家の方に歩き出すと仕方なくついていくような形で、刻季と萌葱も一緒になった。

家に入ると、まず長い廊下だった。

一番先が見えそうにないくらいの長さだ。

そして給仕の人だろうか、華音の帰宅に刻季たちの方も見ながら挨拶した。

「お帰りなさいませ、お嬢様。いらっしゃいませ。旦那様でしたら、お部屋にいらっしゃいます」

「ただいま。ええ、わかりました。」

このようなのは刻季も萌葱の家で見ているがどうも馴れそうになかったのでとりあえず会釈をしておく。

萌葱はしっかりと挨拶をかえしているようだった。

板張りの廊下を華音を先頭に歩いていく。

途方もない距離だった。

きっと華音は一番奥の部屋を目指しているのだろう。

1分くらい早歩きをしてようやく奥の部屋の戸の前に着く。

コンコンと華音が戸を叩きながら

「ただいまかえりました。華音です」

「開けなさい」

中から厳しそうな渋い声が返ってきた。

はい、とだけ華音がかえし戸を開いた。

中はいかにも古く大きな家の一室といった様子の部屋だった。

生徒会室の荘厳さとは全く違う形の威厳をもっている、そんな部屋だ。

はっきり言って刻季には場違いだとは思えなかった。

それでも仕方なしに部屋の中ほどこまで華音に連れられて向かう。

社長が使うような長机の奥で椅子に座っている壮年の男性とその横に仕えているように立っている青年がいた。

きっと華音の父と兄だろう、と想像する刻季。

刻季と目があつた青年のほうは刻季に向かって笑みを送ってくる。

愛想よく刻季もかえすと壮年の男性が

「手前が天原の当主だ。卿が羽間か？」

自分たちの身分を位置付けるようにいうような声だった。

自分が『天原』でお前が『羽間』、自分が『天原』でお前が『羽間』
とでもいうように。

刻季はもともと歓迎されると思っていたわけではないが、結局萌葱の予想通りあまり歓迎されたものじゃなかった招待に心の中で暗雲が立ち込めてきた。

第10話 奴隷く性奴隷（後書き）

滯桜はそう遠くない日に出します。

どんな関係なのかは楽しみにしてくれるとありがたいです。

あと羽間家の話もいずれ出します。

全部の『魔法学園』を『魔術学園』に直しました。

見切り発車で投稿した今作ですから、最初からやりなおしたいです。でもキャラに愛着わいちゃってそれもかなわないのでマイナーチェンジ？しました。

あんまりマイナーじゃないかも……

第11話 天原父兄（前書き）

遅れてすいません

旅行行って、でも旅先で更新しようとおもったら思いっきり風を
引きまして……

実は現在も真っ只中ですので駄文が更に駄文になっていますが、お
許してください

第11話 天原父兄

「手前が天原の当主だ。卿が羽間か？」

なんてことはない華音の父親から放たれた最初の言葉は、羽間刻季にとって重たいものだった。

天原家現当主である天原音彦おとひこは萌葱の父親のように師団の要職にこそついていないものの、天原という家格の高い家の当主とあるだけあって日本では知らない人はいないだろうし、世界でも魔術こじらの世界ではやはり著名な人の一人だ。

本来なら、刻季が直接相對することの出来ない人物で碓氷家の跡取りである仁吾もそうそう会えないだろう。まして、刻季は羽間の一員である。望んだところで会うことは叶わないだろう。

それがこんな形で実現した。

羽間と天原が会うなど一昔前なら考えられないことだ。

尤も刻季はそんなこと望んでもいなかったのだがそんなことを言っても仕様がなない。

今日の前にいるのだ。

地位の差を改めて問うような音彦の発言に苛立ちを感じるが、それを表に出すこともできないので取り繕った。

「はい、初めまして。羽間刻季と申します」

「うむ」

刻季の挨拶に鷹揚に頷く音彦の眼は明らかに値踏みをするようなそれだった。

「手前は面倒なものと、前置きが長いものは苦手だな。早速だが話を始めさせてもらおう」

「はい」

「卿と華音のことはすでに華音から聞いている」

果たして華音がどんな風に伝えているかわからないが……

「結論から話すと手前はその関係を認めていない」

「父上！」

華音が珍しく声を大きくする。

これでなんとなくだが二人の関係性を理解する刻季。

「華音は手前が18年間手塩にかけて大切に育てた娘だ。それをただか16の若造にもつていかれるなど、そう簡単に納得できるものではないだろう」

「……………」

「主従の関係なんて過去の時代の遺物でしかない。もちろん天原にも手前にも従者というものがいるが、強制的に結んだ関係ではない」
「……………」

「卿は過去にやっていたという前時代の先例を利用し華音との契約を結んだ。その先例とは文字通り現代では行われていないことだ。決闘をして勝利をすることなんて華音の調子しだいによくあることではないのか？」

「そんなことはありません。現に私は身内以外には負けたことがないことを父上もご存じでしょう」

「弱点をしっかりとつけばわからないだろう。確かに華音、卿は強いが、強いが故に慢心しがちになることもあるに違いない」

「いえ父上、確かに刻季様と決闘を始める時油断していたのは事実です。ですが最終的には力を出し切り、そして完敗でした」

「有り得ない。卿は12師団の一員なのだぞ。それを『羽間』に……」

「羽間であろうとなんだろうと私には関係ありません。私がお仕えするのは、刻季様であって羽間ではありませんから」

完全に刻季様において論議しあう華音と音彦。

「それに私はただ負けたからといってお仕えするほど甘いつもりはございません。そこまで慣習に忠実でもありません」

「では何故だ？」

「刻季様についていけばいいと私の直感が申したのです」
そんなインスピレーションで……と刻季は思ったが白熱している二人の間に入ることが出来そうになかった。

「直感ごときでそのような事を信じるのか？」

「はい。実際刻季様はそれに足る存在だと私は思います」
自信満々に答える華音。

一体刻季の何をそんなに気に入ったのだろうか。

「……わかった。ひとまず卿の直感とやらを置いておく。卿が聡明であるのは手前が一番わかっていゝつもりだ。信じることにした理由もあるのだろう」

「では父上……」

「だがその若造のことを認めたわけではない」
音彦が言い放つ。

「羽間のような家系の者に仕えるなど、天原では許されないことだ。それに卿にはいくつもの婚姻話もあがっている。羽間と関わっていると知ればどうなるかなど火を見るより明らかだろう」

「私は刻季様以外の方と結婚するつもりはございません」

刻季としては華音と結婚するつもりはない。

「卿は結婚まで考えているのか……？」
よろけそうになりながら音彦は訊いた。

「そこまでおこがましいことは考えていませんが、結婚すればより綿密に刻季様にお世話させていただけると思っていますだけです。どちらにせよ、私は結婚など認めていません」
毅然として言い切る。

刻季はどこか他人事のように傍観していたが横から

「あんた、結婚ってなに？」

萌葱がこっそりと刻季に近づいて聞いた。

「いや、知らない……」

実際刻季は華音が仕えることも認めていない上、プロポーズなんかした覚えがない。

「ふうん……。まあいいわ」

納得したのかは定かではないが、とりあえず話を打ち切る萌葱。

そうこうしているうちにも華音と音彦の話は進んでいく。

「卿は師団なのだぞ。継ぐかどうかはわからないがそのような勝手が許されると思っているのか？」

「それを勝手だと私は思っておりません」

「師団だからといい、政略結婚こそ古いことだと思っています。それに第一兄上がいることですし、天原は安泰でしょう」

「だからといって、卿がその羽間に仕えていい理由にはならないだろう」

「そうですが、そうすることを否定する理由はありません」

どちらも一歩も引かない状態が続く。

ふいに音彦が

「羽間」

刻季を呼ぶ。

今まで忘れられていたと思っていた刻季は突然声をかけられて驚く。

「は、はい」

「卿のことを手前は認められないがどうやら娘は卿の事を信用しているらしい。このまま話していても決着することはないだろう」

「え、ええ、そうみたいです」

「だからな。出来れば卿のことを信用することになったその時の状況を再現してほしいのだ」

「はあ……」

曖昧に頷く刻季。

「わかるな？」

何がわかるな、だろうか？

刻季は何もわかっていないようだが……

「要するに、もう一度華音と決闘してほしいのだ」

「へ？」

情けない声を出す。

「もう一度決闘をすれば、少しは華音も意見を変えるだろう。それから手前の意見が変わるだろう。だから羽間、卿と華音は決闘をしろ」

「ちょ、ちょっと待ってください……」

別に刻季は華音に仕えてほしいなど思ったこともなければ認めてもいない、そう言おうとした。

がその前に華音が

「父上。私は仕える者として刻季様と拳を交えることをすでに禁じています。ですから決闘をすることは私と刻季様では出来ません」
刻季としては結果的に決闘を避けられそうなので華音の意見に乗ることにした。

もう流石に女性を殴るのは勘弁してほしい、との刻季の切実な願いだ。

「そうです。僕と華音ではもう決闘は出来ません」

「それでは、どうすればいいのだ？ 手前が認めることはもう出来なくなるのだぞ」

もちろん、認めてほしいなど刻季は微塵も思っていない。

むしろ刻季も認めていない。

「卿たちのことを認めなければ、手前はこれから華音の婚姻話を勝手に進めて、華音を当分家から出さないようにするつもりだ」

「父上！」

焦って華音が諫めようと声を張る。

そこで今まで傍観していた華音の兄らしき人がふいに口を開いた。

「華音と決闘できないなら、僕としようか？」

「兄上？」

「音弥？おとや」

二人の声がかぶる。

「華音としては、仕えているその羽間君に不敬を働くことは出来ないってことでしょ？ なら僕ならなんの問題もなく決闘できるよ」
飄々とした様子で言う音弥。

「確かに卿なら問題もなく戦うことができるな。そうだろ華音」

「え、ええ。出来れば兄上にも刻季様と戦ってほしくないとはおもっています。がこうなっては仕方ないでしょう」

刻季にはどんだん外堀をうめられている音が聞こえた。

早く止めないとまた、と数日でまきこまれ体質に認定できるほどに成長？した刻季は危機感を覚えた。

「あ、あの！」

「ん？ 話なら後で聞くからとりあえず庭にでも向かおう」
先程まで刻季から少し離れていた音弥がいつのまにか刻季の手をとっていた。

「さあ早く早く！」

「ちよつと！ お兄さん！？」

「お義兄さんなんて気が早いな」

「あんたもそれかよ！」

華音と同じボケをかます音弥。

「全く刻季様ったら」

顔を赤らめた歩く無表情の華音はこの前と同じ表情をしている。

「はあー……。全く刻季にも同情出来るわ……」

萌葱の声を最後に一行は庭に向かった。

第11話 天原父兄（後書き）

読み返してみても短いうえに酷いですが勘弁してください。

ちょっと重たい話を書こう書こうと努力しようとはするのですが、
どうにも書いてるうちに鬱になって書きなおしてしまいます。

次回は華音兄こと音弥との戦いからです。

しかしそんなにバトルパートっぽくなく終わるかもしれません（笑）

第12話 雷神の鉄槌

庭へと向かう廊下を音弥と音彦の両名を先頭に歩く一行。

刻季は萌葱・華音を横にしながら憂鬱な気を漂わせてとぼとぼと後ろをついていく。

右にいる萌葱が心配そうに何度も顔色を伺うが、刻季はその視線に気づくことすらなかった。

ものすごく嫌そうにゆっくりと歩く刻季はあることに気がついた。これ負ければ全てから解放されるのではないかと

負ければ華音も愛想つかす上、華音の父親も完全に拒絶するはずだ。そうすればこれからは学園生活をほそぼそと過ごすことができるし、卒業したら実家に帰って死ぬまでゆっくりと暮らすことになるだろう。

元々望んでいなかった学園への入学だったから、そうなることへの不満も文句もない。

そう思い立ったら突然、それが最善の答えだとどんどん思えてきた刻季は、その結果を導くために能力も使わずにただ負けようと試みることにした。

……が、

「刻季様、もし簡単に負けでもしたら色々嘘偽りを込めて学園中に噂を流してしまいます。生徒会長である私発信で」

まるで刻季の思考が読めるがごとく左にいる華音が言い放った。その言葉が寸分の狂いなく刻季の思考にぶっ刺さる。

「具体的にいえば、私を性奴隷として散々甚振った挙句、まるで責任をとるようすもなく捨てた、とかですかね」

「華音っ？」

そんなことされては学園に通うことすらままなくなる。

学園に未練など微塵もないが卒業せずに実家に帰ることはできないだろう。

「ちなみに、そのような噂を流した後も影では刻季様に仕えることをやめるなどあり得ませんので」

逃げ道をどんどんふさいでくる華音。というかすでに逃げ道がもうない。

横では華音の言葉に萌葱がため息をついている。

災難ね、と言っているようだった。

「あの〜できれば、そういう噂はちょっとやめてほしいかな〜なんて」

「もちろん、刻季様が簡単に負けることを選ばなければそんなことするわけではないですか。それも刻季様に忠誠を尽くしている従者兼メイド兼奴隷の愛情とお受け取りください」

とんでもない愛情表現である。

とてもではないが恋愛経験のない刻季に処理できる案件ではないことは確かだろう。

恋愛経験の深い人でも対処出来るようなものではないのかもしれないが……。

「……わかったよ。やるだけやるよ」

「それはありがとうございます」

あきらめたように言う刻季に深々とお辞儀で返す華音。

「そのかわり、これ以上面倒なこと起こさないようにしてくれるか

な？」

「善処いたします。……ですが刻季様自身が引き込まれる問題の数がこれから多くなっていく気がいたしますので、完璧にはいかないでしょう」

問題を起こす第一人者から巻き込まれ体質の認定をされた。

刻季の切実なる願いはどこにも届きそうではない。

面倒を無くすことは諦めて、数を減らしたり、対処するスピードを上げることになった刻季だった。

「さあ、そろそろ始めなさい」

凜とした声で音彦が告げた。

場所は天原家の庭である。

着いた刻季は、いやいや庭って言ったよね！？と内心でかなり驚いていた。

それもそのはず、連れてこられたところは手入れのしてある庭だったのだが、その奥には手入れの施しようのないほどの原生林というものがあった。

見上げると屋久島の縄文杉か！という具合の大きさの木がそびえていた。

要するにここは庭であって庭で無い場所なのだろう

実家の庭と比べてみるとここは未開のジャングルだった。

中には様々な動物――猿、猪、熊、ターザンまでいそうな立派な原生林だ。

師団の家はみんなこうなのか、と思ったが南雲家は違った。

南雲には原生林はなかったはずだ。

その証拠に、萌葱も驚きの顔を隠さずにあらわにしている。

萌葱がこの家に来たことはあるだろうが、まさかここまでの庭だとは思ひもなかっただろう。

原生林があることが師団にとって当たり前なのか、どうかはこの時の刻季には知る由もなかった。

呆然としている刻季へ音弥が言った。

「そろそろ始めてもいい？」

「あ、はい」

ボーっとジャングルを眺めていたことにようやく気づき音弥と向かい合った。

「刻季様、頑張ってください」

実の娘は、兄ではなく主を応援している。

それに音弥と音彦の手前返事をかえすことも出来ず、ただ華音にむかって苦笑を浮かべるだけで終わった。

「二人ともいいか？」

少しピリピリしたようすの音彦が確認をとると、刻季と音弥は頷いた。

「では、はじめ！」

開始の合図とともに音弥が呪文である言霊を唱える。

「天空神《Amateras》よ。我は汝の使者を名乗る者也」

その呪文が唱えられたと同時に雷が刻季へと突き刺さるように撃たれた。

轟音が鳴り響くが、その雷は刻季の元へ届くことは叶わなくただ魔

力の吸収がされるだけだった。

魔法を使う際に呪文を唱える必要はない。

それは体内で魔力を形成して魔法へと変えるからだ。

尤も産まれたときからそのような技術が使えるわけではなく、魔術師や宗教徒になるためにまず最初に魔力の形成の訓練をする。

魔術師学校や宗教徒学校で一番初めに教わることがそれになる。

そして訓練をして初めて魔術師や宗教徒を名乗ることが出来るのだ。

それなら何故音弥が呪文を唱えたのかというと、単純に魔術の威力が上がるからだ。

呪文を唱えることによって魔術の純度が上がり、それが威力にも影響する。

それゆえに、魔法からは呪文を唱えるという行為が消えることなく今も残っているのだ。

しかし決闘では通常呪文使うことが滅多にない。

1対1となると短期決戦が主流だからである。

遠距離魔術の場合はそれに該当しない内のひとつとなるが

閑話休題

ともあれ、音弥の詠唱した呪文が刻季に届くことなく消滅した。

その事実を前にして音弥は少し驚きの表情を浮かべている。

刻季が一步近づくともう一発雷を放ってきた。

寄らせると危ないことになるかと察知したのだろう。

しかしそれもやはり刻季に届かずに消える。

実は先程から使っているこの魔術は天原家の継承魔術の一つである。単純に雷を撃つことなら、ただの魔術師でも使うことが出来る。

しかし天原の魔術は天候を司る魔術——天空魔術だ。

天を司るという魔術は天原の名にふさわしく、この魔術があったからこそ天原は師団の一角を占めているといえるだろう。

音弥が放っている雷は一度雷雲を精製し、そこから雷を発している。作ろうと思えば、上空を覆う程の雷雲の精製ができるだろうが、決闘で使用する必要はない。

一人を仕留めるために巨大な雷を落とす理由がないからだ。

刻季が一步、まと一步と進むと音弥は表情を徐々に曇らせながら、雷をいくつも放っていく。

音弥から放たれて刻季に到達すると魔術の消滅とともに轟音が何度も鳴り響く。

結局それらは全て刻季の魔力へと変化していつている。

雷一発ごとの魔力の量が尋常ではない。そのことからかなりの実力者だろうと刻季は推測した。

華音の兄というだけでほぼ実力者であるのはほぼ確実なのだが、

それでも魔力を使用する以上刻季の相手ではない。

魔術師など刻季の相手にもならない。

放たれた何回もの雷は全て刻季に吸収されている。

音弥の位置からは刻季の少し手前で突然消えているようにしか見えない。

一発が人を必ず気絶させるであろう威力なのにも関わらず、防御魔術の一つも張らないでいる目の前の少年に届くことなくただ魔術の消滅を目にする。

その事実が音弥を本気にさせた。

「ごめん、やっぱり少し侮ってたよ。魔術なしでここまでやれるって、何をしているのかはさっぱり分からないけど華音に勝ったって言うのは本当なんだね」

「ええ、まあ、そうですけど……」

華音なんかは嬉しそうにうんうんと首を振っている。

「それじゃ、わかってもらえたようなのでもう終わりにしませんか？」

「いやだよ」

提案するとすぐに拒否する音弥。

「せっかくだから最後までやりたいし、君の事も見極めたいし、今後の事も今決められるかもしれないからね」

「今後の事……？」

「まあ、終わったら話すよ。ほぼ僕の中で確定している事だけだよ」

「……？」

言葉を濁す音弥に何が言いたいのかまるでわからないといった表情を刻季はしている。

「それじゃ、いくよ」

どこことなく飄々としていた音弥は一度瞬きすると、真剣そのものといった表情を浮かべて隙がまったく見えなくなった。

「雷神《Thor》よ、我は汝の使者を名乗る者也」

「我に神の力を貸し給え、我に神の魂を見せ給え。汝の力は地に裁きの雷を落とし、汝の魂は民に信仰の雷を落とす。力を貸し給え、

魂を見せ給え、さすれば現は汝の御世となるだろう」
呪文を高らかに上げると上空一面に雷雲が立ち込め、忽ち夜になったかのように暗くなる。

ゴロゴロと白い龍がうごめいているように見える雷雲は辺りが暗いため相対的に輝いている。

「どう？　これが僕の力だ」
あまはら

「こんな力……、僕なんかに使っても良いんですか？」

「力は使わなきゃ意味がないよ。今は隠しといっても後悔するだけだ
と思うしね。親父も何も言わないし良いってことでしょ」

音彦は先程から表情を変えずに状況を眺めている。

「さあ、構えて。これはそう簡単に破れるものじゃないからね」

刻季は念のため魔力の吸収範囲を広げる。

一筋でも雷が当たればその瞬間から意識がなくなるだろう。

「神よ、蠢く雷を落とし給え」

そう言霊を上げ終える、すると一段と上空では龍の咆哮さながらの音を鳴らす。

ピカッと光った瞬間、刻季の元へ一直線で雷が落とされる。

雷が刻季の元へ届くとそこにいる全ての者を対象とするような雷龍の咆哮が耳を劈き、視界を白ませた。

刻季に撃たれた雷はどこかにいるだろう雷神が裁きの鉄槌をくだしている様子に見えた。

ただその裁きの鉄槌も刻季には裁きへとならなかった。

刻季は裁かれる対象でなく裁く審判の者だったのだ。

視界と聴覚が回復し、全員は刻季のほうをみると、そこには耳をお

さえて片目をつぶって平然としている姿だった。

すこしの光に取り囲まれてまるで天使に囲まれた神のように佇む刻季の姿は一層華音の精神に逃れられない呪縛の鎖で縛りつけた。前回の決闘でも植え付けられたそれと今回の違いは、対象が華音だけか違うのかといったところだった。

そう。そこにいる皆が刻季の姿に見蕩れていた。神の御姿を見蕩れていた。

「すごい音だったなあ。うわっ！ まだキンキンしてるっ」

そんな誰も言葉を発せずに誰も動けないという状況を動かしたのは、他でもない刻季だった。

緊張感のかけらもない刻季の言葉に一同が気づいたようにハッとしたり。

「まだ眩しいし……。もっと手加減してくれてもいいのに……」

ブツブツ言っている刻季に呆れを通り越して少し情けなくなってくる萌葱だったが、それすらも慈愛から来る感情だったのだろう。

「勝者、羽間刻季」

音彦が突然発した言葉は刻季の耳を疑うものだった。

「えっ？」

ふいに対戦相手から目を外す。

そこで見る萌葱と華音の納得しているような表情はさらに混乱した。

「あの……。まだ終わって……。ません……。よね……。？」

「いや終わりだ」

一言でぶった切る音彦になにがなんだかさっぱりわかっていない刻季は音弥を見た。

「僕の負けだよ。もう魔力も尽きちゃったしさ」

方をすくめて言う音弥は、負けたというのにまるで悔しそうでなく、むしろ清々しさを露わにしていた。

「そうですか……？」

「ああ」

なんだか拍子抜けする決着のつき方だった。

力の半分も使わずに勝ってしまったのだ、それも当然だろう。

萌葱と華音が刻季の元へとやってくる。

「お疲れ。大丈夫だった？」

「うん。まだ耳がキーンとしてるけど……」

「あのね。あれをくらって『耳がキーンとしてる』で済むってことは大丈夫ってことなの」

まったく規格外なんだから、と華音が呟く。

「我が君、刻季様、あの……」

華音が顔を赤くしてもじもじしている。

今までの華音とは似ても似つかない表情と行動だ。

そう刻季と変わらない身長的女性がこのような格好をしていると少し変な気分を感じる刻季だった。

「格好良かったですっ」

「え？ あ、ああ、ありがとう」

とろんと心酔しているような目で言う華音に刻季は困惑しながら返した。

萌葱がそれをみて、まさか本気で惚れちゃったの……？と怨念染みた様子で呟いているがそれが刻季に届くことは無かった。

第12話 雷神の鉄槌（後書き）

風邪が治って書くぞ！と意気込んでいたらプロットが何故か全消去されてて、そこから書き直して遅れてしまいました。

久しぶりのバトルパートいかがでしたか？

楽しんでいただけたら幸いです。

やっぱり苦手だ……

第13話 新結社

決闘明けて今、談話室と呼ばれる部屋に刻季と華音と音弥はいた。ここだけは洋室で、襖を開けてみたらモダンな部屋があつてびっくりしてしまった。

ちなみに萌葱は現在音弥・華音の父親である音彦のもとへいる。

刻季は師団の家同士なにかあるのだろうと大して気にしていなかった。

黒い革のソファ―に音弥を正面に、華音を横に控えながら少々堅苦しい面持ちですわっている。

あまりくつろげていない刻季を見て、華音は安心させるように横に座ったのだが、それは逆効果としか言えないようだった。

なぜならソファ―が小さいのだ。

1人用とまでは言わないが1・5人用というような大きさで、もし体の大きな仁吾が座ろうものなら仁吾1人で埋まってしまうような大ききなのだが。

幸か不幸か、華音は言わずもがなだが、男としては細身の刻季と2人では座れてしまうのだ。

誰が見ても（特に竜也など）幸せにしか思えない状況だが、この場で甘受できるほど刻季も心が強くなり、ただ表情を堅くするばかりだった。

刻季の両サイドにも同じソファ―があるのに、華音はそこから動くせす、むしろ刻季へ積極的に寄り添っている。

妹の見たこともない積極的な行動に音弥は苦笑しながら話を切り出

した。

元々話があると誘ったのは音弥なのだ。

「華音ったらそんなに羽間君のことが気に入ったの？」

まさかこんな話をするために呼んだはずではないだろうが、場を和ませるためにこの話を選択したんだと刻季は予想した。

ただ刻季としてはその話題で和むことはないだろうと確信しているが……

「はい、一生お仕えしたい方だと思っています」
ほら……

顔を赤らめて言う華音の魅力は、それはそれは素晴らしいものだったが、刻季にとっては心臓に悪いものだった。

藪をつついてもいないのに、勝手につつかれて蛇が出てきた状態だ。

先程の決闘が終わってから、華音の様子が少し変わっていた。

知り合って2日程度で何もわかっていないのかもしれないが、どことなくよそよそしさを感じていた。

なんだか掴める距離にいるのだが、掴もうとすると虚空を握るようなもどかしさがそこにはあった。

今も隣に居るのに少し恥ずかしがっているような様子だ。

いつもなら平然と無表情を浮かべているだけの状況なのだが、今は顔を赤らめて刻季のことをチラチラ見ては目が合うと避けるといった行動を繰り返している。

恥ずかしいならこんな近くにいないればいいのと思うが、華音はそこから動く気配すら見せようとしない。

また一度華音のほうを見ると華音もやはり刻季を見ていたようで目が合うが、すぐさま視線をそらしてしまう。

黒髪がはだけて見える横顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

鈍い刻季にも察する事が出来た。
照れているのだ、ただ単純に。

華音のあまり見ることの出来なような表情を見て刻季は思った。

（可愛いじゃないかーっ！！）

この厄介事ばかりを選んでもってくるような女性は外見的なスペックは完璧なので、それでこの仕草を持つことは反則的な可愛さだった。

（なに？ これ？ 本当に華音だよーね！？ やばいやばい！ なにこの可愛い生物？ これで甘えられたら何でも受け入れそうだよ！
なんか華音じゃないみたいだ）

所々に『華音別人説』を取り入れていて、聞かれたら怖い笑みを浮かべて『わかってますね？』と目だけは笑わずに言ってきた。そんな刻季の内心だったが、これほど動揺するほど華音が魅力的なのだ。

危なく刻季は認めていないが主従の関係を越えたイケナイ関係へと発展しそうな状況だったが、刻季は未成年だったし、そうでなくても華音に手を出したらどうなるかぐらい刻季にもわかっていた。ギリギリのところで理性が踏ん張り耐えた刻季は、可愛すぎて美しすぎる生物からようやくと目を離すと音弥に訊いた。

「……そういえば、なにかお話があったのではないですか？」

「羽間君も華音に対してみたいに敬語使わなくていいよ」

「いや、それは……」

自分より2歳上の相手ですら渋りに渋ってようやく敬語でなくなっただのに5歳近く上だろうと見える華音の兄に対してまで出来るほど刻季は礼儀を軽んじる人ではないので固辞した。

「ま、いいか。それは今度で。それで話というのはね、羽間君」

「はい、なんでしょう」

少し嫌な予感がしたが、ここ数日で何回も感じている為どこかその感覚に対して鈍くなっていたためそこまで気にしていなかった。

気にしていたところで、嫌な予感というものは外れるモノではないことを、この巻き込まれ体質君は気付いてないのだろう。

「僕を作る魔術結社の頭首をやってほしいんだ」

「魔術結社？」

魔術結社で有名なところは、師団、や、旅団、といったところだろう。

「そう、結社を結成しようと思っているんだ。そのトップを羽間君に頼みたいんだ」

「いやいやいやいや！ そんな重大な役職なんて、一高校生にやらせるもんじゃないですって！」

軽く言う音弥に刻季が憤慨した様子で言う。

「大丈夫だよ。結社も若い人達だけで結成する腹積もりだから」

「だからといってトップが高校生じゃ頼りないにも程がありますよっ。普通にお兄さんがやればいいじゃないですか」

「うーん、まあ僕がやってもいいんだけどね。それじゃ師団と何も変わらなくなってしまうんだよ」

「……どういことですか？」

音弥の言う意味がよくわからない刻季は訊いた。
すると横から答えが返ってきた。

「兄上の作る魔術結社は師団と旅団の家の若い人達で作ろうとおもっているそうなのです」

「——っ!？」

華音の答えに驚愕が顔に浮かぶ。

師団と旅団に所属する家は表面上では友好的に接している家がほとんどだが、過去の結成当時はいざしらず、現在は家ごとに牽制し合
い、結社ごとが牽制し合っているというのが、日本魔術界の上部――
師団・旅団の現状だ。
バランス

そんな家の若者を集めて結成するということは、そのバランスが瓦解することを意味している。

いずれ日本魔術界のトップに属する人たちが集まる結社ということになるのだ。

そんな結社は師団と旅団からまず認められないし、国からも認められないだろう。

ましてや、その頭首が刻季などあり得ない。

刻季は『羽間』であって、『羽間』は現在『20旅団』ブリゲイドではない。

『羽間』とは即ち裏切り者也。

……これが羽間の家の過去である以上、刻季が頭首を務めることなど許された行為ではない。

羽間にとっても師団にとっても、もちろん新しい結社にとっても……。

「やっぱりできません……。とてもありがたいお誘いですが……」
刻季自身やりたくないという気持ちは思いのほか薄かった。しかしやれない、出来ないという意味が強すぎた。

『羽間』には縛りがあり過ぎた。

「羽間家のこと気にしているの？」

音弥が刻季の一番深いところを突いてくる。

その質問に一気に燃え上がった。

「気にしないわけありません。もちろん気にしています。今は『羽間』がどうだ、なんて言う人はいませんし、第一表向きでは『羽間』なんてただの没落した家の一つでしかありません。それに萌葱も南雲家も僕や羽間に良くしてくれています」
一呼吸を入れる。

「それでもやはり僕は産まれた時から『羽間』なんです。曾祖父と同じ家だというだけで産まれた瞬間から裏切り者のレッテルを貼られているんです。そんな『羽間』なんかが結社のトップなんて認められるわけありませんし、まともに務められると思いません」
途中途中苦しそうになりながら言い切った。

言いきったところで久しぶりに感情を発露してすっきりした気持ちもあったが、無関係な人にここまで話してしまったという後悔が大きくなっていき次第に刻季は肩を落としていった。

後悔に崩れているとふいに横から抱きしめられる感触があった。

そちらを見るといつも無表情な華音がにこやかに、まるで聖母のように刻季に微笑みかけている。

優しい笑顔だ。なんだかその笑顔だけで暖かい気持ちになり、いつもこの笑顔を見せてくれればいいのにと華音に失礼と思うが刻季は少し釈然としなかったが、それでも暖かくなっていく気持ちは止まらずに華音の体温がどんどんと刻季の方へと流れていった。

……体温？

そこでようやく自分の体たらくに気付いた。

（僕抱きつかれてるじゃん！）

危うくこのまま寄り添ってしまおうかと思っていた刻季は急激に恥ずかしくなっていき、華音に呼びかけた。

「……あ、あのさ、華音」

「なんででしょうか？ 刻季様」

「あの、もう大丈夫だから、そろそろ離してくれないかな？」

「嫌ですね」

無表情に戻して華音が拒否した。

「でもさ、ほらお兄さんもいることだし……」

「あんなの、刻季様に抱きつくことに比べたらいてもいなくても同じようなものです」

「いや、それはちよつと……」

実の兄に対してだいぶ失礼なことを言ってる華音に音弥は苦笑を浮かべていたが、それでもどこことなく楽しそうだった。

「とりあえず、話をもどしていいかな？」

「あ、はいっ。ほら華音？」

「このまま続けてください」

「いや、それは……」

「まあいいか」

音弥が諦めて話をしようとするが、あまり良くないと切実に刻季は思う。

「それでね、新結社の暫定メンバーは一応羽間だなんなんって言わないから別に羽間君でも大丈夫だから。その上頭首の決定権は僕にあるって承認されてるから別に僕が羽間君って言ったら皆反対も出ないんだ」

今刻季が出来ないと否定していた問題をその言葉だけで覆してしま

った。

「それでも、決定権があるっていつでもやっぱりみんなから承認してもらわなきゃ話にならないから自分より強い人って決めていたんだよ。でもそんな若くて強い人なんてそうそういないし……。そんなことを思っていたら華音の主人が現れたって聞いて、それは華音に勝ったから主従を結んだって。……決定権を委ねられてすぐにそんな話をタイミングよく聞いたから、自分の中では決定づけていたんだ」

矢継ぎ早に音弥が言った。

そんな勝手な……とは刻季は何故か思わなかった。思えなかった。刻季の知らないところで勝手に決定していたとしても……

「そんで戦ってみたら、完膚なきまでに負けちゃって、しかも魔術も使わずに……。そんなことになったらもうこの人しかない！ と思えないっしょ？」

「それは……どうでしょうか」

「僕はそう思ったんだ。だから君に頭首をやってほしい」

「……………」

刻季は首を縦に振れなかった。

やってもいいかな程度には思っているものの、それを決定づける事象がないのだ。

「私も刻季様ならふさわしいと思います」

横から華音が後押ししてくる。いまだに抱きつきながら

刻季至上主義であろう華音のいうことだからあまり信用出来ないというわけではないが、自分がそんな大役をやっていいのか？ という想いが溢れてくる。

正直、華音が見初めるほどの人物ではないと自身では思っているの

だ。

それなのに、それゆえに、自分が将来有望な師団と旅団の若者をまとめることが出来るわけないと思うのは当然のことだった。

頭首をやるだけなら誰でもできるだろう、ただ立派に務めるとなってくると話が異なる。

刻季の言いたいことはそういうことだった。

それでもその権力が惜しかった。

『羽間』の家格を戻すためになるのかも、と少しでも思ってしまった。

現在実家にいる姉のためにやるべきなのか、とってしまった。

決定は現在、自分自身に委ねられている。

もし了承すれば、その瞬間から『羽間』の家名はぐっと知られることになるだろう。

もし辞退すれば、手に入れられたはずの未来を失うことになるだろう。

——二つに一つだった。

第13話 新結社（後書き）

『羽間』の話を少し掘り下げてみました。
詳しくは機会があれば

第14話 始まりの物語の終わり

答えも結果も二つに一つだった。

これに了承すれば『羽間』の家格を少しでも取り戻すことが出来るだろうし、しなければそのまま没落したままの未来が待っている。

このように言えば了承すべきだ、と思うかもしれないがそんな簡単な話ではない。

刻季が高校生だから務まらないというのももちろんあるが、それは華音や音弥に協力してもらえばなんとかなると割り切って。

それ以上の問題とは『羽間』が要職に就くのを師団が許すか、ということである。

音弥の話が本当かはまだ確信の持ちようがないがもし本当ならば、今後の師団の家の当主候補があつまる結社ということである。

まあ音弥と華音が所属する時点で嘘になりにくい話ではあるが……。

現在ではないとはいえ未来の日本魔術界を担う一手に値する師団・旅団の家の継子で結成される結社の頭首になるなど、裏切り者との認識が晴れているはずのない羽間がやることは警戒されるに決まっている。

刻季自身は『羽間』の名前で革命を起こそうだなんて思ったこともないし、権力なんて高校生である刻季に必要なはずがないので求めたことも無い。

必要以上に目立つことは良しとしなかったし、華音のことも黙認はしているが正式に認めた覚えは無い。

つまり権力を持ったところでそれを無理に行使しようだなんて考えてない。

求めているのは不遇である『羽間』の家に生まれた姉の為になるように『羽間』の家格の最低限の復活である。

いやもちろん、姉だけでなく、両親に祖父母もその対象なのだが、

現状では姉の為の家格回復が第一のモットーであるといえるだろう。

それゆえに刻季自身に辞退する気持ちがあるといえ、面倒事が増えて面倒くさそうだ、ということしかないのだが、師団の反対があれば話は変わってくる。

認められずに、結成すら出鼻をくじかれて終わるのではないかと、いった疑問が消えることなく刻季の頭を駆け巡るのだ。

要約すると、刻季自身はそこまでやることに否定的ではないが、他の連中は知りません。

といったところだ。

そんなことをいつまでも思っていて話が始まらないし進まない、良い方にも悪い方にも。

堂々巡りする頭を切り替えて一番に障害となるだろう話から切り出した。

「僕は今、やることはやぶさかではありません」

華音がその言葉に目を輝かせる。

「ですが僕自身が良くても否定的な方々もいっぱいいるでしょう。

例えば――」

「師団、とか？」

刻季の声を切って割る音弥。それは刻季の内心を見据えていようものだった。

少し動揺するが、音弥ならそこまでやってもおかしくないと多少なりとも思っている自分がいたので話を続けた。

音弥にしてみれば失礼な話だが

「ええ、そうです。それに師団だけでなく旅団も……。たとえば僕以外のどんな一般人がやっても反対されるでしょうが、僕ならなおさらです。結成すらままならない状態になるのではないですか？」

刻季を今縛っているもの、それは単純であり複雑なものだ。
相手を断定できる分単純だ、しかしそれからは避けて通れない分かなり複雑だ。

師団・旅団それに多分、宗教徒も。

そう言えば単純だが、それが敵だとわかっていて分単純だが、これらから防ぐことはかなりの難題でかなりの力を必要とする。

まず一介の高校生に出し抜くことは100%不可能といえよう。

しかしそんな刻季の当然の想いも一言で覆される。

「大丈夫」

そう発した音弥はさながらこれから魔王を倒しに行く勇者のような頼りになる表情をしていた。

「……大丈夫って何が大丈夫なんですか？」

だが音弥の頼りになる表情を見たところでそう簡単に意見を変えられるわけではない。

「だから大丈夫なんだって。羽間君はトップとしてデンと構えてくれるだけで、さ」

「そんなの根本的な解決なんて何もしてないじゃないですか」

「根本的な解決なんて最初から出来ると思ってないから」

「えっ……？」

「別に根本的な解決を結社なかまとして求めているわけじゃないんだ。もともと上に認められると思ってもないし、そんなこと見込んでいるわけでもない。僕たちが作るのは――」

――秘密結社だ

音弥の声に部屋が静寂に包まれる。

音弥としては刻季の反応を求めているのだろうが、驚いて声を出すことが出来ない。

「……………」

「ははっ、そんなに驚いてどうしたの？」

元の飄々とした態度に戻して音弥が訊いた。

「元々結社を作るとして、国に申請書をだして……なんてことは必要なのはわかってるでしょ？　そうなるとただ結成表明するしかないかの違いじゃないか。表明しなければ秘密結社ってことになるのは当然」

「……………」

「……ま、秘密結社だとしても親父たちにばれるのは時間の問題。」

いや、もうばれてるかも……」

「ダメじゃないですか!？」

ずるっと漫画のようにこける刻季。

「でも、うちの親父は強く言えないはずだよ」

「何故ですか？」

「僕に勝ったからね。魔術も使わずにさ」

「……すいません」

思わず謝ってしまう刻季。

「いや別に、いいよ。使えない事情もあるんだろうし」

「そうです。刻季様は全く悪くありません」

刻季の事情を知っている華音が刻季を庇う。

「ま、そういうことだから親父からは当分大丈夫だろう。その間に地盤を固めて……」

「あの……ッ」

「ん？」

「なんか入ること勝手に決められてませんか？」

「えっ！？ 違うの？」

なんか変な声を出す音弥。喉の奥から出ているような声だ。

「いえ、違いますけど……。でも最後にひとつだけ」

「ふう……。なにかな？」

安心したように息をつく音弥。

「結成する目的はなんですか？」

一番大事なことを完璧に訊き忘れていた。

「あっ……話してなかったっけ？」

頷くと音弥は言葉をつづけた。

「いくつかあるけど、第一の大きな目的は魔術師の権威の向上。結局国の下で統制されているただの魔術師の意見はそこまで反映されないからね。二つめは宗教徒との均衡を整えるため。最近教徒の力が凄いからね、そのバランスを調節したい。魔術師勢力を教徒サイドより大きく出来たら言うことなしかね。それで三つめは……、これは目標というよりも願望に近いんだけど、現在の魔術体制を崩すこと。師団の下に全ての魔術師がいるという状態をなんとかしたい。全ての平民魔術師の発言権をもっと大きく、より豊かにしたいんだ。あとは個人個人であるんでしょ。それは上の目的とともに解決すればいいよ。とりあえず結成の目的は以上三つ」

一気に言った音弥の目的と願望はあまりにも難題だった。生きているうちに変えられるようなものではない。

「一つめはわかります。二つめも……まあ、わかります。でも三つめは……」

「だから目的じゃなくて願望なんだよ。そう簡単に出来ることじゃない。日本魔術界を根本から変革するわけだからね」

「秘密結社にそこまで出来るのでしょうか？」

「わからない……、だからいずれは表明するつもりだよ」

「師団の家の若い人たちもそれを納得しているのでしょうか？」

「半々……ってとこかな」

内部にも反対勢力はあるらしい。

「僕も今の状態を崩さない方がいいと思います」

刻季が反対の意思を表す。

「どうして？」

「今の状態に満足している人も多いからです。もちろん『羽間』の意見ではありませんが……。現状を崩してその時に教徒との争いがあつたら、魔術師は一気に瓦解してしまいます」

「うーん、確かにそうなんだけどね。ちなみに『羽間』としての意見だとなるの？」

「お兄さんの話はとても魅力的だと思います。『羽間』にとってこれほどの報酬は無いでしょう。でも『羽間』だけで喜んでいてはいけない話だと思います。『羽間』が良ければそれでいいなんて話になつたら、より『羽間』は恨まれてしまいますから」

微笑む刻季。しかしそれは苦笑しているようにしか見えなかった。

「ま、話は結成してから何回でも出来るよ。それじゃ羽間君はOKということでもいいのかな？」

「……こちらから要求があります」

「僕達にできることならなんでも聞くよ」

律儀にも華音も含める音弥。

それはいらぬお世話だったが。

「まず一つめは2人ほど結成メンバー枠を開けたい欲しいんです」

「2人？ 別に制限人数なんていないけど、入れたい人でもいるの？」

「はい「女性ですか？」……え？」

華音が抱きつく力を強めて食い気味で訊いた。
どこか非難する様な目で

「まあ一応女性だけど、萌葱と姉さんだよ？」

「刻季様はお姉様がいらっしゃったのですか？」

「うん、まあね」

「そうですか、それでは是非今度挨拶をしに行かせていただきます。
ご両親にももちろん」

「いや、それは……」

「空いてる日取りを教えて下さい」

「えっ……ちよつと……」

教えるわけにいかない。華音に紹介させたらまたとんでもないことを言うに決まっている。

それに姉には然るときに然る説明を刻季自身^{……}がしなければ……。

華音と姉を混ぜたらどんな化学反応するか想像もしたくなかった。

こんな表現したくもないが劇薬同士を混ぜるようなものだ。

ヘタしたら死人がでる……。

それでも姉を結社に含めることは刻季の中で絶対に必要なことであつた。

「……それじゃ、今度ね」

とりあえず言葉を濁して逃げようと図る刻季。

「はい、ありがとうございます。我が君。約束です。絶対忘れません」

「……………」

しかし逃げ道をふさがれてしまった。

華音が抱きつく腕を緩める。

華音は華音で少しアレな人なのだが、姉は姉でアレなのだ。
刻季は姉に後で連絡し、華音を個人的に紹介することに決めた。

「萌葱さんってさっきの子だね？ それなら勿論大丈夫。まだ誘ってはないけれど、頭数には入っているから。それで羽間君のお姉さんは強い人なのかな？」

「ええ、その点に関しては問題ないと思います」

「なら、いいよ。というより頭首の要望は出来る限り応えたいところだから」

「ありがとうございます」

頭を下げる刻季。

頭首というのはまだなっではないが、聞き流した。

刻季の意味も固まってきている。

「それから最後にもう一つだけ」

「ん？」

「僕は戦いますが、その時に魔術を使わないことを容認してもらうのと、それを結成メンバーに伝えてください」

一応魔術を使えないでなく使わないと言っておく。

「別にいいけど、どうして使わないの？ 戦う上で魔術は必要ないとじゃないの？」

「……兄上。我が君、刻季様は事情があって魔術は使えないんです。ですが誰よりも強く、そして誰よりも美しく勝つことが出来るお方です。なので、あまり詮索の程は……」

「……うーん、わかったよ。でも戦争がある場合は第一線で戦ってもらうから」

華音があっさりと刻季の魔術が使えないことをばらす、それより

も……

「……戦争？」

「当たり前でしょ。最低でも教徒と、最悪師団とも決別するかもしれないから。もともと師団から独立している結社なんて魔術界の異端も同然の扱いだからね」

刻季が疑問を呈すると音弥が説明し、華音も当然のことのようにキョトンとしていた。

現在日本魔術界の結社は、殆ど師団の管理下に置かれている。

例外は、国家の下にある結社と、秘密結社のみだ。

だから必然的に結成表明すれば師団の許可ありきの結社と思われる。しかし、今回の結社は違う。

秘密結社として活動し、結成表明を掲げたとしてもその時は完全に師団と決別していることだろう。

それも師団の家の者がだ。

もし結社の力が強くなれば、師団の敵として扱われるだろうし、そうなれば処分くちくの対象になるだろう。

今は刻季と音弥の戦いのことで黙認するかもしれないが、それがずっと続くとは考え難い。

やはり姉を含めるべきでは無かったかもしれないと思い始めてくる。とりあえず、話すだけ話してみようと考えていると、華音が刻季の不安を感じ取ったのか、

「刻季様？ どうなさったんですか？」

「いや、姉を誘うかどうか考えていたんだ。自分のことならまだしも、戦うことは覚悟していたけど、戦争って言葉に少し怖気づいちゃったみたい」

情けなく、ははと刻季が笑うと華音がまた抱きつく腕を強めて言った。

「大丈夫ですよ。刻季様とならお姉様も喜んで戦うと思われます。私がそうなのですから」

久しぶりに微笑んで意思を伝えてくる華音。

不覚にもその表情は何度見ても、愛らしく愛おしいモノで刻季は照れてしまう。

「ですから、お誘いなさるだけなさってみてはいいかですか？ 私もお姉様に会いたいですし」

「そうだよ。誘ってみるだけ誘ってみなよ」

音弥が追撃してくる。

「そうですね。誘うだけ誘ってみることにします。ただ止められたらどうしょ……」

「それは確かに有り得るね……」

「そうですね……」

華音と音弥も刻季と同じく苦渋を浮かべる。

.....

何故誘って仲間になることか断られることしか考えなかったのかわからないが、現状最悪な結果としては刻季を引きとめることだろう。最悪の結果であって、一番有り得る結果だ。個々人で考えをやめないのも

沈黙が横たわる談話室。

そこに天原父との挨拶をようやくと終えたのか、萌葱が入ってきた。入ってくるなり怪訝な顔をした萌葱が一言。

「……なにこのお通夜ムード？」

萌葱の疑問も当然のことだろう。

萌葱としては誰かと指定してかけた質問ではなかった。

しかし皆は思考を止めずにいたので、萌葱の問いに返す者は一人もいなかった。

「えっ？　なんで無視するの？　ねえ……」

尻すぼみになっていく声で余計聞こえにくくなっている。

だからというわけではないが刻季たちはまるで萌葱の声を聞いていない。

皆して、うーんと唸っている。

そろそろ堪忍袋の切れる音が聞こえてくるぞ、刻季！

もちろんこんな人為的な呼びかけをしても届くはずがない。

萌葱が寂しさと怒り（1…9）でぶるぶると震え始める。

限界値がかなり低い萌葱はあまり我慢することなく怒りを発する。

「刻季っ！」

「うわっ……って萌葱？　いつの間に来たの？」

無神経に刻季が返すと萌葱は瞬間ヒーターの如く加熱に過熱を重ね、刻季にのみ怒りを向けた。

「あんたねえ。あたしが何回も問いかけてるのになんで無視するのよ？」

「え……？　ああごめん気付かなかったよ。ちょっと考え事しててね」

「ふーん、考え事ねえ。一体何をかんがえていたのかしら？」

刻季視点から見ると萌葱はいきなり怒りゲージMAXの状態で刻季の前に仁王立ちしている。

「そんでなんで会長とあんたは腕を組んでるのかしら？ 言い訳があるなら聞いただけ聞いてあげる」

ゆらゆらと髪が蠢いているような幻覚を見ているのか、と刻季は目を疑った……が、単純に怒りのオーラに充てられて萌葱が魔術を使っているだけだった。

「い、いや……、エート……」

さっきまで平和に考え事をしていられたのに、突然サファリパークに放たれたような威圧感を感じなければいけない自分の不運を呪った。

「ま、どんな言い訳でも意味は無いけど」

美人の怒り顔はすさまじく怖くて、どこでもいいから逃げたくなる。というか逃がしてやれ。

そこでそんな刻季を救う一人の少女がいた。

怒りが振り切っている状態の萌葱を諷める声がかかる。

「南雲さん、ダメですよ」

それはやはり華音の一言だった。

「今の状況はよくわかりませんが、刻季様に危害を加える可能性があることだけは察します」

相変わらずボケボケな華音の言葉だったが一応聞いた途端に怒りの視線は収まりつつあった。

「会長……」

「私もすみませんでした。何か私のやったことで南雲さんが嫌な気持ちになったなら謝らせてください」

「いえ、会長は何も……」

こんな純粋な生徒会長に対して、怒りの半分はあんたのせいよ、なんて言えるわけがなかった萌葱なので、図らずも軍配は華音に上がった。

しかもいまだに腕を組みながら。

毒気を抜かれる形となった萌葱はため息を一度突き刻季の手元にある腕掛けに腰を何故か降ろしてもう一度疑問を投げかけた。

そこで解放されたように萌葱よりも大きくため息をつき、萌葱に先程からの話を説明した。

「ふーん、結社ね。それであたしも。そして刻季あのひとの姉も。ふーん」
刻季を見下ろす形になっている萌葱は説明を聞き終えると、嬉しそうな表情と複雑そうな表情の二つを器用にも交互に浮かべて感想をもらった。

ちなみに見下ろしている姿に華音は、あまり我が主に不敬を働かないでほしい、と内心思っていた。

「なんであたしも誘ったの、刻季？」

嬉しそうに刻季を見下ろして訊いた。

「いや、なんでって……。もともと師団の家の人たちって話だったし……」

「それでも決定的に誘うことにしたのはあんたでしょ？」

「まあ……そうだけど」

「それはなんでなの？」

表情を変えずに何度も問いかける。

実は刻季が鈍いだけなのだが、萌葱は刻季から誘われたことが嬉しいのだ。

まあ鈍いから気付かない鈍感男って言うのは大変だろう。

「うーん、っていうか萌葱がいないことが考えられないからなあ、理由なんてないよ」

「えっ!？」

一瞬でより幸せそうな笑顔に萌葱はなった。

その反面華音は何故か不機嫌そうな様子だが。

理由なんてない、とは言っているが、それが理由ってことにその場にいる刻季だけが気づいていなかった。

「そうか、そうか。あたしがいないのは考えられないか!」

さっきの怒りはどこへいったのやら、と刻季は不思議そうに萌葱を見ていた。

目に見えて嬉しそうな萌葱が結社に入ることがたぶん決定した。

これで拒否する人間はあまりいないだろう。

ともあれ、これで現在残っている憂いは姉を誘うことだけになった。それはもうすでに刻季の中で、誘ってみなきゃ始まらない、といった考えが纏まってきたので後は誘うことを実行するだけだ。

刻季の考えが纏まったのがわかると、

「それじゃ、これからよろしく、頭首さま」

音弥がおどけて言うのと華音が続いて

「よろしくお願い致します、我が君」

刻季の腕を離して、席から立ち、兄妹で刻季を歓迎した。

2人は対照的なようすだったが、どこか似ている雰囲気があった。

「えーと、とりあえず。よろしく願います」
頭をポリポリ掻きながら刻季も返事をする。

「あたしもよろしくおねがいます」
萌葱もそれに倣って言った。

――××92年4月12日天原邸宅。
ここから結社の結成が始まった。

ここは天原邸と打って変わって、純洋風な邸宅だった。

その部屋には、剣から始まり、槍、爪、戟など、大小様々な武器が立てかけられていたり、飾られていたりした。

その武器を見るだけで、この世界の人は『宗教徒』とわかる。
現在武器の所有・使用許可が出ているのは、宗教徒と国家役員のみになる。

国家役員はこんな豪勢な部屋に住まうことは許されていないことから、消去法でいくところは宗教徒の家ということだ。

その家の王家の謁見の間さながらの部屋には人が集まっていた。

「陛下、トゥエルフス12師団とは何時開戦するのですか？」

「まだ時期ではない。今戦えば彼奴らには負けてしまうだろう。負けなくても引き分け程度にしか納まらん。力を溜める時だと思え」

「「はっ！」」

陛下と呼ばれたその男は、部下を諫めるように言うと憂いを浮かべ

た。

魔術師と宗教徒の陰悪さは過去からのモノでそう簡単に取り除けるモノではない。

結局はどちらかが、勝つか負けなければ消えることは無い。

いや結果がどうであれ遺恨は消えることなく残るだろう。

それこそ何十年も何百年も何千年も……

今現在は国家が力を持っているため抑えは聞いているものの、パワーバランスが崩れたら、その瞬間争いが再発するだろう。

男はその瞬間を虎視眈々と狙っていた。

第14話 始まりの物語の終わり（後書き）

ようやく話が纏まってきたかな、と思います。

ここまで読んでくれた皆さんありがとうございます。

序章が終わったと云ったところででしょうか。

これからがんばって書くので応援してくれたら感謝の限りです。

今回長かった……

第15話 いや、これは、ちょっと……（前書き）

こんばんは、みなさん。

そしてすいません、みなさん……。

最後まで読めばおわかりになると思いますが、ちょっととんでもない奴作っちゃいました。

だってこの手が！ この手が止まらねえんだ！

というわけで嫌にならずに読んでいただければ……

これで離れる読者様がいたらどうしよう……（笑）

第15話 いや、これは、ちょっと……

密会談？を終え刻季は萌葱と共に寮へ向かっていた。

密会談と言うほどではないが話した内容は特定以外には秘密である。

だいたい夕方も過ぎたころだったので、萌葱は必要ないと固辞していたが、刻季は送っていくと断固引かないので仕方なくといった様子で受け入れていた。

萌葱もまんざらでない表情をしていたが。

その際華音も刻季を送ると言って聞かなかったのだが、それでは萌葱を送った後結局華音を送る羽目になる、というか刻季ならするの
で、拒否した。

そんな話し合いをしている時も音弥は如才なく笑っているだけだった。

天原今代当主であら音彦はもちろん見送りになんか来ていなかった。
呼んどいて失礼な人だなとは、刻季は思わなかった。

あの人の中ではそれが当たり前なのだ。

生まれてから天原当主となるべく育てられた存在。

音弥・華音兄妹と違い一人息子だと聞いた。

当然継ぐ権利があるのは、本家では音彦一人と、分家筋に何人かいるくらいだろう。

分家筋と言っても音彦に比べれば継承順位など有って無いようなものである。

その『天原』当主音彦が『羽間』と会うことが異例なのだ。

もしそれが他の師団家に知られたとしても——知られてないことなどないと思っているが——『天原』が会いたいと思うわけがない、

願うわけがないと考え、そうなると思法的に『羽間』が会うことを望んだ、と他の師団家は考えるだろう。それでも何故会ったのかという他家の疑問が湧くのは避けられないが……

それは音彦にとっても変わらず、決して彼は自分から会いたいと言ったことは認めないだろう。

『羽間』への興味があることは師団にとってのタブーであり、それが師団にとってのプライドでもある。

しかし興味があることは仕方ない、何しろ『羽間』は叛逆者なのだから。

そんな単純でもないと思うが、タブーほど身体が求めるものはないという者もいるだろう。

それは仮令、師団の家の長でも一般的な魔術師でも宗教徒でも、そのどちらでもない一般人でも違いはない。

そんなタブーに触れられる機会が偶然に偶然を重ねて生じた。

『羽間』の弟の方が天原も土地を貸している、というか天原家もそこに置いている魔術優遇第三区空明ヶ崎学園が入学することになった。

これには刻季も知らない多少の思惑も絡んでいた。

『国家』・『師団』・『羽間』の仲立ち策だ。

未だに『羽間』への警戒心が残る師団、旅団に少しでも警戒心を緩めるようにとった対策だった。

国家の所有する優遇学園に入学させることによって、『羽間』は『国家』に属するものだ、と『師団』に対して明らかにしたのだ。

そしてそれは直接的ではないが『国家』の下にある魔術師——師団と共にあるモノだ、ということに暗に匂わせている。

それを表すことによって『師団』の下に『羽間』があることをも表していた。

『国家』としても『羽間』の力を警戒していたため、このような軟い解決法を取るようになったのだ。

国家が求めれば、師団・旅団と羽間の仲を取り持つことは強制的に行うことは出来る。

ただ「師団は羽間を許せ」と申せば、それを師団は受け入れなければいけない。

しかし魔術師・宗教徒・国家の三すくみの状態でそれをやれば、国家が崩されかねない。

国家が一番力を持っているといっても、宗教徒と魔術師を合わせた場合の方が断トツ力を持っているのだ。

もちろん宗教徒と魔術師の仲の悪さは表向きでも裏向きでも知られていることなので、そこが結び付くことはあまり考えられないことなのだが、万が一ということもある上、『国家』はこの三すくみの状態を維持したかった。

天下三分の計というわけではないが、デリケートな問題だらけの日本でこれ以上争いを増やすことは決して得策とはいえなかったからだ。

それになにより50年前の同盟は『羽間』の叛逆が原因で立案・調印にまで至った。

それゆえに長年望んでいた同盟がなり国家としては『羽間』を警戒はするが、嫌な感情などあるはずもなかった。

その『羽間』と『師団』の仲を取り持つのも機会さえあればやっておきたいことだったのだろう。

出来る限りのちに遺恨を残さないように……との無理難題な要求も含めて。

絶妙なバランスのもとに成り立っている今の関係は裏を返せば、どこかが崩れると日本が崩壊することを意味している。
すぐさま世界の餌食へとなるだろう。

そうなつては、魔術と教徒が手を組もうと後の祭だ。

ともあれそういった諸々の思惑が重なって羽間刻季の入学が決まった。

もちろん刻季はそんなこと知る由もないのだが……。

師団の家でも『羽間』の叛逆があつてから短くて1代ほど、長ければ3代進んでいる家もある。

天原では当然音弥・華音はその時生まれてなどいなかったし、音彦ですら生まれていなかった。

50年という短くも長い年月は遺恨を残したまま進んでいた。

それを取り除こうと国家が動き、さらに偶然が重なり、天原当代の娘である華音がの口から『羽間』と関わりがあると聞いた時音彦は会うしかないと思った。

過去に事件を起こした『羽間』の曾孫ではあるが見てみたかったのだ。

娘が刻季に仕えていると聞いて、聞き捨てならなかったというのも事実なのだが、それ以上にタブーへの興味を持ってしまった。

師団に許されざる行為、師団が求めるはずのない興味

そういった全てを忘れ、華音に会わせることを要求した。

その要求はズいぶんと親バカみたいなものになってしまったが、そう思わなかったこともないので訂正はしないでおいたこともあった。

師団の他の家は『天原』が許されないことをするわけがないだろうとある意味高をくくっているところがあるので、それを隠れ蓑に刻季と会った。

幸い師団は音彦の欲求に気付くことは無くすむだろう、と彼は思っている。

これも刻季の気付くことのないことだ。

そんな事を音彦が思っているとは知らず、刻季と萌葱は長年連れ添った夫婦並みに息と歩調を合わせ帰宅している。

萌葱の実家は刻季の実家と同じCクラスのC地区に属する埼玉県周辺にあった。

そして両家のご近所で、南雲家当主である萌葱の父親も師団がなんだ、羽間がなんだと気にするような性格をしていない随分とラフな人なので、両親同士が仲良くなり必然的に萌葱と刻季も生まれた時から一緒にいることが多かった。

刻季にとって人生は萌葱と共にあった。

同じ幼年部に属し、小中高と同じならそれも当然だ。

仁吾も中学校から魔術学園に通い一緒にいる時間は長い方だが、家族や萌葱との付き合いに比べたら文字通り桁違いになる。

刻季がこの学園に涉々ながら（強制的ではあるが）通っているのは萌葱がいたことが一番の要因となっているのかもしれない。

そしてそれは萌葱にも言えることだろう。

その2人は実家から出て通わなければとてもではないが通える距離では無かったので、当然のように寮の部屋を支給された。

もちろん刻季は男子寮・萌葱は女子寮だが、そこでも割とご近所である。

今年で16周年のご近所付き合いをしている二人なら歩幅を合わせることなど思考せずとも自然と行える事だった。

「萌葱、さつき華音の父さんと何話してたの？」

ふいに気になって刻季は疑問を漏らした。

「うーん、普通の事だよ？ 師団の家同士だし、天原と南雲は家が割と近い方だから音彦さんとも何回も会ったことあるし、いつも通り話ただけ」

「ふうん……、やっぱ萌葱は師団なんだね」

「当たり前でしょ。そんなの刻季が一番知ってるじゃない」
にっこりと笑いながら返す萌葱。

その笑顔はいつも大人っぽい彼女にはあまりに似つかない歳相応の、信頼した人にしか見せない警戒心のまるでないまっさらなそれだった。

これまでいつ見ても変わらない美しく可愛いその笑顔を見ると刻季はドキッと胸の鼓動を早めた。

「い、いや、偶に忘れそうになるんだよね。あんまりにも身近すぎるもんだからさ」

長い髪を揺らして表情が読み取られないようにそっぽを向く刻季。

「まあ確かにそれなら仕方ないかもね。それよりあんたさ、音彦さんに気に入られているの？」

突然声音を少しだけ真剣にして萌葱がいった。

なぜそんな事を言うのか皆目見当がつかなかったので、えっ？ と刻季が聞き返すと萌葱は声音を変えずに言った。

「いや、二人で話している時はもちろん、師団の話とか、南雲の現況とかを話してたんだけど……」

「元凶？　なんか南雲悪いことしたの？」

「ばっかっ、現況よ、現況。現在の状況」

ああ、と納得する刻季は全く緊張感のない頬の緩んだ表情をしていた。

「でも今日一番最初に刻季と会長と部屋に入った時は、音彦さんあたしと会話することはおろか、挨拶すら交わさなかった」

「まあ確かに少し同じ師団所属にしちゃ失礼だけど、そんなもんじゃないの？」

緩んだ状態で問いかけに応答する。

「いや、そんなこと有り得ない。別にそれが嫌だったとか、だから威光を振りかざすとかそんなことはしたくないんだけど、あたしの父さんは次席セカンドなの、そうなると家格も今代では必然的に天原よりも上ってことになるのよ」

一回区切って深呼吸をして続けた。

「その家の娘に対して、あの伝統を重んじる天原が挨拶すらしなんて有り得ないのよ。それは今までいつ会ってもしてくれた事だから覚えてる。だから音彦さんは刻季の事を気にいったのかなって思っ
って……」

音彦が萌葱に挨拶する余裕が無かったのは『羽間』ということだ。警戒していたからに過ぎないのだが、年がら年中一緒にいる『南雲』と『羽間』にはそれに気づく術が無かった。

「うーん、気に入ったってことはないと思うよ。むしろ逆かな」

それでも嫌そうな表情一つも浮かべず刻季は言う。

もともとそこまで歓迎されると思っていけないのだ——たえ招待したのが天原であっても。

「逆って……、そんななんとも思っていないみたいな顔で言わないでよ」

という萌葱だったが少し安心したような顔になっている。

「それと、さ」

また何かを思い出したのか萌葱が刻季の方を向く。

今日はいつもの上におしゃべりだった。

「あんた、あの人誘っても良かったの？ 別にあたしは来るって言うなら歓迎するけど、でもさ」

あの人とは刻季の姉の事だろう。

まだ心配しているのだ、誰をととは言わないが。

「うん、だって結社結成にあたって僕の望むことは『羽間』の復興が第一だからね。それは姉さんの為でもあるし、僕の為でもある。もちろん母さんや父さん、お爺ちゃんお婆ちゃんの為でもあるけどやっぱり一番は姉さんかな。だからそれは姉さんと叶えたいし、たぶん知らずに結成しててバレたら何されるかわかんないし……」
後のほうになっていくにつれて徐々に声が小さくなっていった。

「まああの人なら、『トー君、お姉ちゃんをそうやって仲間はずれにして……わかってるね?』って言って刻季の事を縛りつけるぐらいのことはしそうだけど……」

その言葉に刻季は何を思い出したのか怯えてブルブルと震えだした。

萌葱は送ってもらっている身だが、心配になり立場を変えようかと少し悩んだ。

しかし刻季の手前それを言うことは憚れた。
というか、これ以上余計なことでダメージを負わせたくないのだった。

たった一言刻季の姉の真似をしただけで、刻季は小動物のように震え上がっている。

萌葱もその人のことは知っていたので、なんとなく冗談だと笑い飛ばせず、それからは先程より刻季の方に体を寄せて震えを緩和させることに努めた。

萌葱を心配されながら送り、すぐにUターンをして寮の自室に帰ってきた。

もう震えは止まっているが、これから震えなくなるかどうかは刻季次第だ。

どう転んでも後で仁吾の部屋に遊びに行こうと思いながら、刻季はスクールバッグから携帯電話を取り出してアドレス帳のハの段から下へカーソルを動かした。

アクティブな祖父の名前や刻季を甘やかし度では姉と張れる母、そして刻季が生まれてから母に疎んじられがちの父の名を通り過ぎて姉のところで決定ボタンを押した。

夕方とはいえ、姉ならいつも忙しくしているので出るかな？と神に出ないよう祈りながら通話ボタンに指を掛けて、

ひと思いに押した。

仕事などで電源は切っていないのかどうかも確認する間もなく、プルと音が一度なった瞬間に……

出た。

刻季が通話ボタンを押してから、ものの1秒程度でだ。そういえば刻季はここ数日の事で忘れてしまっていたらしい。姉とは何たるかを……

「もしも……」

『トー君！？ わぁ……10日と9時間34分56秒ぶりのトー君の声だぁ。それでどうしてよ！トー君。今までなんにも連絡くれないで！ トー君が今どうしているかな、って想い悩んじゃってたらこんな時間過ぎちゃったよ！ ……いや……でもいいの、それでもいいの。わたしは待てる女だから……、トー君がどんなに遠くに言っちゃっても、わたし一生待ちますからね、あなた。わたしのこ
と少しでも頭の片隅に置いてくれているだけで、わたしは幸せだから……。……それでどうしたの？ トー君も滯桜^{みお}お姉ちゃんの声が聞

きたくなっちゃった？　ならわたしと同じタイミングだったね。わたしもトー君の声聞きたいって思っていたから……、やっぱり相性抜群だね！　でもわたしはいつでもトー君の声聞きたいって思っているからタイミングなんて関係ないか。でもそれはトー君も一緒だよね！　……そう言えばなんか声から女の匂い^{メス}がしたよ、トー君！　……いくらわたしと離れているからって他の女に浮気はやめてほしいな。トー君の傍にいい女はわたしと^{ヒト}かろうじて萌葱ちゃんを許すだけなんだからね。あんまり他の女の顔^{ヒト}すら見てほしくないんだからね！　でもモテるトー君もかっこいいしかいいから、ほんのちよびとだけ許してあげてもいいけど、本気になったらだめよ！　浮気はわたしに縛られた後に自害する覚悟があるなら、手がたまたま触れちゃうくらいだったら許すけど……。とにかく一刻も早くトー君に会いたいから偶には妻の顔見^{メス}に帰って来てよ！　……まあそれは今度会った時にでもはなすとして、何かお姉ちゃんに話でもあるの？　トー君のお話ならなんでも聞いてあげるしなんでも叶えてあげるよ！　どんなプレイでも対応できるし！　もちろんトー君以外のゴミ豚野郎には死んで灰になっても触らせてもあげないけど、トー君に対してなら、スク水、メイド、チャイナ、セーラー服、ブルマ、スパッツ、ナース、女医、OL、CA、女教師、和服、魔女、巫女、チアガール、バニー、忍者、SM、ウェディングetc.、が対応可能だよ！　ウェディングは少し恥ずかしいけど、トー君が望むなら、明日にでも披露宴で見せることができるよ。家にわたしの買ったウェディングドレスがあるから見るだけならすぐに見せられるけど、どうせなら幸せな2人の門出を皆にも見せたいなあ。どうしよっかあ？　でもトー君まだ15歳だから、そんなすぐには出来ないよね。最低あと3年待たなきゃ……。あつ姉弟なんて気にしないで。日本の法律なんて策も同然だから、抜け道なんていくらでもあるよ。だからトー君は何も気にしないで大丈夫！　お姉ちゃんにすべて任せなさい！　現在の事実婚状態も嫌ではないんだけど、でもやっぱりそーゆーところはちゃんとしないとね

！ でないと元20旅団としての『羽間』の名折れだもんね。そー
 ゆーとこ気にするトー君のことが大好きだよ！ もう大好きすぎて
 今も卒倒しそうなところ堪えているんだよ、トー君！ ……もうっ
 ！ お姉ちゃんをここまでキュンキュンさせてどうするの！？ で
 お姉ちゃんをここまでおくさんキュンキュンさせてどうするの！？ で
 もそれもいいわ、トー君。だんなさまさあキュン死にする前に、いつも通りプ
 ロポーズの言葉を！ サン、ハイ！ 』

『深い』と言われていたが、訂正しよう。

『嫉妬深い』などでは言葉が足りない、束縛なんて可愛いモノでもない。

対比してみると

天原華音——彼女は刻季至上主義にここ数日であつた入門者。

羽間滯桜——刻季と同じ名字を冠する者であり、刻季の姉。彼女こそ刻季至上主義経験年数Ⅱ刻季の年齢という超上級者なのだった。

[illegible]

.....

『ねえ……トー君？ お姉ちゃんは今早くしないと待てなくなっちゃうよ？』

第15話 いや、これは、ちょっと……（後書き）

と、いうわけで、初期段階からプロットをかなり練りに練って作ったキャラ――

羽間姉こと澪桜姉登場です。

書いてたらあまりにも楽しくなっちゃって、止め時が分からなくなっちゃいました。

このキャラは、刻季にデレすぎてるキャラということを出したのですが……、なんかヤンデレ化してね？
書きまくってたらいつの間にか……

でも気にいってくれるとありがたいです。

これから華音と絡ませるのが楽しみになりました（笑）

それにしても文字数の約7分の1は澪桜姉の台詞ってどういうことですか……

第16話 THE 姉（前書き）

なんか書いたんで更新しました。

健康に生きる尾床様。

黄金拍車様。

感想ありがとうございます。

ハーレム主人公最強大好き王様も感想メールありがとうございます。
た。

と、いうわけで

姉です。

第16話 THE 姉

はざまみお
羽間滯桜。

彼女を知る者は、彼女の話をする時に必ず出す名前がある。

——『トー君』と

もともと気立てが良く、そして刻季の姉ということからでもわかるように、とても——とてつもなく美人だった滯桜は生来何事にもほとんど不自由なく過ごすことが出来ていた。

『ほとんど』と言うのは『羽間』への縛りなどが含まれている。

それ以外には、こんなエピソードもある。

刻季が産まれる前、4歳になったばかりという年齢で聡明、且つ類稀なる容姿を兼ね備えていた滯は、幼さゆえか危機感という徐々に鍛えられていく感覚がまだ乏しかった。

そのため暇になると、それなりの広さを持つ羽間家から飛び出して、没落貴族のような家に住まうような女中ではなく、しっかりと雇っている女中の目を離れた隙に、街を探検していた。

その日も滯桜は上女中の目が離れた一瞬の隙に、姿を忽然と消していた。

上女中が気づいた時にはもう遅く、滯桜はすでに門を超え街に出ていた。

上女中は、邸内にいる女中を集めていつものように簡易的な搜索隊を結成させ、何かが起こる前に一人娘である滯桜お嬢様を探すように命じた。

いつもはその搜索隊に見つけられるか、自分で帰ってくるか、町内の気の良い人に連れられて帰ってくるというのがオチなのだが、その日は違った――

漣桜はいつものように街を散策していた。

そこで見慣れない中年男性がじっと漣桜の事を見ているのに気付いた。

少し気味が悪くなり、足早にその場から離れようと進む。

すると、その男も漣桜を追うように進んでくる。

100mほど進むと、もう完全に自分を追っていると把握した漣桜は、走って羽間の家に向かおうとした。

その時点で魔術をある程度使えていた天才少女の漣桜は、身体強化魔術を使い速度上昇に努めたのだが、所詮は4歳、いまだ幼年部の1年に通うという幼い彼女は、大人とは基礎体力も魔術の使い方、力量にも差があったので、結局男に先回られてしまった。

その男はこう言った。

「ボクトアソボウ？」

鼻息荒く、唾液がこぼれそうな男に嫌悪感が最大限に膨れ上がるが、怖くてどうにも動くことが出来なかった。

男の目的は、とても可愛らしいその少女が気にいったので一緒に遊ぼうとしたらしい。

もちろん、漣桜と遊ぶというのは砂場でお城を作ったり、滑り台やブランコで遊ぶことではなかった。

怖くなって身体が震え上がり、それでも動けないという最大の危機が訪れた時、運よく漣桜搜索隊の一人がはぐれてしまい、隊に戻ろうとしていたその一人が漣桜を見つけた。

男は臆病風に吹かれたのか、搜索隊員に見つかるとうすぐさま方向転換をして逃げに行った。

そこでようやく助かったと思い、そう思ったら安心してまた、動け

なくなってしまった。

見つけられた捜索隊員におぶってもらい家に帰った。

あらかじめ連絡していた隊員が上女中を呼び、その日はものすごく長い間説教をされた。

このような、容姿が原因の縛りもあった。

4歳という年齢でさらわれそうになるというのは、相手が少女嗜好でなおかつ、自分が魅力的ではなければ起こらなかったといえよう。そのようなことがあったということも含め、この事件の数ヵ月後刻季が誕生し、漑桜は幼年部に行く以外は家に入り浸って、刻季と遊ぶことばかりになった。

そうなるとお転婆だった頃と比べてずいぶんと女の子らしく遊ぶようになった。

女中達からしてみれば、本当に刻季さまさまであることだろう。

年も経つにつれて、徐々に美しさが精練されていき、高校生になった時には『稀代の美少女』と周りから褒め称えられた。

もちろん、異性からの人気というもの、それはもうすさまじく、彼女を一目見るために最大九州から飛んできたという人もいて、時には魔術を行使しなければ、校門から抜け出ることも出来なかったというほどの人気ぶりだった。

いやはや美人に人が集まるといえるのは本当のことだったのだ。

それに漑桜は同姓からも人望厚く、友人も大勢いた――まさに学園の、ひいては日本のアイドルのような存在だったのだ。

……が、

彼女の軸がぶれる唯一にして最大の存在があった。

濔桜曰く、唯一無二、最大の存在でもあり最高の恋人でもある、このことであるが、それはもちろん

『トー君』

のことだろう。

彼女の4歳までの人生は刻季の誕生により、あつという間に塗り替えられた。

それまで、大切だったモノという個人的なランキングは上位に家族・家など、一般的な幼稚園生並みのランクだったが、刻季が産まれた途端に彼女のランキングのトップ20ほどまでは刻季の全てで埋まることになった。

刻季の全てとは顔に髪の毛、泣き声などである。

そのランキングは刻季が成長するにつれて、徐々に範囲を広げていった。

当初トップ20までだったものが、現在では全て刻季で埋まっているのではないかと濔桜ですら錯覚している。

もしかしたら錯覚ではないのかもしれないのが怖いところではあるが……

だからといって彼女は刻季だけを大切にしていたのではない。

家族、家、友人、伝統、その他もろもろあるが、それらも大切にしていた。

……刻季の次に

家族は勿論のこと、濔桜の友人も、彼女のブラコンっぷりを知って

いる。

それゆえに澪桜は友人が多いと言えなくもない。

なぜならば、この青春に多感な時期、男女関係でいろいろな問題があるだろう。

惚れた腫れたなどで友人関係に亀裂が入ることも多い時期だ。

モテる女は同姓から嫌われる。

それが世の常である

もちろん、羽間澪桜もモテる女である。

なにしろ高校のほとんどの男性が彼女に一度は惚れてしまうのだ。

だが、そんな男にまるで恋愛感情など湧きもしない澪桜は何度もの告白を全て断つて^{けちらして}いた。

そうしてついた渾名が『難攻不落の城』^{ブラコン}

最初はやはり疎んでいた者もいたのだが、彼女の性格とブラコン話の面白さが人を惹きつけ、知らない内に女生徒からもかなり人気が出ていた。

そうなる渾名もかなりの面白みが出てきて、ルビなんかはそのブラコン話を聞いた男子生徒がつけたといわれるほどだった。

それでも恐れ知らずの者がその後も何人も撃沈していった砦なのだ。

そんな姉は刻季の自慢でもあった。

学校も中等部までは、彼女の通った学校を追うように通っていた。

初等部では2年間だったが一緒に通うことができたし、中等部でも澪桜の噂は、卒業後にも関わらず聞くことが出来た。

高等部は違った、というか今現在刻季が通っている空明ヶ崎学園ではないので現状違うのだが、中等の頃に遊びに行った高校では、男子生徒からの嫉妬に狂った視線は少々怖かったが、女生徒から暖か

く受け入れられたのは、やはり滯桜の人望が為すモノだとわかった
ので、それも嬉しかった。

男子生徒の嫉妬の視線も馴れてくると、ただ羨ましいということが
わかったので、そんなところまで愛されている姉が誇らしかった。

そして刻季は滯桜の友人達から、滯桜以外誰も呼ばない呼び方で呼
ばれた。

——『トー君』と……

そう刻季が呼ばれると滯桜はいちいち顔を赤くして怒っていたが、
そんな様子も刻季にとっては微笑ましい姉の1ページだった。

『ねえ……トー君？ お姉ちゃんは早くしないと待てなくなっちゃ
うよ？』

その刻季は現在19歳の自慢の姉と通話中ではない一方通話中であ
る。

聡明ではあっても語彙力の少なかった幼年時に比べ、成長しきって
いる現在は、度を超えた扱いづらさの姉であった。

ちなみに刻季の携帯電話には通話開始からの時間が出てくるのだが、
今見てみるとちょうど8…00を表していて、沈黙の時間を抜いて
もざっと5分はノン・ストップで話し続けていたと考えてもらえば
まず間違いはないだろう。

その彼女は刻季の話を一切聞かずに——知らない内に妄想でもした
のか——何故か何時の間にかプロポーズを要求している。

もちろん刻季としては、15歳にして人生の墓場に行くつもりもな
ければ、姉弟で結婚などという禁忌中の禁忌に触れることを望んで

もないのでどう返事をしているモノかわからなくなり、黙っていた。

『ねえ、お姉ちゃんに電話したのは、トー君でしょ！？　なんでプロポーズ直前でそうやって待たせるの？　……はっ！　もしかして、これが噂に聞く焦らしプレイなのね！　そうならそうと早く言いなさいよ！　もうお姉ちゃん騙されちゃったよ。……でも大丈夫、お姉ちゃんならどんなプレイも対応可能だし、慣れればきっと身体に馴染むから！』

「……………」

『……焦らして焦らして焦らしたその先に、トー君との幸せな日々が待っていることがわかれば、お姉ちゃんいつまでも待てるからね。……大丈夫、大丈夫』

「……………」

『……大丈夫、大丈夫……』

「……………」

『……大丈夫、……グスッ……、大丈夫』

「……………」

『……グシュッ、大丈夫、……だ、大丈夫……』

「……………？」

『……だいじょうびゆ、……、だ、だ』

「……………!？」

……………

『全然大丈夫じゃ、っなーい!!!』

突然大声を出す澪桜。

『ごめーん、お姉ちゃん耐えられないよ! せっかくトー君からの14日と21時間9分ぶりの電話なのに、話せないなんて寂しすぎるよ! トー君はお姉ちゃんの為を思って焦らしプレイをしてくれたのかもしれないけど、お姉ちゃん、焦らしプレイだけはダメみたい。直接会っている時なら分らないけど、電話でまで焦らしプレイなんてトー君の事何もわからないじゃん! なんかわたしが一人で喋っているみたいになっちゃったよ!』

喋っているみたい、ではなく、完全に刻季をおいて一人で喋っていたではないか。

だが実際、刻季は置いてけぼりにされた意趣返しというわけではないが、最後のほうはわざと黙っていた。(もちろん、焦らしプレイなんかではない)

まさか、泣き出しそうになるとまでは思わなかったが

「ごめん、姉さん。なんか姉さんがいつも以上に突っ走ってるからさ……」

『トー君! やつとだ。……そうかな? 別にいつも通りだったけどお?』

この台詞から姉のいつものがわかるのが怖い。

『もしかしたらトー君のこと好きすぎて、ちよっぴりやりすぎちゃったかも』

完璧にちよっぴりではないのは確かだ。

だが刻季も15年間の人生で慣れたもので、

「ははは、全く姉さんはおっちょこちよいだなあ」と笑いながら返している。

この姉弟なんなのだろう。

『それで、プロポーズはまだなの？　いくら婚約確定とはいえ、言葉にしてくれた方がお姉ちゃんとしては安心できるなあ』

「なに言ってるのさ姉さん。姉弟は結婚なんて出来ないよ」

『トー君こそ何言ってるの？　姉弟というのは結婚して然るべしって格言もあるくらいだよ』

そんな言葉は断じて無いと言える。

「……？（そんな格言聞いたことないけど……。まあいいか）　そっか、それで話なんだけど」

姉の戯言はスルーして本題に入った。

『（そっかってことはOKだね）うん、なにかな？』

これからが大変だぞ！刻季

第16話 THE 姉（後書き）

今回はファンタジー要素皆無ですが、姉を掘り下げないと話が進められないことも多々あったので、書きました。

いずれ、萌葱との話や仁吾との話も書きたいです。

書いてて楽しいんですが読むと怖いです（笑）

ちなみに濔桜はまだ未だ女ではありません（笑）

第17話 強制プロポーズ（前書き）

今回は一言だけ、

すいません（笑）

ではどうぞ。

第17話 強制プロポーズ

話し始めて状況の変化をうまく出来たのではないかという刻季の思いは明後日の方へ飛んでいき、刻季自慢の麗しい姉の求めるところは先程から寸分の狂いなく、そこにあった。

ドキドキとしながら滯桜は刻季の言葉を待つ。

「あのさ、姉さん。もし、ね！ もし、僕が魔術結社に入るとしたら、どうする？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

『……………へ？』

「だから……、もし、僕が魔術系の組織に入るとしたら姉さんならどうする……？」

刻季は『もし』という言葉で、会話の緩和剤として使おうという試みなのだが、姉の求める会話自体刻季とは、開始地点から違っている、滯桜としては何を言っているかすら理解できない。

『……………』

「姉さん？ どうしたの……？」

『……………』

「おーい、姉さーんっ」

途端に返事が無くなって不安になり、何度も呼びかけてみるが返事がない。

それから刻季の何回か、ねえさーん、と健気に呼ぶ声に一向に返事がある気配がない。

刻季も不思議に思い、携帯電話を見て、通話を確認するが、ちゃんと姉との通話は繋がっているということは表示されていた。

今まで電話を姉からは一度も切られたことが無いので、見たのも一応の確認という意味であつたのだが、先程の一方的な会話からわかる通り、無言電話を楽しむ変態的な趣味もない。

むしろ、刻季との電話の刻季は積極的に、積極的すぎに、刻季に話しかけてくる。

その姉が無言になるとは、相当の事が起こつたことを意味しており、刻季は姉の電話先になにか、あらぬことがあつたのかと不安になつた。

「姉さん……っ。姉さんだいじょ……」

『トー君！　そこに座りなさい！』

「……………へ？」

今度は刻季が言葉を失う番だつた。

「いや、あの、座っているけど……」

『正座っ！』

「……………えと、なんで？」

『いいからっ！』

まさか電話で正座させられると思っていなかった刻季だったが、このままでは姉は許さないだろうから、口だけは乗っておくことにした。

「……………正座したよ」

『ちゃんとしなさい！』

何故わかるのだろう。

それはわからないが、姉には正座してないとわかるらしい。

これ以上は面倒なのでここで話を止めるわけにはいかずに、とりあえず正座をした。

「……しました」

『それじゃ、トー君！ どうしてなのかな！？』

「……………？ 何の話かな？」

『わたしがなんで怒っているかわかる！？』

もちろん、わかるわけがない。

刻季としては話を始めようと思ったなら、何故か怒っていたからだ。

「……すいません、皆目見当がつきません……」

『トー君っ！』

「はいっ！」

憤慨したように怒鳴る滯桜。

その迫力にビビり、正座しながら竦み上がる刻季。

『お姉ちゃんね、トー君の事をこの世で一番に想っているよ。もちろんそれはトー君も同じだと思う。でもね、想っているからって……、恋人だからって許されることと許されないことがあることはトー君もわかるよね？』

突然優しい声音で諭すように言う滯桜。

「いや別に恋人じゃ……」

『お姉ちゃんが話している時は黙って聞く！』

「はいっ」

刻季は電話に向かってペコペコ謝っている。

とてもシュールな光景だ。

『トー君がそうやって焦らしプレイを楽しむのも、お姉ちゃんにと

って寂しいけど、付き合うのも吝かじゃないよ。でも伝えるべき大事なことは、そうやって遊びながらじゃダメでしょ？ ……お姉ちゃんの言いたいことはわかったね？』

「なんとなく……」

言っていることはわかるが、彼女が何を伝えたいのかがさっぱりわからないという状態だ。

『ホントはお姉ちゃん、電話なんてロマンチックじゃない状況も嫌なんだけど、トー君にはトー君なりの伝え方があるだろうから………。じゃあトー君、姿勢を戻していいよ』

「う、うん。わかった」

正座なんて慣れないことをして、足がしびれかかっていた時だったので、助かった。

これ実は、姉が少しだけ罰を与えようと、しびれそうで、しびれない、少しだけしびれるように時間を計算してやっていた。

怖い姉だ。刻季はそれも気づかないが……

『はい、じゃあトー君。お話を始めてください』

いつも通り優しい姉に戻り、話を促された為、刻季は安心して姉の勧誘をすすめようとし始めた。（2度目）

「姉さん、怒らないで聞いてね」

『まさか。今は嬉し号泣しちゃう状況になるところだけど、怒るなんて滅相もない』

先程の怒りはなんだったのか。それと嬉し号泣とは随分と器用なことだ。

「じゃあ……言うね」

『うん！』

姉の声が上ずっている。

何か楽しみなことでもあるのだろうか、といつもなら微笑ましくな

るところだが、これから話すことで状況が一変するかもしれないので、油断は出来ない。

この2人勘違いの連続である。

状況を確認すると、一方は姉を結社に勧誘しようとドキドキしていて、もう一方はプロポーズされるところだと思いきドキドキしている。

同じドキドキなのに、まるで感情の違う動悸だ。

刻季は決心して言った。

「あのね、姉さん。実は僕、今度新結社を結成するんだけど、その組織に姉さんも誘いたいんだ！」

『こちらこそお願いします』

「……えっ？」

『……えっ！？』

なんか軽く言質がとれちゃった。

「ほんと！？　ほんとなんだね、姉さん！」

刻季はそれはそれはもう、欲しがっていたおもちゃを買ってもらった子供のように喜びを体で表していた。

それに慌てたのは澪桜だ。

『ちょ、ちょっと待ってトー君！　なに、その結社って！？』

「結社は結社だよ。魔術結社。さっきも話したでしょ？　もしかしたら少しだけ姉さんが苦手な人がいるかもしれないけど……」
もちろん、澪桜は刻季の話なんて怒っていたので聞いていない。

『ごめん、トー君が何言ってるかわからないよ、お姉ちゃん。トー君語の解説特一級免許の資格取得しているのに……』

「もおゝ話聞いてなかったの？」

『だってプロポーズじゃ……』

「つべこべ言わない！」

『はいっ！』

刻季の怒る声は姉にそっくりだった。

声が女みたいなのだ。顔もそれなりに……そして髪も長い。

「姉さん正座しなさい」

『……えっ？』

先程のやりとりを繰り返している。

『でもお姉ちゃんお仕事中……』

「はやく！」

『はいっ！』

実はこの2人そっくりではないのか？

漣桜が正座をすると、同僚から変な眼で見られることになった。

「それで漣桜姉^{みおねえ}。なんで僕の話聞かないでOKなんてしたのかな？
僕がそれで嬉しいと思う？」

『思わないけど……』

「じゃあなんで？ いい、漣桜姉？ 世の中には悪い人がいっぱいいるんだよ。それなのに二つ返事でOKなんてしちゃったら何されるかわかんないよ」

『プロポーズのはずが……』

漣桜の悲痛の想いが声に出る。

それを耳聴く聞いていた刻季は憤慨した。

「お姉ちゃん！ プロポーズなんて尚更ダメだよ！ そんな軽々しく返事するもんじゃないし、僕お姉ちゃんには結婚してほしくない！」

かなり素がでて、呼び方が変わり、シスコン全開の台詞を吐いている。

それに勘違いする奴がまたいた。

『えっ……トー君は結婚してほしくないの……?』

「いやに決まっているよ!」

『な、なんで!? トー君はお姉ちゃんの事嫌いな!?』

「僕は好きだけど、それは関係ないでしょ!」

『関係ないってなんで!? 愛情と結婚は別なの!?』

「愛情と結婚の話は今してないでしょ!」

『そ、そんな……、トー君、わたしのこと散々弄んだ挙句捨てるんだ!?』

「なにいつてんの、澪桜姉! お姉ちゃんこそ、僕の誘いを軽々しく請けて、喜んだところで捨てるんでしょ!」

『誘って、結婚する気もないのにそうやって望みを繋がないでよ!』

「澪桜姉こそ嫌なら最初から断ってよ!」

こじれにこじれている。

勘違いが勘違いを生み、そこから勘違いが発生している悪循環だ。

『うわーん、トー君のばかー! もう大嫌ーい! ……………うそ、

大好きー! わーん』

正座しながらボロ泣きしている澪桜は、さっきの刻季よりもよっぽどシュールだった。

同僚の眼が……もうこれは言うまでもないか。

『小さい時から何度も『結婚しようね』って言ってくれたのに、わーん』

もう号泣の域だった。もちろん嬉し号泣ではないがこの姉は昔から他の男との会話は最低限にすませ、それも『このゴ

ミ虫が』とか思いながら話していたため動揺など皆無だったが、刻季との喧嘩ではよく泣いていた。

姉が泣き始めてようやく我に返った刻季は慌てた。

「ね、姉さんっ。ごめんね」

喧嘩すると折れていたのはいつも刻季だった。

姉の涙に弱いと言ったら、少し危ないが、それに近いものがあつた。

『やだー、トー君なんて許さないもん。わーん』

もう周りの眼など何も気にしないで泣いている。

刻季は泣きやんでもらうために譲歩をした。

攻守が二転三転している。

「じゃあどうしたら許してくれる？」

『ホントに許してほしい？』

「うん、もちろん！」

『じゃあ、『愛しているよ、湊桜。結婚してくれ』っていつも以上に渋い声で言うって』

とんでもない羞恥プレイを強要してきた。

『あと『具体的には18歳の僕の誕生日に』って……それも渋い声で』

姉には刻季の声は渋い声に聞こえているらしい。

「それやったら、許してくれる？」

声を振り絞り刻季。

『お姉ちゃんも鬼じゃないから、許してあげるけど、言わないと許さない』

刻季は、姉はもう許しているけど、引くに引けないから、刻季にやらせることで許すという名目がほしいのだろう、と思って冗談交じ

りでやろうと決めた。
そうしないと話が全く進まない。

漣桜は未だに正座をしながら、刻季の言葉をドキドキと待っていた。

「あ、愛しているよ、漣桜姉『漣桜』……うつ。あ、愛しているよ、漣桜。結婚してくれ『具体的には18歳の僕の誕生日の時に』……具体的には、僕の18歳の誕生日に」
後半は完璧言わせられている刻季。

しかしこれは危ない契約をしてしまっただろう。

結婚を”人生の墓場”というのなら刻季の死亡までのカウントダウンは残り約3年といったところだろう。
ホントに死ななければいいのだが、あの、『漣桜姉』なら殺しかねないのが……

『こちらこそ、お願いします。これから婚約者として姉さん女房として頑張りますので……あなた……ポッ』

「うん、よろしくね。お姉ちゃん」

あーあ、やっちゃった。

『それで、トー君。お話って何なんですか？』

結果はどうであれ、話は進むことになったのでオーライとは言えないが、犠牲フライといったところだろうか。

「うん、それでね。今度大きな魔術結社を作ろうと思っているんだけど、姉さんも入ってくれないかなって」

『トー君そんな積極的に活動する子だったっけ？』

「いや、僕は、何故か頭首させられるけど、結成にはそんな関わっていないんだ」

『じゃあなんでなの？』

「頼まれちゃってね。あと姉さんの為にも」

ここで華音の名前を出さなかったのは僥倖といえるのか、後に面倒事を回しただけなのか

『わたしのために……？』

「うん」

実際は姉の為に『羽間』の家格を高めるためなのだが、そんな差異は無いと思っている刻季。

着実に姉を堕としていつている。天然だろうか。

『じゃあ、わたしも参加します』

「ホント!？」

『夫だけに、危ない目にあわせるわけにいかないもん。それに、それならトー君とも一緒にいられること多くなるし』

「ありがとう、お姉ちゃん」

もう結婚とか夫とかの単語に反応しては負けだと思った。

刻季は久しぶりに何かに成功する様な感覚を感じた。

ここ最近は華音に巻き込まれ、音弥に巻き込まれてと受動的に、流れるようにこなしていたが、ようやく自分から関わったからだろうか、関わろうとしたからだろうか。

『でも、お姉ちゃんも仕事があるし、結婚費用をためなければお父さんとお母さんに反対されちゃうかもしれないから、何時も一緒にいることは出来ないけど、出来るだけトー君の為に頑張りたいな』
「ホントに助かるよ、姉さん。でも入る前に少し嫌なことがあってもなんとか我慢してくれるかな？」

『トー君と一緒に居られることを考えたら、そんなの全然だよ！
入学式からお姉ちゃんの電話を無視してくれたことに比べれば楽勝

だよ!』

「別に無視したくて無視したんじゃないけど……。それじゃよろしくね、姉さん」

親に刻季離れを強要させられている澪桜だが、難しいと考え、澪桜からの刻季への電話は出ないように言われたのだ。しかしそれもこれから無駄になるだろう。

同じ結社なんて親は許してくれるだろうか。

実際兄弟姉妹、親子で同じ結社に入することは、そこまで珍しくない。というか当然の事でもある。

昔から魔術師は血に頼る面もあるからだ。

宗教徒という強大な相手を敵としていたので、血族が集まり、戦ったのはそこまで古い事ではない。

その風習が残っているため、今でも魔術師は見えない信頼より、目に見える血しんらいを選ぶことが多い。

もちろん、兄弟で裏切りがあったという話はあるし、本家と分家が争い権利の移行があったという話もある。

それでも他人より信用しやすい為、それに元々魔術師は数が少なかったこともあり、血に頼らなければいけなかった。

そういった理由により魔術結社には血族が集まる。集める。

音弥・華音兄妹しかり、澪桜・刻季姉弟しかりだ。

きっと刻季が姉を求めたのは、刻季の中にも魔術師の血が流れているからなんだろう。

『羽間』という濃い血が……

思考がまた”負”の方へ向かっていたので首をブルブルふり断ち切った。

「それじゃ、また連絡するね」

『うん、明日ね。それじゃお姉ちゃん正座から戻っていいかな?』

「まだ正座だったの!？」

『だってトー君の命令だったし、なんか命令してる時のトー君かっこよかったし……』

刻季は想像した。

今工作中だと言った濡桜なのに、電話先にとめどもなくしゃべったり、焦らしプレイを耐えたり（耐えられなかったが……、それと刻季は焦らしプレイだと認めてはいないが）、プロポーズしろと泣いたり、そしてまた仲直りしてイチヤイチヤして……。

これクビにならねえか？

……と

というか痴話げんかをしていたバカカップルにしか見えなかったが

『それじゃお姉ちゃんは、正座からなおって仕事を始めるね!』

「う、うん」

『バイバイ! トー君。またね』

「うん、またね。姉さん」

.....

なかなか電話が切れない。

どうしたのだろうか? と思ったらまだ姉から切っていなかった。

「姉さん、切ってよ」

刻季のその声にデレデレした声で

『えー、トー君から切ってよ』

「姉さんから切ってよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

またイチャイチャしやがって……

相手は姉だが、

『もうトー君ったら甘えんぼさんなんだから。でもそんなトー君も可愛い！』

「照れるからやめてよ、姉さん」

『照れちゃったの？ トー君照れちゃったの？ もー、かーわーいーいー』

「もう！ 恥ずかしいから切るね！」

『あつ、ちよつとまってトー君。最後にまた『愛してるよ、濤桜』って言うって』

気にいったみたいだ。

それを刻季はお遊びととって、姉は本気ととっているという大きな違いがある。

「最後だよっ」

『うん、うん！』

刻季は顔を真っ赤にしながら

「愛しているよ、濤桜」

言い切った。

『キヤー！ トー君。わたしもトー君の事愛しているよ！』

刻季は恥ずかしくて死にそうだったので

「もう切るよ、漣桜姉！ ばいばい」

『ばいばい、トー君。愛してるよ』

ブチッ……プープー

随分時間のかかった勧誘。

知らない内に姉にプロポーズするはめになったが、勧誘は大成功と
いったところだろう。

……脱力して、刻季は仁吾の部屋に向かった。

ちなみに漣桜はこのあと、恍惚とした表情を浮かべて仕事にならなかった。

第17話 強制プロポーズ（後書き）

姉とのラブコメじゃねえか！
とお思いでしょう。

私も思いました（笑）

次は少し仁吾とお話しようと思います。

第18話 国家サイド（前書き）

なんか最近めちゃくちゃアクセス数が増えてます。

本来なら喜ぶところなんですが、駄文だと理解している私には少々怖いところです（笑）

今回はいつもよりシリアスなところもあります。

第18話 国家サイド

仁吾の部屋は相変わらず男臭い匂いが全開だった。

この匂いの発信源は間違いなく仁吾だろう。

仁吾が刻季の部屋に遊びに来て、時間が経って帰ると、同じ匂いがしていることが多々ある。

この男臭さ、個人的には嫌う人もいるだろうが、刻季は羨ましいのだ。

常々思う、自分には男らしさが無いんだと

だから自分の呼び方を『俺』に変えてみたこともあったのだが、慣れない上に、それを聞いていた萌葱に爆笑されるという顛末を招いた。

だが萌葱の気持ちもわかる。

確かその時は中部2年生の頃だったのだが、14歳の今日まで『僕』と呼んでいるのに、突然不器用にも程があるくらいの勢いで『お、お、俺は……』なんて聞いたら笑ってしまうのも当然だろう。

その日から、似合わない事と、無理なことはやらないことを心の中で誓った。

と、まあ、刻季が憧れる男臭の仁吾の部屋。

あれからすぐに自室の隣の部屋である、仁吾の部屋に向かった。話したいこともあったし、聞きたいこともあったのだ。

その仁吾はいつも通り刻季を迎えてくれた。

中等の1年から仁吾には公私ともに世話になっていた。きっとこれからも世話になることだろう。

こちらからお世話することも多いが

とりあえず聞きたいことがあったので、ベッドに腰をおろして、刻季は訊いた。

聞きたいこととはクラスのその後と竜也のその後である。

「えーと、僕たち……主に僕だけど、華音に連れられていなくなつたよね。あのあとどうなってた？」

「どうって、何がだ？」

刻季のどこか伝わりにくい言葉に首を傾げる仁吾。

刻季も聞きたがってはいるのだが、決定的な答えを聞きたくないから、どこか言葉を濁しがちになっている。

でもどうせ避けては通れない道なので、決心した。

「華音から連れていかれて、クラスの状況は？ 竜也の状況は？」

仁吾が悪いわけではないが問い詰めるような形になってしまった。

それに仁吾は

「あゝ」

とにやけながら返した。

刻季が困っていることに気がついたのだ。

そして意地悪そうな顔をしながらこう言うのだ。

「明日行けばわかるだろ」

「えー！！ なにそれ、一番怖い答えだよ！」

「聞いたからって何が変わるわけじゃないだろ」

「僕の心構えが変わるよ！」

「んなもん、気合いで何とかしろ」

と相変わらずにやけながら言う仁吾。

「気合いなんかで何とかなるわけじゃないじゃん！」

「俺なら何とかする」

「気合いの絶対値が違う！」

不遜な態度で仁吾が言う、『超気合い説』を一蹴するように刻季は
つつこんだ。

ちなみに『超気合い説』というのは、なんてことはない、ただ物事は
気合いで何とかなるという仁吾の持論である。

見た目で判断する気はないが、刻季と仁吾とでは役者が違う。

片や、痩せ形の長髪女顔

片や、気合いというものを体現したような漢おとしの中の漢。

と結局見た目で判断しているところもあるが、中身もそうだ。

片や、流されやすい薄弱なところが多い男

片や、決めたことはやりきる男

ほぼ対面にいる者たち、どちらに気合い成分が多く含まれているかは
明白だ。

だから刻季に、仁吾と同じ生き方は出来ない。

もちろん仁吾も刻季と同じ生き方など出来ないが、もともと仁吾は
それを望んでいない。

気合いでなんとかするという仁吾が羨ましく感じるが、刻季は望ん
でも叶わないものより、望めば少し叶う方を選んだ、つまり、クラ
スの状況を聞くことだ。

「少しでもいいから教えてよ」

「うーん、まあ良いけど、たぶん刻季も気づいているだろ？」

「予想はしている」

悪い方にだ。

「クラスは刻季の噂でもちきり、たぶん他クラスもだが……、まあそれはいいや。竜也は……………ハハッ」

「笑って誤魔化さないでよ！」
随分不吉な笑い声に聞こえる。

仁吾は刻季の憤慨に、悪い悪い、と何も悪くなさそうに謝って、続けた。

「まあ刻季の思うとおりだと思うぞ。要するに嫉妬に狂ってた」
「やっぱり……？」

「具体的に言えば、『殺す殺す……』とぶつぶつ言い続けてた。それに阪野はその声が聞こえるたびに怯えてた」

「怖い！」

なんだその呪いの言葉は

「ちなみに俺も結構引くモノがあった。というかどん引きだった」

「誰でもそうなるよ！　なにそれ、僕殺されるの？」

「覚悟はしておいた方がいいかもな」

「やだよ！　死ぬ覚悟じゃなくて、殺される覚悟なんて！」

「そう俺に言っても仕方ないだろ」

「そうだけど……」

興奮して結構声を張っていた。

落ち着くために深呼吸を繰り返す。

「明日は気をつけた方がいいな。特に夜道とかは対処のしようがないからな」

「冷静に分析してないでよ！」

結局落ち着けない。

仁吾も面白い遊びを見つけたような様子で、意地悪そうな笑みを崩さないというのも一つの理由だ。

「どちらにせよ、明日になればわかるさ」

「確かにそうなんだけどさあ……、確かにそうなんだけど、そうは割り切れないでしょ」

「果たして刻季は無事に明後日を迎えられるのか」

「モノローグやめて!」

不謹慎な事を呟く仁吾。

「他人事だと思って……」

恨めしく仁吾を睨みつける刻季に、仁吾は豪快に笑った。

「んで、他にもなんかあるのか？」

一通り刻季を虐めてから満足したのか、話を切り替えた。

刻季も怒り疲れたのか、一つ大きく嘆息してから、話を切り出した。

「うん、ていうか、まあ、これからが、本題かな」

「だろうな」

仁吾も予想していたようで、刻季の話を待った。

「今日の事なんだけど……、あの後、仁吾も知ってる通り、華音の家に行ったんだ」

「ああ、それか」

仁吾は適当な合いの手を打つ。

「それが、どうしたんだ？」

「そこで、華音のお父さんとお兄さんに会ったんだけど、お父さんは予想通り」

「会長の事は反対だったのか？」

「うん」

刻季が頷くと、まあそうか、と仁吾は当然のことのように、理解した。

というか元々反対されていると聞いてから訪れたから、それは当然である。

仁吾に、それで？と促されると刻季は続けた。

「なんやかんやの内に、お兄さんと決闘する羽目になって……」

「またか！？ お前もホントにここ最近大変だな」

「大変なのは、仁吾と会ってからそうだから、慣れているんじゃないや慣れているけど」

「おいおい、そりゃねえよ」

と仁吾はいうが、実際仁吾と会う前は、萌葱もとても純粹で良い子だったのが、規律に厳しくなった。

別に純粹と規律正しいというのは相反しないが、萌葱は昔から、真面目であったが、刻季の事も真面目と思っていたので、そこでつかかることもなかった。

しかし仁吾と出会ってから、萌葱は変わった。

というより、萌葱の刻季に対する、認識が変わった。

認識が変わり、態度が変わった。

態度が変わり、性格が変わった。

このような順序で、萌葱は厳しくなった。

それはもちろん、仁吾に対してもあるのだが、大抵は刻季に対してが多い。

そうなるのは、きっと刻季に戻ってほしいと思っているからなのだろう。

過去を知っているから戻ってほしい。

子供の純粹さを取り戻すことは、過去に戻っているが、退化とは言

わないだろう。

むしろ成長という。

それが刻季にも分かっているため、刻季も萌葱に悪感情は抱かないし、むしろ自分が10割悪いと思っている。

仁吾に巻き込まれての形がほとんどだが、言い訳はしない。小言は言うが

仁吾の純粹さは、退化でも成長でも無く、子供のままというだけだろう。

高等1年で未だに、悪戯をして怒られる2人。
成長していない2人。

むしろ知恵がついた分悪くなっている。

純粹さが悪だと、よくいうがこういうことなのだろうか

閑話休題

仁吾の呆れた声に、余計呆れる刻季。

あれだけ色々やっておいて否定出来る材料があるのか、と

とはいえここを掘り下げても、話は進まない。

まあいいや、とため息をつき、話を進める。

「それで、決闘は勝ったんだけど、もっと困ったことがあって……」

「また刻季に仕えるとか？」

「いや、それよりも大規模、そして……」

「そして？」

ベッドに座っていた刻季は幾分か姿勢を正していった。

『仁吾に申し訳ない』

.....

そこから沈黙が続く空間。

刻季はひよっとしたら自分が時間を止めているのではないか、と錯覚した。

しかしそれは違うとすぐにその考えを取り下げた。

あの空間は異質で、美しい沈黙が隣にある。

いや、違う。違った。

異質なのは自分であって、あの空間自体は異質ではない。

それどころか、空間は刻季の知らないところで、刻季以外も知らないところでもいつも通り動いている。

つまり誰も知らないところで時間は動いているのだ。

刻季だけが異物。

能力を使っていた後は、あの美しく卑しい沈黙が横たわる後には、いつも通常だ。

ここにある沈黙は単純に、純粹に居心地が悪い。

きっと仁吾が機械だったら、動作音がずっと流れていて、静かではあるが、沈黙ではないだろう、などと嫌なことを考えてすぐに取り

下げた。

その間も仁吾は思考する機械のように、動作音なく、ひたすら考えに耽っていた。

しかし、その時間も『超気合い説』主義者の仁吾には長く続かず、あー！と大声を出し、頭を掻き毟った。

その行動に驚き、仁吾の方を見てみると、仁吾はその手をすぐに止め、そして刻季の顔を、ボサボサになった髪のまま、見て言った。

「わっかんねえ！　なんで俺に申し訳ないんだ！？」

ただ単純に疑問を出したわけだったら、あれほどの時間考えることもないだろう。

考えすぎかもしれないが、僕の為かもね、と刻季は思っていた。

きつと自分の辛そうな顔を見て、少しでも負担を減らすために、自分で思いつこうとしたのだろう、と

仁吾に対して申し訳ない話をしようとしていたのに、何故逆に心配かけているのか、わからなかったが、仁吾はそういう奴なのだ。

良くも悪くも子供のまま大きくなった、純粹な子供。

頭と体は大人だが、精神は子供。

そういう奴。

仁吾の思考は、刻季の思っている通りだった。

お人好し

仁吾はこうだから、刻季から離れるように萌葱から注意を受けないのだろう。

それも、仁吾の為でなく、刻季の為であることは、いうまでもないが、結果的に仁吾の為にもなっている。

いくら刻季と悪戯をしても、刻季からは引き離さない。

滯桜は悪戯とか関係なく、年がら年中引き離そうとしているが。

ともあれ、仁吾の言葉に驚きながらも、安心したような刻季は話した。

「実は結社に誘われて頭首になった」

「あ？ 結社？ 頭首？ 随分突然だな」

苛立ったような仁吾の声。

それも刻季の為であることはなんとなく、わかるので別段気にせずにいる。

「それで、その結社がなんで悪いんだ？ 確かに天原からの発なら警戒すべきだけどな……、だからといって、別に俺には……」

「天原発じゃない。たぶん、これは仁吾にも、近いうちに情報が入ると思うけど、天原家からじゃないんだ。むしろ天原は反対といったほうがいいかもしれない」

「……どういうことだ？」

訝しむ仁吾の顔が刻季の視界に映る。

「味方というか、構成員は師団で、敵は教徒と師団の長、それから……国家」

「――ッ！」

仁吾が息を飲む。

一言で理解したとは思えない説明だったが、驚くには足る説明だったようだ。

「……師団ってことは、あれか？ 師団家出身ってことか？」

「というか、師団の跡継ぎって感じかな」

刻季の言葉にまた息を飲む。

それもそうだ。

将来魔術師の先頭に立つような存在の結社なのだ。

時間が経てば、師団よりも力をもつことは必至である。

というより、時間が経てば、師団ととってかわる組織だ。

それが、師団を敵とし、教徒を敵とし、そして国家すらも、敵とする。

そんな話を聞かせれば驚くのも無理はない。

仁吾の家は完全に国家側サイドの魔術一家だ。

ここで碓氷家うすいの紹介、というか説明が必要となるだろう。

碓氷家は過去から続く魔術師の名家である。

しかし、師団や旅団、それに準じる組織に属しているわけではない。家柄的には申し分ないのだが、属する側が違う。

碓氷は魔術師として、宗教徒と戦うのではなく、魔術師として、国家に仕えた。

約50年前まで続いた、魔術師と宗教徒の戦争の影にはいつも、国家というものがあつた。

表向き、国は国家が治めていた。

しかしその国家ですら抑えられない連中がいた。

それが魔術師と宗教徒だ。

双方ともに、これも表向きだが、国家に従っていた。

しかし裏では、国家の代表者を暗殺し、自分たちの有利な者を代わりに据え置いたり、などと、国家からすれば、悪行が目立った。

それゆえに国家も一つの抑圧策で、防護策をとった。それが取りいれである。

魔術師や宗教徒を国家に取り入れ、双方の好き勝手にはさせないようになされた。

その内の国家側の魔術師の代表が、要するに碓氷家だったというわけだった。

碓氷家は国家の取り入れ策により、一番早く国家に見初められ、そして、今後の国家側の取り入れられた魔術師の中でも一番大きな規模の家だった。

過去の資料にこんな話もあるくらいだった。

師団を作る時期がもう少し早ければ、あれほど有望な人材（碓氷家）を逃すことはなかったのにと

碓氷は師団の結成にも一役買っている。

碓氷が魔術師から抜け出したことでした穴埋めが結社だったのだ。

それもこれまでにない規模の結社の結成が求められた。

これにより師団が結成した。

碓氷がやめたことにより、師団が誕生した。

それは魔術師にとって幸福なことであり、国家・宗教徒からすれば、不幸なことではなかった。

しかし碓氷は現在も魔術師からはそれほど嫌われた存在ではない。むしろ、割と友好的に扱われているところがあるのは、師団の結成とも関係しているのだろう。

それから、約50年前、国家に完璧に服属することが決定した時、魔術師に対する条約の緩和というのも、碓氷が懇願したためになったということもある。

過去から現在に至るまで、碓氷は国家に属している。
もちろん仁吾も現在碓氷として国家側に位置する立場の存在だ。

ここまで話せば刻季の申し訳なさの気持ちもわかるだろう。

刻季は明らかに、国家が敵だと宣言した。
国家に属する人間に対して

それは友人であっても、どれだけ仲が良くても覆せない事だった。

仁吾に黙っていることはできなかった。

罪悪感というのもあったが、それ以上に裏切り続けることが出来なかったのだ。

黙っていたれば、少しだけ新結社に対して有利に動いたかもしれない。
しかし、いずれは知られることだし、何よりそれはしたくなかった。
仁吾は友人だから、大事にしたい。

それに仁吾は純粹だから知った時の悩み方は尋常でないだろう。

今ですら、刻季の目の前で悩んでいるのだ。

自分の知らないところでこうなっていたとは考えるのもつらくなる。

その仁吾は苦渋を浮かべながらこう言った。

「つまり、国家の敵となるのか？」

この一言を出すのにどれだけ苦しんだか刻季にもわかった。

もう結社の目的もほとんどわかっているのだろう。

だから、刻季は出来るだけ、出来る限り、目の前の友人に向けて真摯に届くように、頷いた。

もう一度、仁吾の目の前で敵だと伝えた。

そこで仁吾は少し吹っ切れたように、そうか、とだけ告げた。
また刻季が頷く。
そして仁吾も頷く。

仁吾は頷いたまま少し俯いて動かなくなった。

それでも口は動くようで

「わかった」

といった。

「ごめん」

「謝るな。別に悪いわけじゃない」

「ごめん」

俯いている仁吾に追撃する様で心苦しかったが、謝ることしか出来なかった。

二度目の謝罪をした後仁吾は顔を上げて言った。

「あのな、碓氷としては、もちろん、もちろん大反対もいいところな
んだけどな。でもこういうのはいずれあることだったんだよ」

「……どうということ？」

疑問に駆られる。

「50年も経ってるんだ、いつまでも平穏なままでいられるとは思
っていなかった。国家に対する不満は魔術師・宗教徒、共に多いだ
ろうし、お互い今まで争い合っていたのに、突然休戦させられて、
一緒の場になきゃいけないことも増えたんだ」
当然だろ、と仁吾は言った。

「俺が悩んでいたのは、刻季お前の事なんだ。国家の敵になると確
定している組織のトップにお前がいるっていうのは……辛いことだ
よ」

そういった仁吾の目元には悲壮感が漂っている。

「でも否定も出来ない、そしてもちろん応援もできない。このどっちつかずの状態が辛い。俺はバカだからどうしていいのかわからない」

「仁吾……」

仁吾はバカなどでは無い。

ただ単純に純粋なのだ。

良くも悪くも………

「どうしたらいい？ ……俺はどうしたらいいんだ？」

つらそうな眼を見て、刻季自身も余計に辛くなる。

思えば仁吾がこんな表情を見せたのは久しぶりのことだった。

弱みを見せない漢の中の漢。

それが仁吾のポジションだ。

『超気合い説』をも可能にする、仁吾の精神。

今は見る影もなく弱っている。

そこで刻季は苦渋の決断ではあったが、もともと考えていたことを仁吾に話した。

もう見ていられなかった。

こんな仁吾を、いつも生命力あふれる仁吾が弱っている姿を

「仁吾、僕は結局『羽間』の為に国家に敵対するんだ。結局自分の為に、国家に敵対するんだ。綺麗事に聞こえるかもしれない、というか綺麗事なのかもしれないけど、僕は敵対しても裏切りたくない。……仁吾を、裏切りたくない」

ありのままの気持ちを告げる刻季。

言っていくごとに辛くなっていくが気持ちは止まらない。

「裏切りたくないけど、自分の為に敵対しなきゃならない。だから仁吾も好きにやってほしいんだ。いつもの仁吾のように、気合いでなんとかしてほしい。仁吾に対する最大の望みは結社への協力だけど、それが出来ないことなんて百も承知だよ。だから仁吾は仁吾がいいと思ったことをやってほしい。結果離れることになろうとも、裏切ることになるよりずっといいよ」

「刻季……」

仁吾の目に少しだけ生気が戻っていく。

「結局自分の為のわがままだけど、僕は出来る限り共存の道を選びたいんだ。でもそれが簡単にいくとは思わないし、なにより、他の結社のメンバーがどう出るかわからない。頭首なのにね」と痛々しい苦笑を浮かべる刻季。

それをみて徐々に仁吾に力が戻っていった。いつも刻季が辛そうにすると慰めたり、力を与えていた時の癖だろうか。

「刻季」

仁吾が刻季の話を断ち切ると、言った。

「お前の気持ちは分かった。それでお前も俺の気持ちを分かっているだろう」

刻季はどこか呆然自失としながら頷いた。

「だから、この場合の最善策をとろう」

「最善策？」

とはなんだろう、と置いていたら、すぐに説明が来た。

「俺もお前も共存の道を取りたい。そしてお前らの敵になるだろう、おれら国家もそれを望んでいる」

確かに国家は現状が一番だと思っている。

そしてようやく苦悩から脱却したような不遜な笑みを浮かべてこう言った。

「だったらそうしよう」

「……え？」

「それが、最善だろ？　今の2人にとって、『羽間』と『国家』にとっても」

「……まあ」

確かにそうなのだが簡単にいくわけではない。

結社には国家に恨みを持つ人が大半だろうし、国家もそんな連中を見逃しておくとは限らない。

「でもそんなの……」

うまくいくわけない、と続けるはずの刻季の言葉は自然と切れた。なぜなら、仁吾の顔がいつものように、いつも以上に清々しそうなところがあったのだ。

それも高低差があつてのことなのだろうか

「だからやろう。そうするために、俺は動く」

いつものように決めたことはやりきる仁吾の言葉だった。

「刻季はどうする？　……って聞いてもやらせるがな。悪戯は一人でやっても面白くないんだ」

そして大きく笑った。

さきほどの悲しみに暮れた表情など今は浮かんでこない。

その顔を見て、その笑い声を聞いて安心した刻季は言った。

「まったく、萌葱に怒られても知らないからね」

その声も痛々しさからはかけ離れたところにあった。

「そんなの……」

仁吾は溜めるようにしている。

それに続く言葉は刻季にも分かった。

「「気合いで何とかしろ」でしょ？」

やはりそうだった。

結局のところ『超気合い説』なんかする。

そしていつもなんとなくのが仁吾なのだ。

今回もそうなら、それはとても幸せなことだろう。

2人声が揃い大笑いする。

あまり笑えなかったこの2日分を溜めていたように刻季も大きく笑っている。

そこで本日 of 会談は幕を閉じた。
詳しいことは後日話すと決めて。

自室に戻ると久々に色々なことから解放されたせい、か、ほどよい疲れとなつて押し寄せてきた。

まだ、そこまで遅い時間では無いが、シャワーを浴びて、すぐに寝ようと思った。

部屋にタオルや着替えがあるので、取りに行く。

そこにはもうすでにタオルとパジャマが見えるところに置いてあった。

まるで刻季の帰りを待っていたかのように、
しかし待っていたのはタオルでもパジャマでもない。

こんな時に刻季の部屋に来るのは一人しかない。

刻季の都合を考えない、自称、刻季に仕える少女。
別名メイドや、奴隷、酷い時だと、性奴隷などもある。

要するに

——華音だ。

「お帰りなさいませ、ご主人様」
なにこのデジャヴ、と刻季が思ったかどうかは定かではないが、思
うのも無理はない。
つい昨晚見たばかりの姿勢だ。

しかし一つだけ違うところがある。
それは華音の服装が制服でなく

メイド服だったところだ。

全く問題ばかり生み出す女だった。

問題を持ってくるだけでなく、問題を生みだすことまでする。

それが

天原華音だ

第18話 国家サイド（後書き）

まったく華音は怪しからん！（笑）

今回も長くて疲れました。

しかも見直ししている暇もなかったので、だいぶ書きなぐった感じになっています。

風邪の時より、酷いんじゃないですかね……（笑）

第19話 メイドとは服に宿るものに有らず（前書き）

またタイトル意味不明だし、本文ともそんなに関係ないのですが、まあ気にしないでください。
すこし遅れてしまいました。

出来る限り早く更新できるように頑張りたいです。

第19話 メイドとは服に宿るものに有らず

刻季の事を考えない自称従者が、メイド服でそこにいた。

そう、何故かメイド服で。

無表情とメイド服の意外な映え方に驚くが、そこは気にせずとも、今後何の支障もでないので掘り下げないことにする。

というより、今はそれよりもすべきことがある。

現状出来ることは『何故いるんだ?』と聞くことである。

有無も言わず追いつく、というのもあるが、これは出来そうにならないので却下。

とりあえず、前者を選ぶことにする。

刻季はとんだ藪蛇にならないか不安になるが、ここ最近の出来事で精神力が強くなってきているので、それも回避できる気がしていた。

それほど濃い二日間だった。

求めている従者が手に入り、自分の願望の為になる地位も手に入り、人脈もそれに準じて手に入れ（あまり頼りにならないのもいるが）

そして今まで以上に友情も堅くなった。

時間にして48時間も経っていないが、体感では、その数倍以上経っている気すらする。

これまでの15年程度の人生でも、それなりに経験豊富な方だと自負している刻季だったが、その経験が霞むほど、二日間の経験が濃かった。

もちろん、そんなことは有り得ない。

有り得ないが、そう錯覚するほど色々なことがあった。

思いだして涙が出そうになる、しかしこの二日間はまだ終わっていない。

これも、刻季自身まるで求めているないが、締めイベントが残っていた。

この一連の問題の発端であり、問題の生産者とも言える生徒会長。トラフルメイカー

この少女、実のところ、優遇学園生徒会長というかなり責任あるはずの立場なのだが、刻季はその立場を悪用しているところしか見たことが無い。

毎朝恒例の生徒会集会（非公式な名称だが）では生徒からの要望を聞いて、叶えられる範囲で叶えたり、学園内の統制も生徒会長ということで、その点でもかなりの地位を持たされ、与えられる仕事を遵守しているらしいが、刻季は華音と知り合う前は、ただ『美人の生徒会長』としか思っていなかったため、そんな仕事をしているすがたを見ていない。

そして知り合ってから生徒会という立場を、華音にとっては有効的に、刻季にとっては悪行的に、使用している（されている）状態だ。

たぶん今回の事を聞いても『生徒会権限です』というだろう。

とはいえ、話を進めなければ、話は進まない。

今回の問題は何かと身構えながら華音に声を掛ける。

「……どうして、いるのかな？」

恐る恐るといった表現がぴったりくるくらい警戒している。

「嫌ですね、刻季様。聞かなくてもおわかりにならないですか？」

「ならないよ！」

そんな超能力持っていない、とも言いきれない自分が怖い刻季。

だが人の心情を読める能力など持っていない。

「私は刻季様のお気持ちがわかりますよ」

「えっ……？」

当然です、と胸の前に拳を握っている華音。

藪蛇になること間違いないが、聞いてみたい気になる刻季だった。

「聞きたいですか？」

興味津津になっていることがばれたのか、探るような目で華音が言う。

「まあ少し……聞きたいかな」

欲に負けて聞いてしまう刻季。

「それでは、少し恥ずかしいですが、刻季様のお気持ちを代弁させていただきます」

照れながら言う華音は、それでもやはり自信満々といった様子だった。

ゴクリと唾を飲む刻季。……そんな緊張するところなのだろうか？

では、と華音は喉を鳴らし、声を整えてから言った

「『華音に会いたくてたまらなかったよ』ですね」

「なんだそれ！」

思わずつつこんでしまう。

ちなみに華音の声は微妙に似ていた。

「違うのですか？」

「違うよ！ むしろ逆だよ！」

「私は刻季様に会いたいと思われたと考え、ここに來たのに……」

「随分都合の良い思考判断だねっ」

一体どんな思考能力をしているのか一度しっかり確かめてみたいところである。

「それじゃ私が、夜道を刻季様の為に暗い中、会いに来たのは無駄だったってことでしょ…？」

先程までの楽しそうな様子はなく、悲壮感漂うといった状態に華音はなっていた。

これを見ると、甘くなる刻季。

お人好しモードが自然発生的に発動してしまい、それに抗うことは出来ない。

そして結局

「いや、うそうそうそ！ 会いたかったんだ、華音に！」

「本当ですか!？」

表情が一変して輝かしくなる華音。まあ無表情だが……

刻季も将来色々苦労しそうである。

「良かったです。私も刻季様に会いたいと思っておりましたから……」

「良かったなあ、華音と同じ気持ちだったなんて」

「ふふ、以心伝心ですね」

むしろ以心乱心というようなものののだが、お人好しモードの刻季には、そんなこと言えない、そんなこと言わない。

「気持ちが悪かったついでに聞いていいかな？」

「はい、なんでしょ？」

「その服、なにかな……？」

「ああ、これですか」

メイドとは、メイド服を着ればなるものではない。

メイドとは、魂に宿るものである。

とは、刻季も思わないが、着ているのはもちろん気になる。

それも存外似合っているのだ。

どこか、華音に着せるために用意したように思えた。

刻季は答えを待っていると華音からすぐに返ってきた。

「これはメイド服というものです」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………?」

「それだけ!? 説明終わり!?」

メイド服だということは来た時から気付いている。

何故着ているのかを聞きたいのだ。

「なんでメイド服を着ているのかな?」

「それは、私が刻季様のメイドだからです」

「勘弁してくれ!」

自信満々に華音が言った。

「本当は昨日、こちらにお邪魔する時には着ていたかったのですが、家の者に頼んでも間に合いませんでした……、そして今日、衣装が出来たと聞いたので受け取った次第です」

「そんな裏事情いらないよ!」

このメイド服、1日で出来たのか、ハイクオリティーだな、と刻季は思った。

「メイドがメイド服を着て、ご主人様にご奉仕するのは当然の事だと思いますが……」

きよとん、としている華音。

それを諫めるように刻季は言う。

「まずいいかな？」

「はい、なんでしょうか？」

「僕は華音を、メイドとして雇用してなどいないし、ご奉仕されるのも少し遠慮したいところなんだけど」

「雇用だなんて、そんな軽々しい関係性ではありません！」

久しぶりに声を大にしたと思えば、諫めている刻季を、更に諫めている。

「私は雇われて、刻季様に仕えているのではなく。自ら刻季様の元に、居たいと思っている所存でございます。それを雇用だなんて、他人行儀で、薄い関係にしないでください」

声量はいつも通りに戻ったが、声色は変わっていない。

「私が他人に興味を持つことは元より少なかったもので、現在の生徒会のメンバーは金城君、南雲さんを除き、立候補をして、自発的に行うと言ってくれた方々です。金城君は同じ学年で、同じクラスで学級委員を毎年一緒にやっていたので、頼みました。そして南雲さんも師団の一家ということで繋がりもあったので頼みました。南雲さんも最初は渋っていましたが、面識もあったので何とか了解を得ることが出来ました」

「う、うん」

突然始まった話に、自分が関係しているとは思えない刻季はとりあえず相槌を打つ。

「そして一年生が一人では南雲さんも不安でしょうし、一年次入学時の検査表を見ていたら、刻季様の名前があったということです。そこから南雲さんに誘うことを提案しましたら、即了解をいただき

ました」

どうやら萌葱が刻季を入れることに反対していたというのは出鱈目だったらしい。

むしろ推薦する勢いだったようだ。

刻季は、今女子寮でのほほん、としているだろう幼馴染に向かって内心で愚痴をこぼした。

「そのあと、すぐにあなた様を呼び寄せることになり、それでも興味があるというよりは消化試合に望むような気持ちで会うことになりました。そして生徒会室であった刻季様は、お世辞にも強さが見えず、そしてその気持ちを代弁するかのごとく、すぐに魔術が使えないことを知らされました」

「うん、まあ、強くもないよ」

刻季は自分自身の力を知り過ぎというほど知っているが、強いと思うことはない。

よっぽど世界に影響を与える魔術や剣術の方が、有能で、有用出来る。

刻季は魔力を無効にできるという能力をたまたま持って生まれただけなのだ。

時間を止める能力も生活への活用法もまるでない。

魔術師などと戦う場合がなければ、使わない能力だ。

だから、刻季は自分の能力を好んでつかってはいない。

使わざるを得ない状況に陥った時、使って被害を最小限に治めるために使うのだ。

その能力をこの学園内で、仁吾・萌葱を除き最初に引きだしたメイド服の少女は、異能者の言葉に首を振った。

「あなた様は、強うございます。それは紛れもないことです」

「そうかな？」

否定するのも憚れるくらい何度も首を振るので肯定的に答えておく

刻季。

「魔術が使えない刻季様を、何故あの南雲さんが推薦するまでに至ったのか、とても気になりました。そこでたぶん始めてあなた様に興味を持ち始めたのでしょうか。今にして思えばそうだと思います」

「そうなんだ」

これも頷いておく。

「そして断られた時に、どうにか入ってもらおうと生徒会権限を使いました。何故あのようなことをしたのかは、未だにわかりません。興味を持ったとはいえ、強制的に協力させるつもりはなかったのにも関わらずに。ひょっとしたらここで離れたらダメという自己暗示にでもかかっていたのかもしれませんが」

久しぶりに笑いながら華音は言う、刻季にはあまり笑えないが。

「でしたら、その暗示はとても優秀ですね。それのおかげで、刻季様との巡り合わせが成り立ちました」

「は、ははっ……」

苦笑しか返せない刻季だったが、それでも華音は幸せそうに笑っている。

「そのあと、決闘することになり、まるで負けるつもりはありませんでした。魔術が使えない人に負けるなんて、天原としても私としてもあり得ませんでした。刻季様の余裕にも気づいてはいましたが、それ以上に慢心していました。負けるはずないと」

それも当然だろう。

優遇学園に通いながら、魔術が使えないなど、馬鹿にしているにも程がある。

「戦い始めて、天原の魔術は室内ということで効果が浅く、使いに

くかったので、使用しませんでした。しかし、そんなのはハンデとしか思っていないませんでしたし、無かったところで負けることなど考えてもいませんでした」

「しかしその余裕もすぐに崩された」
声は少し真剣味を帯びている。

「最初に強化魔術を掛けていたところは近づいたところで、魔術の痕跡ごとかき消されていて、まさか刻季様の影響で消えてしまったとは、どうしても頭が受け入れられませんでした。それが一番可能性の高い説でもです。受け入れられなかった。……それでもあなた様は笑顔で、生徒会長と対峙しているにも関わらず、構えもしなかった。それに恐怖し、そして……」

「歓喜した」

恐怖と歓喜とは対する意味ではないのだろうかと刻季は思ったが、華音はそんな矛盾に気づいていなくて、矛盾とんでもない様子でいる。

「あなた様の笑顔を見て、ここでようやくあなた様に負ける、ということがわかりました。しかしこの歓喜と恐怖を出来る限り長い間感じていたかった、出来る限り強く感じていたかった。ですから私は、魔術のリミットを外しました。悔っていたあなた様に申し訳が無くなり本気を出しました。それでも完膚なきまでに負けてしまった。攻撃をくらったこと自体、久しぶりの事でした。決闘の申し込みが少ないうえ、授業でもまずくありません。それをあなた様はいとも簡単に一撃くらわせてくださいました」
攻撃をくらったことを嬉しそうに言う華音。

「その後刻季様に仕えると決めたのは、攻撃をくらったからというわけではありません。きっと刻季様と出会ってからの一連の流れで、どこか惹かれていたのでしょう。特にあなた様のあの笑顔を見た時の歓喜をこれからも感じていたかった。恐怖を忌避しながらも感じたかった。だからです多分……刻季様に仕えようと思ったのは」

「そっか……」

何度も言うようだが刻季は認めてはいない。

しかしここまで詳細に話してきて、それを否定するほど酷いつもりではなかった。

「自分と対峙した相手は、大抵決闘中は苦痛を顔に浮かべるか、必死に戦おうとしてくださいます。それもとて素敵なことです。本気をだして戦い合うというのはどこか情けなく、それでも立派なことですから……。ですが刻季様は最後まで余裕綽々としていました。まるで負けるつもりもなく、まるで本気を出す様子もなく」

どこかうっとりとした眼で言う華音。
もう表情には何も浮かんではいなかったが、刻季はなんとなく感情が読めていた。

「その時、あなた様のことを、私は『王』とも『神』とも思いました」

それは大層、偉そうな呼び方だった。

刻季は『王』でもないし、もちろん『神』なんかではない。

王になれる器でもなければ、王になりたいと望んでもいない。

また神も然りだ。

「『王』に仕えるのは、民の義務ですし、『神』を崇めるのも、民として当然のことです。周りの方々はそこまで思っていないでしょうか、私は刻季様を『王』『神』として仕え、崇めています」
「それにしては、色々面倒なことを起こしてくれているけど」

華音と出会ってから、大変なことだらけだ。

棚ぼたで地位も手に入れたが、それ以外は大抵望んではないものだった。

生徒会もメイドもだ。

「それは、刻季様に私が仕えるということ、みんなに知らしめるためです」

「また余計な事だねっ！」

それは刻季にとって二重で困ることである。

仕えることを周りに知られることも、刻季が認めたと思われるだろう。

望んでいないのに、上の立場につかされて、まるで兄弟を押しつけて家督を継いだような気分になった。

「仕方ありません。刻季様に本気で仕えるということになれば『天原』も『羽間』も関係ありません。もちろん『生徒会長』も『一年次の生徒』も、です。だからより多くの方に知ってもらうことが大事だったのです。『これから、私は刻季様の下につく』という宣誓をしたのです」

下につくという言い方は、どこか不良のように思えた。

ある意味、華音は刻季にとって不良なのだが。

「もうしたことは戻ってこないから、これからはやめてよね」

したことは諦めて受け入れることにして、今後の火種を減らそうと試みる。

「はい、これ以上は方々ほうぼうに伝える必要がありませんので、必要以上にするつもりはありません」

「それを聞いて少し安心したよ」

ため息をつく刻季。二日間で一体どれほどのため息をついているのだろうか。

主に華音絡みなのが、嫌なところだ。

そこで華音は姿勢を先程以上に正した。

話が途切れて、華音の本題にはいるのだろうか

正座をいつまで続けているのだろうか、気になるところだが、聞けないくらい真剣な顔をしていた。

そして口を開いた。

「我が結社の頭首に就任していただきありがとうございます。兄の名代としても御礼申し上げます。これから私を手足のように扱い、結社を動かしてってください。私はあなた様の秘書としても活動します。あなた様の意向に従わない者がいたら、処罰の対象にし、刑を執行します」

いままでにはないほどの真剣な表情で告げた言葉は、圧政も良いところの発言だった。

それでは、華音すら処罰の対象なのではないのかな、と刻季も思った。

頭首だからと言ってそこまで、自分が力をふるうつもりはない。権力は『羽間』の、ひいては姉のおまけだと思っているからだ。

華音の気持ちは嬉しかったが、程度も限度もあるので言った。

「ありがとう、華音。その気持ちはすごく嬉しいし、助かることもあるんだけど、僕の意向はそこまで聞かなくていいし、むしろいき過ぎたら止めてほしいんだ」

「何を仰っているのですか、我が君。部下が主の願いや要求を叶えるのは当然ではないですか」

「たかが、頭首なんだから、結社の意向はみんなで決めることにしようよ。それはお兄さんにも伝えという。……まああの人はそのつもりだよね」

要するに華音が、一人で刻季の為に働こうとしているだけなのだ。

「ですが、あなた様は我が頭首であります。そのような温いことはやめてください」

「温いことって……」

自分に熱湯レベルを求められても応えられるつもりはない。
むしろ温いどころか冷水レベルになるかもしれないのだ。

「じゃあ、華音に命令」

「はい、なんででしょうか？」

ここで初めて華音に対して、権力を行使する。

あくまで、従者に対するものでなく、頭首として、結社の構成員に言うように。

華音はそれでも嬉しそうだった。

「結社の意向は合議で決めます。それに異存を言わないように」

「それは……！」

「華音が求めた命令だよ？ 聞かないなら、結社の頭首も断る。そんな絶対王政じゃあるまいし、今は民主的な側面がないと結社も維持できない。そんな先のない結社なんてお断りだよ」

「……………」

「どうするの？」

「……………わかりました」

渋々肯定を示す華音。

「ようやく、私の上に立つ立場が整いましたのに、そんな簡単に諦められては困ります」

唇を突き出す華音は、無然としながら言った。

「まあ、僕も華音の事がある程度許容するから、華音も少しは許してよ」

それは刻季にとって、華音の存在を認める言葉で、刻季が今まで許していなかったことを許す言葉でもあった。

それでも華音はどこか慚然としたまま（無表情なのだが）だった。
「じゃあ、この話はおしまい！ それじゃ華音、遅いし送っていくから着替えて」

自然とついでた言葉だったのだが、華音は驚いた様子を見せた。

「そんな……、刻季様。今日もここに残ってはいけないのですか？」
「何言ってるの？ ダメに決まってるじゃん」
それは当然のことだ。

年頃の少女が同じ部屋に泊まるなの有り得ない。
泊まるというのが刻季の部屋だが。

「ですが、お夜伽をさせて………」

「ちょっと待ったあゝゝゝ！！」

なんかいらん単語が入っていた。

本当に何の前触れもなく、突然爆発する爆弾のようだ。

「女性がそう言うことを言っではいけないと思います」

貞操観念がしっかりしている刻季は、華音を諫めた。

しかし華音も引かなかった。

「いいえ、今日という今日は残ります。お泊りセットなるものをちゃんと用意していますし、昨晚部屋を色々覗いて、おそろいのパジャマとコップ、歯ブラシなどを用意しましたから」

「何やってんのかな！」

それじゃメイド服の意味がない、とも言わない刻季。

少しそう思っているということもあり得るが。

というか観点はそこではない。

「今日は何があっても残らせてもらいます。帰りもメイド服なんて恥ずかしいですし」

「来る時もメイド服だったの!？」

また衝撃の事実発覚だ。

気を休める暇がない。

「周りから、変なものを見るような目と、少しいやらしそうなものを見るような目で見られ、イラっともきました。刻季様以外にどんな眼で見られるなんて……、不覚でした」

「僕はそんな目で見るつもりないよ!」

「え? 刻季様、お気づきではありませんでしたか?」

「なにが!? 僕そんな眼で見てるの!？」

「(……ポッ)」

「やめて〜! 突然そんなしおらしくなるの」

刻季も見えていないと断言できないのが辛いところだ。

「まあ冗談はともかくとして……」

口調をころりとかえ、照れていた表情もころりとかえ、華音が言った。

「質の悪い冗談だよ!」

つつこむが気にとめた様子なく、華音は続けた。

「ここには今日は、残らせていただきます。そう兄上にも話しましたし、喜んで見送ってくれました」

「あの人は!」

余計な事ばかりする人だ。

兄妹そろって。

「昨日は引きましたが、今日は引きません。結社のトップに対する警護ともお考えください」

それは間違いではないだろう。

師団と宗教徒と国家を敵にまわした結社。

詳細は知られてないが、これからは危険が降りかかるようになるだろう。

刻季は魔術が使えない以上、穴がある。

むしろ穴だらけだ。

その穴に華音も気づいているのだろう。

だから昨日に比べて引こうとしない。

昨日は3時間で引いたのにも関わらず、今回は引く隙すら見つからない。

それも刻季の事を思っていることなのだろう。

だから刻季は

「じゃあ、ここに残っても良いけど、僕は仁吾のところに泊まるね」

「それはダメです！ あの人は『碓氷』ではないですか。いずれ敵になる人に協力していただくなどあり得ません」

「同じ部屋に泊まる方が有り得ないし、仁吾にはちゃんと話してあるから」

「何故ですか！？」

どちらに対しての疑問だろうか、

わからなかったので、律儀にどちらに対しても答えた。

「そんなことが……」

華音に先程のことをかいつまんで話すと、ぼうつとしたような返事が返ってきた。

「国家と共存するというのは、兄上の考えと違いますが……」

「わかっているよ。だけど、国家と共存しながらも、魔術師の地位の向上は目指せるでしょ？」

むしろ国家と協力した方が、魔術師の向上は図りやすいだろう。

敵対するより取り込むほうが、勢力があがるのは必然だ。

「確かにそうですね。……わかりました。私は刻季様の考えに同調させていただきます」

「ありがとう。これから大変になるかもだけど、よろしくね」

「刻季様の頼みを大変とは思いません。むしろ仰ってくださいって嬉しいです」

頼まれて喜ぶという気持ちは少なからず刻季にもわかる。

頼られるというのは、存外嬉しいことなのだ。

「それじゃ、僕は仁吾の部屋に行くね。部屋の物は好きに使っていいから」

「はい、何かありましたら、すぐに呼んでください。駆けつけますから」

「まあ結成してすぐっていうのもないでしょ？」

「警護の関係だけではありません。下のお世話と……」

「ストオーツプ！」

暴発し放題の女だ。

大変な使いづらい爆弾を抱えてしまった刻季だった。

ちなみにこの後仁吾に詮索されたが、明日になればわかると、言葉を濁した。

第19話 メイドとは服に宿るものに有らず（後書き）

華音嫌いな人多いですね。
なんだか寂しいです。

第20話 知女？（前書き）

いいえ、痴女です。

といっても浅いほうだとおもうので気にしないで読んでください。
2話連続華音さんでした。

第20話 知女？

ちなみにこの後仁吾に詮索されたが、明日になればわかると、言葉を濁した。

その晩、刻季は夢を見た。

実際には翌日早朝見たというのが正しいが、さほど差異は無いだろう。

その夢の中で刻季は観測者であり、王でもあった。

自分は動かずに、ひたすら傍観者であった。

王宮のようでもあるその場所の中で、王はまるで時計の中にいるかのように、時間だけが刻一刻と流れていく感覚を感じた。

退屈にしながらも、目の前を通る老若男女国籍問わず誰もが、こちらを見るとにこやかに笑いながら跪いてくる。

この夢に国籍という概念、年齢という概念が存在するかは知り得ないことだが、目の前を通る者の極端な例は、土下座に近いものをする者もいた。

土下座に近いものをする者は、それなりに多数いたが、それよりも際立って目立っていたのは、立派な鎧と立派な剣を腰にさした、おそらく剣士と、妖しいローブに身を包み、更に妖しい、どこかの偏屈な土産物屋においてありそうな杖を持った、おそらく魔術師だ。

剣士と魔術師は、共に仲良く王の前に立つと、すぐに跪いた。

なにやら大声で、忠誠の言葉らしきモノを2人で述べているが、耳はそんな声を受け取らず、そんな音を受け入れずに、雑音にも似た

ような言葉らしきモノをひたすら聞いた。

話が終わったと思えば、2人は面を上げ、剣士は剣、魔術師は杖をそれぞれ掲げると、それを重ねた。

王宮のシャンデリアとステンドグラスからさす光を受け、その二つは各々の輝きを見せる。

その輝きは、どこか高貴で、幻想的で、そして妖しく、鮮やかであった。

剣が見せる輝きというのは、ある程度わかるつもりだが、杖が輝くというのは、予想外で、それを王は、どこか不思議に思いながら見蕩れてしまう。

しかし、その時間も体感では一瞬で、すぐに2人はそれらを下ろした。

そのまま剣士は鞘へ、魔術師は杖本来の使い方に戻すと思いきや、2人は王の前に歩み出て、それらを王に献上した。

そして2人は、また跪くと、何を言っているかわからない言葉を長々と述べる。

ようやく口上が終わったと思うと、なぜか王である自分の体が勝手に動いた。夢だから動きたいように動けないのは当然なのかもしれない。

王宮にいる者全てが、緊張の面持ちで王の事を見つめる。

そして王は献上を受けた、それらを両手で掴むと、思い切りぶつけ合った。

自分のしている事なのに、したいことがわからなかったが、ともかくそういう行動に自ら出た。

二つを見ると、圧倒的に丈夫そうな剣と弱い木製の杖とでは、張り合いがないと思っていたが、ぶつけ合った結果は意外にも、両

方が同時に壊れて砕けた。

立派な剣も妖しい杖もこの夢から消えた。
剣も杖もこの世から消えた。

それが何を暗示するのか、夢で過ごす者にしか理解できないのだらう。

夢に片足を突っ込んでいる状態では何も知らない。

むしろこの夢が、夢である以上、夢に過ぎない。

現実から隔離された、幻想の中にいた者達は、剣と杖の崩壊に、歓喜した。

どこか、もう怯えるものはなにもない、といった様子に、王として見えた。

最後に剣士と魔術師の後頭部が見えて、夢は終わった。

目の前が暗くなる。

夢から現実に引き戻すように

夢は終わった。

刻季は人の部屋の予備の布団に寝ていた。

寝る前しきりに、仁吾になんやかんや聞かれたが、全て『明日わかる』とだけ言っておいた。

それでも気にはなっていたようだが、時間が経てばわかるという刻季の言葉を信じて、諦めの意を表していた。

刻季としては、とりあえず休息が欲しかった。

そしてそれも無理はないだろう。

2日続けて、この世の全ての苦勞を合わせたような状態だったのだ。早く寝ようと思っても、一昨晚も昨晚も元凶が現れて、それどころではなかった。

だから刻季は、早く寝るためにと、華音から離れるために、仁吾の部屋を訪れた。

仁吾も嫌とは言わなかったが、理由を聞きたがった。

こういう時に、仁吾は『超気合い説』を発動して、何も聞かずに、気合いだけで止めてくれれば、暑苦しいだけで言うことなしなのに、やはり一度仁吾の部屋から自室に戻って、また仁吾の部屋に戻っているようなら、気になる仁吾の気持ちもわかる。

というか隣に部屋があるのに、ここに泊まりに来る理由がわからないだろう。

それもある程度予想が着いているみたいだが

ともあれ、刻季は仁吾の部屋の予備布団で朝を迎えた。

なにやら、夢でも見ていたような気分だったが、夢など起きて殆ど覚えていないことなんてないし、興味もないから、すぐにそのことを頭の片隅に放り出した。

まだだいぶ眠く、惰眠を貪っていた気分だったが、本日も学業を行わなければならない学生であることは言うまでもないので、起き上がり小法師のように、頭を何度か揺らし、眠気を騙し、布団から這い出た。

仁吾はベッドの上でまだぐうすかと、鼾をかいていた。

時計を見るとまだ、6時半だったので、学園には十分間に合う時間だ。

いつも8時頃に寮を出発するが、それでもクラスでは早い方である。

萌葱なんかは、刻季達なんかよりもよっぽど早いそうだが、現在生徒会に所属する者としては当然の振る舞いなのだろう。朝の集会もあるし

しかし、仁吾は軒まで、雄々しくて、野獣らしさが滲み出ていた。それを刻季は、羨ましく見つめるが、自分には生涯手に入らないだろうスペックなので、わりと諦めている。

諦めながらも少し非難する様な眼を向けてしまい、慌ててぶるぶると首を振る刻季。

彼は自室に戻らなければならなかったので、机の上に、『起きたら部屋に来て』とだけ書き置きをして仁吾の部屋を出た。

・・・・・・・・・・・・・・・・

昨晩はわりと刻季の頼みを聞いてくれたほうである華音のいる自室に向かった。

そんな感じだから、刻季は油断していた。

彼女の普通の登場シーンのほうが、今まで珍しかったのにも関わらずだ。

ドアノブに手を掛ける刻季。

こちらから部屋の様子はうかがえないが、部屋からは少しだけ、廊下を通る物音がしたりする。

まあそれも注意深く聞いて、なおかつ静かでないといけないことだがりあえず、一気にドアを開けた。

もちろん、ドアを開けるのに何の躊躇いもない。

それは、そうだ。

自室のドアを開けるのに警戒する人がいたら、それは相当な恨みを買っている者くらいだろう。

もしくは、上から見た要注意人物などもあてはまるが、刻季はまだその域に達していない。

一応、要注意秘密魔術結社の頭首だが、なってからまだ丸一日も経っていないので、知る人の方が、上層部でもごく少数だけだろう。

そんな今後要注意人物になるであろう刻季も、未来の事はわからないので、警戒のしようもない。

それは、遠い未来も、近い未来もだ。

遠い未来はさておき、近い未来の危機は、すぐ近くに迫っていた。これを危機と言っているのか、わかりかねるが、刻季にとっては危機でしかなかった。

おそらく、竜也なんかは見た瞬間飛びあがって喜ぶだろうし、世の男たちは大抵それに準ずる行動をするだろう。

刻季も、なんの事情がなければ、ありがたく享受して、それを堪能するくらい年頃の男の子なのだが、現在はそれを受け入れると、何やら不幸が襲ってくる予感が、第六感にヒシヒシ感じるので、当然ながら受け入れられない。

第六感には仁吾の言う気合いよりも信用度が高い。刻季の中では

これだけ言えばわかるだろう。

竜也が求め、刻季が恐れる人物。

というよりも、単純に刻季の部屋には彼女しかいない。

ドアの奥には華音がいた。

おそらく、刻季の廊下を歩く音でも聞こえたのだろう。

一昨日と昨日と同じ姿勢で刻季を迎えた。

しかも、今回は随分強烈な格好で、強烈な肢体をちらつかせている。もちろん、刻季は驚いた。

しかし、彼は驚きすぎて、冷静になるという、極めて奇妙な状態に

陥った。

（一昨日は制服にエプロンという家庭的な格好。昨日はメイド服という実に不純なコスプレ。次は何だろうと少しは考えていたけど、これはないよね。姉さんじゃないけど、まだ姉さんの言ってたコスプレのほうが健全な気がするよ。スク水、セーラー、ブルマetc. あれも大概だったけど、これは凄いね）

と、まあ、刻季にしては冷静に分析出来ている。

しかし分析が出来れば、対応が出来るか、と聞かれると、必ずしもそうじゃない。

むしろ、高等部1年の男性に、これをうまく対処しろ、と言っても成功率は5%を切るだろう。

刻季はもちろん、95%の中に入るに決まっている。

そうでなければ、これまでもっとうまく立ち回りできたはずだ。

華音と決闘、華音との主従、華音のお願い、華音の父兄との面会、華音の兄との決闘、華音の家などの結社問題……

ざっとあげるだけでこれだけのことがある。

これをうまく対処できていたら、刻季の現在は大きく変わっていただろう。

変なところで器用で、変なところで不器用とは、刻季に対する、仁吾の批評である。

もちろん、この言葉を言われて、喜べはしなかったが、否定も出来なかった。

むしろ、自分に器用なところがあるのか、と疑問に思ったくらいだ。

閑話休題

要するに今華音が、刻季の前に晒している姿を、お伝えすれば、わ

かることだろう。

昨日のメイド服を経て、彼女は今エプロンを身に着けていた。

エプロンのみを身体に着けていた。

その格好は俗に言う、

——『裸エプロン』だった。

「おはようございます、我が君。刻季様」
彼女は正座したまま、頭を下げた。

そうすると背中が丸見えになっているのが見える。

ブラの紐すらなく、その背中には、エプロンの紐しか見えなかった。

刻季は、頭の中が冷静なだけで、内心はどうしようもないほど、動揺していた。

そんな状態では、思考はできても、発言ができず、ただ華音の美しい肢体を眺めることしかできなかった。

華音は頭を上げると、刻季がじっと見ていることに照れたのか

「いやですわ、刻季様。そんなにじっと見ないでください」
赤くなりながら言う。

裸エプロンは見なければ意味のない、視覚的なものだったが、それは置いておいて、刻季にもようやく発言できる状態回復が機能した。いかんせんポンコツな機能だが、ないよりましだ。

そして、早朝の自室で、叫ぶのだ。

「あんたは、痴女なのか！？ 変態なのか！？」

心の底からの訴えだった。

姉み...みたいなことをするもんじゃない、と

しかし、刻季の言葉に憤慨したように、華音。

「失礼ですね。痴女というのは、誰かれ構わずですが、私は刻季様限定です」

「余計質が悪いよ！」

こんなところで、性奴隷みたいなことを言われても困る。

そんな律儀に契約履行しないほしい。

契約した覚えはさらさらないが

「そして、変態というのも刻季様の前でのみです」

「そこも否定してよ！」

彼女は変態だった。

素質はあるとおもっていたが、これほどだったとは……

そして華音は憤慨しながら

「実のところ、昨晩はシャワーを浴びてから、ずーっと待っていました。刻季様が私を何時襲うのかと……、ベッドにいなければまずいのか、それともシャワーを浴びているところから始めるほうが、興奮するのか……、なにぶんそういう経験がないので、わかりませんが、刻季様を満足させようと、色々考えていたのです。別室に行ったのも、その為の伏線だと思っていたのに……。シャワーはそう何時間も浴びてはいられませんでしたので、刻季様とお揃いのパジャマ（ポツ）を着て、ベッドの中で待っていました。寝てしまっても刻季様の突然の夜這いでも対応できると思っていたのです。それなのに、私は寝てしまつて、刻季様は部屋に訪れることもなく……一体どうしてこんなことに！」

「僕が聞きたいよ！」

華音が長々と碌でもないことを喋っているが、刻季は一言で返した。

「なにその夜這いつて！？ 僕がそんな男に見える？」

「見えません。むしろ男では無く、制服を着ていない状態だと、女性にすら見えます」

「議論はそこじゃない！」

気にしているところを突かれる刻季。

「というか美人ですね」

「やめて！」

この否定の仕方まで、女みたいだったのはさておき

「それは、いいとして……、いやよくない、けど今は置いて……」

さっきの華音の言葉に色々聞き逃せないのが含まれていたんだけど

……、むしろ全て聞き逃せないんだけど……」

ひとまず怒りは置いて、話を進める。

「刻季様も一応！ 高等部の男性ですから、私も覚悟しておりました」
一応を強調して言う華音。続けて

「その覚悟を一夜無駄にしてくださいました」

その言葉は、してくれたと言うわりには、恨みがこもったものだった。

こめられても、刻季の責任どころか、華音の乱心でしかないのだが

「はたして、本当に女性ではないのか、ということを確認するため
に、前回のエプロンを使ったというわけです。これなら襲いたくありません
でしょう？」

「なるか！ それに僕は男だ！」

いろいろ失礼なことを言っている華音。

その後、刻季は一通り、華音の話に付き合おうと呆れた表情で、諦めきった表情で言った。

「華音の言いたいことはわかった。そして言い分もわかった。だからさすがにそれは着替えてくれないかな？ 仁吾もそろそろ来るだろうし」

「わかりました。今度はしっかりしてください。ただの処理とお考えでも、よろしいです。私はお情けで十分です」

また爆弾発言だったが、もうつつこむ余力すら残されていなかった。

このやりとりの10分後、華音は着替え終わり、仁吾も部屋にきて、仲良く食事をする、華音は一足先に学園の校舎に向かった。朝の集会があるのだろう。

仁吾は、部屋にきた時こそ、驚いていたが、順応性の高い生物なので、すぐに馴染み、華音の料理をうまいうまいと食べていた。

華音に向けて『いいお嫁さんになれますね』とか余計なことを言つて、華音は案の定顔を赤くしていたが、それも刻季に向けられていた。

刻季はもちろん、それをつつけば、蛇どころか龍が出てきてもおかしくないと思っていたので、スルーした。

別に刻季はMではない。

華音は先を行き、刻季と仁吾は、ゆつくりと仕度を終わると、学園までの道のりを歩いた。

すぐに校舎に着くことになるだろう、最短距離の道である。

そして、着くといつも通り人だかりがあった。

人だかりの中心には、生徒会役員がそれぞれの美しい容姿をばら撒くように披露していた。

今日はいつも以上に、人だかりの男性比率が高かった。

その中には竜也も混ざっていることだろう。

第20話 知女? (後書き)

最後はかなり走りましたが、全体的にゆっくりしすぎてますね。
まだこれでこの世界で3日目という恐ろしさ……。

というか、萌葱や濤桜やクラスや生徒会が書きたーい。
次くらいに入れるかもしれません。

とりあえず竜也の後に…… (笑)

第21話 黙認非公式（前書き）

今回も身の無い話ですいません。

もっと魔術や剣の話などしたいのですが、流れが……

強引に変えて、入れちゃおうかと思っても、この先がぼろぼろになること間違いなしなので勘弁してください。

第21話 黙認非公式

人だかりの中には案の定、竜也がいた。

彼の中では、入学してから、当たり前のことであり、それを欠かしたこともない。

天原華音のファン。

非公式の華音ファンクラブにも所属していると聞く。

会員は学園内にも外にも、どちらに存在し、そこらのアイドルより多いとまで聞く。

師団の家の娘ということもあり、ネームバリューもばっちりだ。

竜也はわりと浅い所にいるそうなのだが、ディープなのも少なからずいるらしい。

これは刻季が竜也に、華音と出会う前に聞いた話だが、非公式のファンクラブにこんな不文律が存在するらしい。

『告白は許す。しかし付き合う者は許さない』

これを刻季は聞いた時、身震いもしたが、笑って流せていた。

今聞いていたらどうなることだろう。

竜也に『主従関係はどうか？』とかみっともなく聞いていたかもしれない。

昨日は、周りに常時実力者がいたことと、情報の伝達に時間がかかった為、華音のファンに襲われることは無かったが、これからはそういう点も視野に含めた方がいいのかもしれない。

華音には今朝、出来る限り学園内では近づかないで、と厳命してお

いたので、今後の不安は少しだけ軽くなった。（華音の出来る限りレベルがどれだけのものかは知らないが）

しかし、昨日の教室のこともあり、すでに情報が回っていてもおかしくない。

というか竜也が情報を回していても、なんらおかしくない状況だ。

だから本日、竜也の誤解？解くことが出来れば、ファンクラブの方は一先ず安心できるレベルにまで警戒は落ちるだろう。

敵が増えるか、現状維持かは、今日の行動にかかっていた。

いつも通り、そこまでの興味のない、生徒会周囲の人ごみを避けるように、横切る刻季と仁吾。

ちらりと中心を見ると、華音がこちらを凝視していた。

というか華音以外にもこちらを凝視していた。

生徒会役員が萌葱を含め、こちらを睨んでいた。

華音だけは優しい眼だったが、他は結構洒落にならないくらいの怖いのもいた。

幸継のは、眼力だけで、人を失神させるくらいの効果は有りそうな、眼つきだ。

翼、保美、柚穂は、ジト目程度だったが、それでも、睨まれるようなことをしている、刻季には、それなりの恐怖を与えた。

萌葱は……、これがデフォルトでもいいかな。

恐らく、ここを無視していくな、とでも言いたいのだろう。

無視しないわけにはいかない刻季にとっては、今は無視に値する対象であった。

あまり協力的になることを期待してはいけない、生徒会の面々だった。

萌葱の言っていた『信用できる人たち』というのは、刻季には該当しないらしい。

萌葱は人を見る目に長けていると、刻季も思っているし、それは正しいだろう。

しかし、萌葱視点から見た者と、刻季視点から見たのでは、やはり結果に違いが出ることを悟った。

悟る以前に、萌葱すら睨んでいる、というのは由々しき事態だ。

そんな事態、だからといって、刻季は萌葱に対して強く言うことが出来ず、萌葱の機嫌を取ることでしかない男なのだが、

刻季は、全てを視界から、切り離すがごとく、生徒会役員からの眼を全て知らないふりをして、下駄箱に向かった。
昨日以上に非難の目が厳しかったのは、きっと気のせいではないだろう。

華音の噂でも聞いたに違いない。

そう決めつけることしか刻季には出来なかった。

決闘で勝つだけならともかく、会長を奴隷（なんとも言いが、刻季は認めていない）にしているなど、生徒会としては、見過ごすことのできないことだろう。

だからといって、会長の手前、なにかすることも出来ない、もどかしい気持ちになっているのは、想像に難くない。

今は、炎のように、燃え上がっている気持ちも時間が経てば、治まるはずだと望みを託し、鎮火するのを待つ。

待機以外には、萌葱に頼むなどの方法もあるが、まだ生徒会内では下っ端であり、発言権も少ないだろうし、あったとしても、刻季のこの頼みは聞いてはくれないはずだ。

萌葱も刻季と一緒に黙認はしているが、いいようには思っていない気はしている。

というわけで、刻季は時間が解決してくれることを祈った。

教室。

中等の頃より立派な教室で、日本を代表する優遇学園の一室である。一室でもテロリストからの攻撃を許さないといったような、完璧な防護魔術などがかけられていた。

もちろん、そんな魔術、刻季には関係なく消滅させることが出来るのだが、刻季は猟奇的な性格をしているわけでもなければ、やったところで、不利益しか生まない行為はしない。

利益を生むからといって、したい行動ではないのも事実だ。

萌葱なんかは形態魔術を使えば、根本から崩せるかもしれないが、彼女もそんなこと望んでもいないだろう。

前回少し危なかったようだが、机だけにとどめたようだ。

非公式のファンクラブに所属する竜也はまだ教室には来ていなかった。

果歩は、いるみたいだが、本を読んでいて刻季達が来たことに気づいていなかった。

萌葱は言うまでもない。

他のクラスメイトは、刻季の方をチラチラ見ては眼を逸らす、という行動を繰り返しているが、見てくるだけで実害はないため、放って置いた。

目立つのも無理はない。

昨日の生徒会長との絡みは、詳しく知らなくても、予想がつきそうな単語ばかり発していた気がする。

しかし今日は大丈夫だった。

何が大丈夫かと聞かれると、単純に華音の説得を朝のうちに終えた、と言える。

要するに、華音に、これから出来る限り学園内で騒ぎを起こさないで、と厳命してあるのだ。

それに対し、別に問題を起こすことは華音の本意でもないのです、快く了承してくれた。

あとは今日、口八丁手八丁な言葉で、竜也を、クラス中を納得させれば、ミッシェンコンプリートだ。

別に騙すわけではない、認識を改めさせるのだ、とは刻季の弁であり、それがどこまで正しいのか定かではないが、仁吾も成功を祈ってくれている。

成功すれば、また穏やかな学園生活を送れることだろう。

……その機会は、昼休みまで持ち越された。

竜也とはもちろん会ったが、目が合う程度で、話す時間までは取れなかったのだ。

一方的に、睨み、なにやら如何わしい言葉を吐いていたが、気にしても、反発しても負けるとわかつていたので、流しておいた。

果歩のビクビクした姿は、どこか保護欲をくすぐるような魅力があったが、それも手だしをしてはいけない。

いつものように、机を集め、食事をとる。竜也はおとなしく来た。華音がしきりに弁当を持ってこさせたがったが、それは固辞した。これ以上敵意を増長させてはならない。

「そういえば、刻季も、昨日は災難だったよなあ」
集まったところで仁吾が話します。予定通りだ。

朝の内に、昨日のアレは、少し強引だが、ドッキリということにした。

それに仁吾も快く協力を申し出てくれたのだ。

「いや、ホントだね。僕も困っちゃったなあ。本気で困ったなあ」
それに乗る形で、困ったことをしきりにアピールし始める刻季。

今回の作戦はこうだ。（作戦と呼べるほど綿密なものではないが）
・まず昨日は困ったとしきりにアピールする。
・それに反応した竜也、もしくは萌葱が、何が困ったのかを聞いてくるのを待つ。

（上記は、仁吾が受け持つ場合がある）

・聞いてきたら、一昨日生徒会に誘われて断ったから、そういうドツキリをしかけたと伝える。

・そこでドツキリだと信じたら、個人的に会えてよかったね、と伝え終わるだ。

簡単な手順だが、懸案事項もいくつかある。

まずは事情を全て知っている萌葱の事だ。

しかし、根は刻季のことを心配してくれているので、おそらく味方になってくれるだろう。

そして、竜也の出方もわからないというのも、難易度を上げている。これが、数年付き合った人ならともかく、まだ10日ばかりという短い付き合いなので、予想がつきにくいのだ。
しかしこれは勢いでなんとかすると決めた。

刻季は現在、作戦を遂行中であり、困ったアピールを続けていた。そろそろ、誰かが反応してくれないと、仁吾に頼むしかなくなる。そう思った時

「何が困っただ！ てめえ、会長と知り合えたのにも関わらず、困ったとか贅沢なことやってんじゃないやねえ！」
いきなりブチ切れである。

反応が良すぎて困っちゃう、……なんて冗談を言っている場合ではない。

作戦失敗

その言葉が頭に浮かぶが、まだ修正可能だ。

出足から、いきなり作戦通りにいかなかったが、ここからどうにか、修正をかければなんとかなる、刻季はそう信じて続けた。仁吾もそれを読み取ったのか、手伝ってくれそうである。

「い、いや竜也。実は昨日ね、あれはドッキリだったんだよ」

「そ、そうだよな、刻季。ホント大変だったな」
慌てながらも、話を戻す、刻季達。

萌葱がなにやら不審な目をするが、今は見てないことにする。
きっと萌葱にも伝わるはずだと信じて……

「……ドッキリ？」

気になる単語の登場で、一時怒りを忘れる竜也。
ここから一気に畳みかけることにした刻季。

「そうそう、僕昨日生徒会に誘われたんだけど、それ断っちゃってさ。意趣返しくらっちゃった」

なおも萌葱は刻季に目を向けるが、刻季は竜也だけを見ている。

果歩はふむふむそうなのか、と可愛らしく頷いている。

クラスの癒しキャラとしてピッタリだ。

「俺もあの後聞いた時驚いたよ。意外とお茶目な生徒会なんだな。
少し南雲が羨ましいよ」

なんて思っても見ないことを言っているが、今は仁吾の軽口がとても助かる。

萌葱を話に引き込んだのは、感心できないが話の流れ的に仕方のないことだろう。

「昨日のってドッキリなのか？ いやドッキリだとしても羨ましいことには変わりはないが……」

「そう、なんだよ。ね、仁吾！」

「おう、そうだな」

「ねえ、刻季、確氷」

良い感じになってきたところで萌葱が話に入ってくる。

「な、なにかな？」

「なんなの？ これ」

「な、なんなのって？」

恐る恐る聞く刻季。

実際は無視を決め込みたいのだが、そうはいかない。

「だから、この茶番劇は何？」

「茶番……？」

竜也が反応する。

「いやいや、なにさ！ 萌葱だって知ってるでしょ？」

慌てて萌葱に撤回を要求する。

「何を？」

返事は冷めたモノだった。

それでも諦めずに刻季は、要求し続けた。

「だから、萌葱も昨日の話の全容は知ってるじゃん」

「……全容って何よ？」

これは、刻季の味方をしないという所信表明ではなく、本気でしたいことがわからない、といった様子だった。

まだ見込みはあった。

「おいおい、なんだよ、刻季」

竜也が不審そうな顔をしている。

しかし、今は萌葱を味方につけることが先決だった。

味方につければ、この戦は勝ち戦へと変わる。

「昨日のドツキリの事は萌葱も知ってるじゃん」

幸い、刻季と萌葱は隣に座っているので、話もしやすかった。

ゆえに密約を取り交わすこともできた。

「ドツキリ……？」

未だに全く話の予想がついていないらしい萌葱に、刻季はあることを思い出した。

先日、入学してまだ一週間ほどしかたっていない時、学園内の話をしていた刻季と萌葱。

「時間ができたら、『ドリームランド』行ってみたいなあ」

「『ドリームランド』って国内最大の来園者数を誇る？」

「そう」

どこか期待する様な目で萌葱は刻季を見ながら言った。

ドリームランド

そこはその名の通り、夢の島、夢の国と呼ばれ、優遇学園内にありながら、国内最大の来園者数を叩きだしたテーマパークだ。

興味本位で優遇学園に訪れて、そのままドリームランドに向かう、というのは今や日本人のレジャーとなっていた。

家族連れから、カップル、友人など、様々な形で訪れるお客を歓迎

し、夢のような気分を味わってもらおう夢の国だ。

優遇学園が出来た当時、ドリームランド以外にも、いくつかの遊園地はあったのだが、ドリームランドの人気の前にひれ伏し撤退した。それ以降は優遇学園内に遊園地は作られることなく、ドリームランドの独占状態だった。

もちろん現在も

この遊園地に興味を示すのは、女子高生として当然のことなのだが、それが誰と行きたいという方まで、鈍い刻季にわかるはずがない。だからこんな返事の返し方になる。

「そっか、友達できたら行ってみなよっ。そんで面白かったら僕にも教えて。仁吾と行ってみようかな」

わりと最低の返し方だった。

ついでに目の前にいる人を誘わずにいるということまでひどかった。もちろん刻季にそんなこと気付かないが

萌葱は急に元気をなくしたみたいにため息をつき

「……そうだね」

「……………」

哀愁漂うといった表現がぴったりの萌葱に、刻季は不思議に思った。が、理由が分からない以上手出しが出来なかった。

この男と15年間一緒にいるというのは、想像以上に大変なことかもしれない。

詳細は覚えていないが、なんとなく萌葱が『ドリームランド』に行

きたがっていることは、この刻季にもわかった。
そのいきたい相手がわからないだけなのだ。

今は果歩もいることだし、2人で行けばいいと思っているのだが、
今果歩は関係なく、萌葱を連れていくには、刻季が誘うしか方法は
なかった。

もので釣るというのは、あまりしたいことではなかったが、背に腹
は代えられない。

刻季の誠意が伝われば、きっと萌葱も話に何となくではあるが、乗
ってくれるだろう。

「萌葱さ、ドリームランド行きたがってたよね」

小声で萌葱に意思を確認する。

「う、うん。……それが？」

突然話が変わって、驚きながら返す萌葱。

「僕と、で良ければ一緒に行けないかな？ もちろん奢るから」

「えっ……、それって……」

「うん、僕と一緒に行ってほしいんだ」

「そ、そう？」

「だめかな？」

「だ、だめじゃない！」

声が大きくなり、竜也が気になるが、すぐに萌葱も気づき、声を小
さくする。

「そう？ じゃあ詳しいことは後にして、今は……」

「わかった。楽しみにしてる」

「うん、僕も楽しみにしてるから、今は……」

「なんとなく、話にのればいいのね？」

「ありがとう」

「いいわよ。でもちゃんと後で話を聞かせてね」

素晴らしい幼馴染の機転の利かせ方だ。

生涯のほとんどという長い付き合いだが、これからもこういう付き合いをしていきたいと刻季は本気で思った。

「なに2人で話してるんだ？」

「「ううん、なんでもないよ！」」

そろそろしびれを切らしたとみえる竜也が聞くと、2人は声を揃えて返した。

仁吾は味方につけたとわかって、お役御免なのか、ニヤニヤと刻季に向けて、いやらしい笑みを浮かべていた。

「それで会長の話だけど、刻季の言うとおりよ！」

萌葱がそう告げる、それだけで場の空気が変わる。

「言うとおりにって？」

「うっ……、だからドッキリのことよ！」

萌葱は少し答えづらそうに言った。

嘘をついているというのも理由の内だろうが、基本的に何も知らない状態なので、返事に困っている感じだ。

刻季は心の中で『申し訳ない』と何度も唱えた。

「じゃあ刻季は被害者ってことか？」

「そうよ！」

「それで仕掛け人が、会長と生徒会？」

「うっ……、そうよ！」

「ふーん」

燃え上がっていた怒りの火が、先程よりかなり治まっている。

これは萌葱のおかげであり、萌葱の人徳がなせる業だろう。

「それなら、まあ、それでも羨ましくてしょうがないけど、しょう

がないな」

渋々萌葱の話に同意する。

実際の生徒会役員からの意見というのはそれだけで価値があるものらしいことが今証明された。

だからといって生徒会に今さら入ることを、志望もしなければ、歓迎もされないだろう。

「まあ、あれで、会長に名前を覚えていただけていたら、それだけで儲けもんだな」

さっきまで、怒涛の勢いで怒っていたと思えば、もうプラスに考えている、このポジティブな性格は刻季も見習うべきだろう。

とはいえ、危機は去った。

仁吾と萌葱の協力で

割とあっけなく。

「いやあ、相変わらず美人だったな。いつもは遠くから見ているんだけど、あんなに近くで見たの初めてだし、名前も呼ばれちゃったし……、あ……」

竜也はもう呑気にしていた。

一応の解決なのか？とみなが思った。

が……

しかしここで終わらないのが刻季だ。

こんな解決は、刻季らしくない。特にここ最近のと大げさに言うが、単純なことだ。

教室はざわついていた。

話に、というか説得に夢中で気付かなかった。

「失礼します。南雲さん、刻季様、碓氷くん、陸奥くん、そして……そちらのあなた、お話がありますので、良かったら生徒会室で食

事の続きをしませんか？」

後ろに華音がいた。

果歩だけは結構前から気付いていたのか、ビクビクしていた。仁吾も気づいていなかった。

竜也も萌葱も、もちろん刻季も気づいていなかった。そして驚く。

『出来る限り近づかないで』というのは忘れてしまったのかと、それとも問題発生かと

結果からいえば、忘れたのでも、問題発生でもなかった。だからといって気まぐれというわけでもなかった。

今になって教室のざわつきが耳にしっかり届く。

先程から届いていたとしても対処ができたかと聞かれれば、当然出来ないと答えるが、それにしても不意をつきすぎではないか？そう刻季は思った。

完璧に油断していた。

油断どころか、警戒対象にもなっていなかった。

一同は固まっている。

萌葱の名前を出したのは、華音の気づかいたったのだろうが、そんなこと、今は関係なかった。

また問題を起こす華音。

刻季は、慣れてしまっている自分に恐れを抱いた。

華音が返事を待っている間、教室のざわつきだけが耳に響いていた。

第21話 黙認非公式（後書き）

萌葱の遊園地話は、無理やりいれました。

萌葱の話を少しやりたかったんで、予定にはありませんでしたが、お付き合いいただければ嬉しいです。

しかしキャラ紹介ってどうやってつくるのでしょうか（笑）
そろそろまとめたいんですが……

第22話 チーム+α（前書き）

少し更新が遅れました。

今後もこれくらいになるでしょう。

もっと遅くなる場合もありますが、是非お付き合いいただければ嬉しいです。

第22話 チーム＋α

ここは生徒会室。

刻季は三日連続でここに足を運んでいる。

もはや、役員並みの使用率だった。

萌葱と変わらないくらい来ているかもしれない。

そして呼び出された5人。

刻季、萌葱、仁吾、竜也、そして華音の言っていた『そのあなた』は果歩だった。

名前を知らなかったのだろう。

竜也はあれほど気にしていたのに、ほいほいついていった。

計6人での行軍は、華音を先頭にし、萌葱・仁吾が含まれるため、どこの廊下を通ってもかなり目立ったものだったが、竜也はそんな視線ものともせずに、華音に見蕩れていた。

もちろん目立つことになっている、仁吾や萌葱、華音にとっても、視線など有って無いようなもので、特に気にした様子もなく、生徒会室に向かう廊下を歩いていた。

しかし、果歩と刻季は、目立つことに慣れてもいなければ、当然望んでもいないので、我がものの顔で闊歩している4人のことを少し羨ましく感じながら、お互い顔を合わせて苦笑するということを何度繰り返していた。

刻季にとっては、華音は知り合い以上の存在だが、果歩にとっては、華音は生徒会長ということでしかなく、やはり連れてこられることに違和感と不安を感じているようだった。

それがわかっていたので、出来る限り不安を取り除こうと、刻季は果歩のことを注意してみていた。

その結果、目が合い苦笑い、となったのだが、まあ仕方のないことだろう。

刻季は華音に関わった時点で、逃れることを半ば諦めているし、竜也は関わることを望んで、仁吾は興味本位、萌葱は刻季の為で、果歩はどことなく恐れを感じているから、結局1―Cの5人組は、拒否権などなく、華音についていくしかなかった。

いや、厳密には拒否権はあるが、それを行使しようがないというのが正しい。行使権はある。ただ出来ない。

生徒会室に着くと、果歩は感嘆の声をあげた。

3年間通う生徒でも、来ることは滅多にできない教室のため、1年の入学直後の生徒が来たことがないことは明らかだ。

きっと今年度の1年では、刻季と萌葱と仁吾だけしか来たことは無かっただろう。

片手で足りる人数だ。

お互い来たかったわけではないのは明白である。

「それで、なんなのですか？ 生徒会長」

萌葱が当然のように疑問をもらす。

ついてきた5人の内、4人が気になっていた事のため、話を切り出した萌葱に感謝していた。

ちなみに、あと1人は竜也で、彼は単純に華音についていくことになんの疑問もなく、喜んでついていく犬のようだった。

今も見蕩れて、生徒会室にいることもわかってないようだ。

「その前に、おひとつよろしいですか？」

何かの確認を取る華音。

それに皆が揃えて頷くと、華音は刻季の前に立ち、そしてすぐに頭

を下げた。

「刻季様、申し訳ございません。呼び出しをかけられる立場ではないのはわかっています。そして刻季様との約束を忘れたわけでもありません」

約束とはきつと、今朝の話だろう。

出来る限り、学園内での接触を避けるという話だ。

頭を下げたまま華音は続ける。

「しかし今まではもちろんのことですが、今回も理由^{ワケ}があるのです。だからどうかご容赦ください」

ワケとは何か、これから話すのだろう。

しかしながら、いつもよりも態度が変わっている。

仕えると言いながら、割と強引に刻季の事を引っ張っていく彼女だった、今回はどこか様子が違った。

そんな神妙な態度に気圧されて、刻季は了承の意を表す為に

「わかったよ」

とだけ告げて、面を上げさせた。

果歩は華音の態度に今さらながら驚くが、華音は刻季の意思がわかったように、顔をあげて微笑んだ。

その表情に竜也がもともと見蕩れていたが、見蕩れ直す。

華音は続けて、刻季以外の4人を見渡し

「皆さまもすいません。お忙しかったでしょうが、是非お話させていただきたいことがあったので……」

謝罪する。

その言葉に、4人は、いえ、と首を横に振る。

どこか恭順な態度に、竜也がメロメロで目をハートにして気持ち悪かったが、実害がないため放っておいた。

刻季以外もそう思っているような眼つきをしていたが、皆どうでも

いいようだ。

「んで、結局俺らが呼ばれたのってなんなんですかね？」
仁吾が改めて訊き直す。

華音はそれに、はい、と面持ちを正した。

「実は、あなた方にお願いがあり、お呼びいたしました」
「「「「お願い？」」「」「」」

「ええ、お願いします」

5人が首を傾げると、追って強調する華音。

「とは、言っても、南雲さんや碓氷くん、それに刻季様はそこまで関係ありません」

「えっ、それって……？」

萌葱が呆けたような声を出す。

「はい、今回は、陸奥くんと、そちらの……」

「阪野果歩です」

「ありがとうございます。阪野さんと陸奥くんに対してのお話という面が強いです」

「わたしと陸奥君ですか？」

「俺ですか？」

「はい」

華音が言うには、刻季達3人ではなく、果歩と竜也に対してのお願いらしい。

関わりの浅い2人に何の話なのだろうか？

刻季はそう疑問に感じたら、すぐに華音は話し始めた。

「私が刻季様に仕えていることは知っていますね？」

「……へ？」

先程の行動が無に帰す音が聞こえた。

「でも、あれってドッキリなんじゃないんですか？」

「ドッキリ……？」

なんのことかと、ポカンとしている華音。

「さっき刻季が言っていましたよ。昨日のアレはドッキリだと」

「アハハハ……」

乾いた笑いで誤魔化そうとする刻季。

しかし、華音は未だにポカンとしている。

「違うんですか？」

竜也が不審に思い華音に聞いた。

華音はそれに対して

「あの……、ドッキリってなんなのですか？」

「そっから!？」

思わず突っ込んでしまう刻季。

ドッキリの定義からわかっていなかった。

変なところでお嬢様らしさを出してくる。

お嬢様には、ドッキリは無縁の言葉だろう。

首を絞めることになるが、刻季は華音にドッキリというものについて教えた。

「そのドッキリというものが、刻季様と私になんの関係があるのでしょうか？」

「いや、会長が刻季にドッキリを仕掛けたという話を先程聞きました……」

「私が？ 刻季様に？ なんのためにでしょうか？」

軽く怒りの帯びた声で、問いかけられたじになりながら竜也は先程有ったことを懇切丁寧に説明した。

その間、刻季は何度となく妨害を掛けたが、華音に止められ最終的に苦笑いしかでてこなかった。

「へえ……、刻季様、そんなことを私がしたのでですか？」

「ハ、ハハ……」

「違うんですか？」

竜也が華音に聞く。果歩も疑問に思っているのが顔色に表れていた。似たような事はしているけど……と刻季は言えず、縮こまっているだけだ。

「もちろん、そんなことをするわけがありません。私は刻季様に仕える者ですから」

「な……っ！」

竜也が声にならない声をあげる。

「刻季、お前嘔吐いたな！？　なんかおかしいと思ってたんだ！」

「アハハ……」

一瞬で顔が般若のような怒り顔になり、刻季の方へ詰め寄った。

「刻季様、どういことですか？」

「アハハ……」

華音も竜也に比例して、顔に怒りが出ていた。

刻季はもう笑うことしか出来ない。

萌葱達は気の毒そうな目で刻季を見ている。

助けて欲しいなんて贅沢なこと言えないが、2人の怖さで思わず、助けを求めてしまいそうだった。

「刻季、ちゃんと話せ！」

「刻季様、ご説明を願います」

「アハハ……」

笑いでは誤魔化せないことのほうが世の中多い。

「刻季様、申し開きがあれば仰ってください」

「ありません……」

今刻季は、華音の圧迫感にやられ正座をしている。

説明の間、仁吾は必死にフォローしてくれたが、華音は聞こうとしなかった。

萌葱はその説明を聞いて、ようやく的を射た答えを手に入れられたのか、納得でしきりに頷いていた。

果歩も似たようなところだ。

竜也はこの圧迫感すら羨ましいのか的外れにも「お前ばかり……」と呟くのをやめなかった。

「まあ、この話は、あとでもじっくり出来ますからね。昼休みもそれほど残って無いことですし、そろそろ本題に入ります」

あとがいつ来るかわからないが一生来てほしくない刻季だった。

「阪野さん、陸奥くん」

「「はいっ」」

「まず私たち——刻季様と私には主従の関係にあります。そこは理解しておいてください」

いきなりネタばらし。竜也が恨みのこもった目で刻季を見る。しかしこれが本題だろうか

わざわざ伝えることでもないだろう。

散々周りの人に話してきたのだから

「そして今回は、我が君、刻季様の為のお願いです」

「僕の為……？」

「はい」

華音の言葉に刻季は驚き半分、疑い半分といった感じで聞いた。

今まで刻季に仕えると言っても、刻季の純利益になったことはない。

だから華音の言葉に驚き、そして疑っているのだ。

するとんでもない暴露をしてきた。

「阪野さん、陸奥くん。我が君は魔術が使えません」

.....

華音の言葉に全員が全員驚きを隠さないでいる。

刻季は驚きよりも啞然とした感じた。

「ですから、団体戦の時の事を考えておいてほしいのです」

皆の表情を見ても、淡々と話を進める華音。

慌てて刻季は華音を止めた。

「ちょ、ちょっと待って華音！」

「なんででしょうか？」

「なんでそんなこと言うの？」

「いずれ話さなければならぬことですから、早いうちのがよろしいでしょう」

「だからってなんで華音が？」

「我が君の事ですから、秘書である私がなさるのは当然のことではないですか」

「あんたは、どっかの姉か！」

どっかの姉こと、濤桜も刻季に似たようなことをする。

世話をするのが生きがいと思っており、当然とも思っているのだ。さすが刻季至上主義者は互いに規格外だ。

「刻季様もいずれこの方々とチームを組むのでしょうか？ だったら説明しておかないと、どうしようありません」

「そんなの先のことだし、それにまだ組むとも決めてないよ」

「じゃあ他に組むのですか？ 組むまで団体戦に出られなくなり、単位が貰えず、退学してしまいますよ」

「そんな急に現実味のある話されても」

「これもあなた様のためですから、ご容赦を」

「容赦って別になにかするわけじゃないけど、もし組むとしてもこっちのタイミングで話してから決めたかったよっ」

「まあまあ」

軽く言い合いになると仁吾が入ってきた。

「ちょっと話を整理させてくれ。まず5人でチームを組むと会長は思っている。そして会長は刻季の為に阪野や竜也に刻季のことを説明したい。それでいいんですか？」

「はい、そして阪野さんや陸奥くん、もちろん南雲さんに碓氷くんにも、我が君の為に動いてほしいのです」

華音が切実に願いを話す。

たぶん、本当に今後の刻季の事を心配しているのだろう。

「刻季の為に動くってどういうことですか？ それに刻季が魔術を使えないって……」

竜也が当たり前の疑問を呈す。

「そのままです。刻季様は魔術が使えないので、団体戦の間、あまり動くことが出来ないでしょう」

「そうなのか、刻季？」

神妙な面持ちで竜也に聞かれ、刻季は頷いた。

肯定の合図で果歩と竜也の目が見開いた。

「魔術が使えないって、どうやってこの学園に？」

「いや、まあ潜在的な魔力値が高いんだ。だから推薦受けちゃって……」

「魔力値だけで……？」

果歩が驚きでか細い声を出す。

確かに魔力値が高いだけでは、あまりアドヴァンテージにならないことだろう。

しかし試験がなく、潜在的な能力値で確かめる以外に、生徒を決められない程、魔術師は多いので、優遇学園では実技試験はおろか、筆記すらない。

受験者も毎年多いので、そちらは実技、筆記があるようだが、推薦では全国の学生の能力値できめるしか方法は無いのだ。

しかし、潜在的な能力が高ければ、やはり魔術の力はそれだけ高くなる。

魔力がなければ、魔術を使うことも出来ないのだ。

魔力の絶対値が多ければ、魔術の力はそれだけ多彩に広がる。

それも当然の話だろう。

潜在的な能力というのは、もちろん魔力だけに関わる話ではないが、入学項目の中に魔力が含まれているのは確かだ。

刻季の場合、国家が『羽間』だからということで、入学させたのだが、刻季はそのことは知らない。

国家サイドの仁吾も知らないことだ。

だから刻季は魔力の絶対値の高さが推薦の理由だと思っている。

「魔術が使えないことを学園は知っているのですか？」

「いや、知らないと思う。まだ実技なんにもしてないし……」

「まあそうですね」

果歩が納得して頷く。

「それじゃ、学園に知らせないつもりか？」

竜也が落ち着いた声で、刻季に聞いた。

「まあ、出来れば知られたくないかな」

「そりゃそうか。せっかくの優遇学園入学なのに、退学させられるかもしれないんだろ？」

刻季は入学したかったわけではないが、そこはもう関係ないだろう。高等部には行きたかったので、ここを退学させられたら、中卒ということになる。

それだけは嫌だったので、今さら入学したかった・したくなかったというのは意味のない話だ。

「阪野さん、陸奥くん。我が君のことをわかってくださいましたか？」

華音が聞くと2人がこくと頷いた。

「ですから南雲さん、碓氷くん、陸奥くんに阪野さん、刻季様の為にどうか、これからのことお願いできないでしょうか？」

その華音の言葉は真剣で、刻季の為を想っていることだけは刻季にもすっかり伝わってきた。

「あたしはもともとそのつもりでしたけど……」

萌葱が一番に照れながら、華音の願いを聞き入れた。

「俺も俺も」

仁吾は萌葱に続き、少し面白がりながら、了承した。

そして竜也は

「あの、会長……」

華音を呼ぶ。

「なんででしょうか？」

「何故、刻季に仕えるなんていうんですか？ 魔術も使えないのに

……」

魔術が使えないことについて、なにも含みは無いような様子だった。単純に疑念が湧いたのだろう。

「わたしも気になります」

その言葉に追従するかのように、果歩が言った。

そして華音は刻季の事を見て、言っているのかどうかを目で訴えてくる。

ため息をつきながらの刻季の了解を取ると、華音はありがとうございます、と伝え、竜也達の方へ向きなおした。

「まず一つ目は、なんと言っても可愛いでしょう？」

「ぶっ……!!」

噴き出す刻季。

竜也達は、何を言っているんだとばかりに首を傾げる。

その気持ちは刻季も同じだ。

「なんの話だよ!」

「冗談です」

と冗談とも思っていない雰囲気のまま、否定する華音。

「それでは時間がないので急ぎます」

「誰のせいかな……」

刻季の悲痛の声は華音に届かなかった。

「まず刻季様は、単純に強いです」

「強い？ あ……、魔術使えないんですね」

「そのはずですが……、ですが強いです」

「何故なのでしょう？」

竜也が質問に質問を重ねる。

「魔術師以上の存在だからです」

華音が大きく宣誓するように言う。

「魔術師以上の存在？」

「ええ、まず魔術を使う者にとって刻季様は天敵以外の何者でもありません」

「天敵って……」

刻季が辛そうに華音の言葉に呻く。

「刻季様は、魔術の魔力を吸収する能力を生まれながらに持っているのです。ですから、魔術を使っても全て解体され吸収されます」

「魔力の吸収……ですか？」

今度の疑問は果歩からでる。

「そして、刻季様は他にも、魔力を使って、時間を止めることができます。そう文字通り、時を止める。……刻季様は能力にピッタリの名前をしていますね」

「そんな話はどうでもいいよ……」

刻季は疲れ切っている。

「時間を止める……？　なんですか、その能力……」

「なんでしょうね。私も詳しくはわかりません。きっと刻季様も……」

「わからないよ」

「でしょうね」

刻季が一番知りたいことは、使えるということ以外何も知らない。

「刻季様、少し使っていただけないですか？」

「ここで！？」

「ええ、ここで出来れば」

「いや、それは……」

流石に断る。

刻季もあまり使いたくないのだ。魔力を使用するし、使った後どんな目で見られるかわかったもんじやない。

「ダメですか……？」

上目づかいで華音が聞き直す。

あまりに魅力的な表情だ。

できればお持ち帰りにしたいくらい。

萌葱にブツ飛ばされるので、心にとめておくが……

その上目づかいを見て竜也が反応した。

「お前、会長がこんなに可愛くお願いしているのに出来ねえのかよ！」

さすが非公式のファンクラブ会員だけはある。

即座に華音の味方につく。

「わたしも見てみたいですよ……」

果歩も若干俯きながら、刻季に言う。

萌葱は、どこことなく不安そうで、仁吾は、肩をすくめるだけに終わ

「刻季様、お願いいたします。出来る限り、学園内に味方が多い方がいいのです」

結局は華音の為ではなく、刻季の為なのだ。

「華音、ありがとう。心配してくれて」

するとこんな答えが返ってきた。

.....

棒読みでしかない。

「フォーーーーー！！」
会長のツンデキターーーーー

「！！！！」

刻季が竜也と知り合ってから一番の大声だった。

301

言葉だけまねればいいという話ではないだろうが、竜也には効果があつたようだ。

このまましばらく、竜也はお祭り騒ぎだった。

「刻季様、どうかなされましたか？」

「色々台無しだよ！」

刻季が心中をあらわにする。

感謝とで、プラスマイナス0になってしまった気分だった。

ドッキリを知らないのに、ツンデレを知っているとはつくづく奇妙な女性だ。

「刻季様は、ツンデレ好きではないのですか？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

声を落として萌葱^{ツンデレ}を見る。

萌葱は刻季の視線を感じ、赤くなりながら否定した。

「べ、別に、あたしは、刻季なんかデレてないんだからねっ！」
やっぱり本家は違った。

声の抑揚が違い、声量や表情も華音のツンデレ度とは天と地ほどの差があつた。

刻季は萌葱がデレているとは思っていないので

「わかってるよ、それくらい。でも口調はともかく、台詞はなんとなく萌葱に似てたからさ」

15年の付き合いだったので、それくらいはわかっていた。
しかし一番大事なことをわかっていない。

「わかってないじゃないっ……」

萌葱の悲痛な声が聞こえる。

仁吾はそれに対し、

「本元は御苦労なこった」

飄々と笑いながらまたバカなことを言う。

「うるさいっ！」

「ぐふっ……」

そして殴られる。

つついても良いことのない藪をつついて、ぶん殴られている仁吾に、
刻季は、成長してないなあと思った。

果歩はまた、ビクビクし始める。

いつもの教室での雰囲気のように
華音は刻季をじっと見つめている。

竜也は……、一番どうしようもない状態だった。

生徒会室という規律正しい生徒が集まるこの場所は、まともな奴の
方が少ないと感じられるくらい酷い空間カオスとなっていた。

第22話 チーム+α（後書き）

書いてて、あんまり楽しくなかったです（笑）

竜也のキャラが他と比べて動いてくれません……
好きなんですけどね

あ

最後は書いてて楽しかったです（笑）

魔術とか関係ないラブコメでも書き始めようかな……

第23話 空間と住人（前書き）

今回から文体をガラリと変えて、刻季視点に移ります。

これまでの話も随時編集していきますので、ご了承ください。

気に入ってくれるとありがたいです。

第23話 空間と住人

華音が僕のことを考えてくれているのをなんとなく汲み取れた。色々巻き込むことが多い華音。

だけど、結局根本的には、生徒の為に、僕の為になるようにしてくれているんだろう。

今回の事もそうだ。

優遇学園に入った以上、魔力・魔術的な側面から逃れることは出来ない。

実技試験では、団体ではあるが、戦わなければいけないのだ。

だから、同じ団体になるだろう人たちに、魔術は使えないことは当然、それに能力があることは知ってもらわないと、事は進まない。

出来ることなら、優遇学園になんて入りたくなかったし、魔術からも離れることが出来ればと思っていたんだけど、それはもうどうしようもないことだし、望んでも手に入れられなかった現在だ。

実際萌萌や仁吾と通うことを楽しみにしていたところもあったから、別にそこまで嫌ってほどでもないし、中等も魔術的な側面が含まれる学校に通っていた。

それでもなんとかあったので団体の事はそこまで心配してなかったけど……。

でも華音の心配は尤もなことだ。

中等で魔術をやっていたといっても、本格的といえるレベルに達していたかと言われれば、必ずしもそうじゃないし、それに加えてここは魔術優遇学園だ。

魔術が出来なければ、簡単に、捨てられるように退学となるだろう。優秀な魔術学園で、無能とわかったら、国家は捨てるのを厭わない。

団体でのことは、遅かれ早かれ、ちゃんとしなければならなかったので、いい機会だと思おう。

中等も、萌葱と仁吾の尽力があつてこそなんとかやれてきた。

この学園でも、協力は不可欠だ。

萌葱は渋々、仁吾は好意的に、協力してくれると、僕に言っているけど、団体には絶対5人はいなければいけない。

そこで頼むことになるのは、竜也と阪野さんしか現段階ではない。

もちろん、能力を使うことなんて嫌だし、知られる人数も最低限に抑えたい。

だからきつと、これは最低限の内なのだろう。

随分と騒々しくなったこの空間で、僕は話を切り出した。

「竜也、阪野さん。それに萌葱、仁吾、華音」

一通り名前を呼ぶと、みんながこっちを向いた。

「僕はこれから能力を使う。だけど、これは黙っていてももらえるかな？」

竜也、阪野さんには、ある程度の事情を把握してもらうために、あとの3人には念のために言った。

その言葉に、3人は当然とばかりに頷いた。

竜也と阪野さんは、何故？という目をしてくる。

「僕の能力は、異質だからね。誰にも知られたくないっていう欲求もあるけど、それ以上に知られ過ぎたら、何をされるかわかんないっていうのが大きいかな」

「何されるかわかんないって……?」

竜也が、まだ全く理解していないような声を漏らす。

あまり言いたくない過去だけ……

「僕はね、昔研究対象になりかけたことがあるんだ」

「……研究対象?」

不穏な単語に反応する竜也と阪野さん。

華音にも話していなかったので、彼女もどことなくボケっとした状態になっていた。

萌葱と仁吾は、刻季のことを古くから知っている身だから気まずそうな顔をしていた。

「……うん。異能っていうのは、忌避の対象にもされるけど、それ以上にヒトの興味を惹く。それはわかるかな?」

「……まあ、なんとなく」

「その興味が高まれば、調べたいって思うらしいんだ。……アイツらは」

「アイツら?」

「魔術の研究機関の人たちだよ」

この世界には、魔術に対する研究機関が戦争終結の50年ほど前からいくつも作られた。

魔術を、魔術師サイドが公開したからだ。

それまでこの世に存在していた、エネルギー理論や物理学は、魔術の前になんの意味もなかった。

魔術師という媒体と、魔力というエネルギーのみで、成り立つ魔術。これにはどの学者も惹かれた。

国家も、それに協力する形で、堂々と魔術について研究するようになり、いつしか国内外問わず、魔術の研究機関は増加していった。もちろん、教徒の使う剣術に対する研究も行われたが、魔術に比べて、機関は少ない。

外国のほうが研究は進歩していると聞く。

進歩したところで、実力は上がらないけど……

過去からずっと使われてきた魔術を研究したところで、技術の発達が望めるとは思えない。

望めないが、研究者たちは、それで満足なのだ。

自分たちが使うわけではなく、自分たちが満足できるまで、調べて調べて調べ尽くせば、それでいいのだ。

僕的能力に対しても、結局その程度の情熱しかないんだろう。

その程度の情熱を埋めるために、欲求を満足させるために、犠牲になるなんて気持ち悪い。

怖気だつにも程がある。

そんな陰鬱なことを考えていると

「それで、刻季様。どうなったのですか？」

心配そうな顔をして、華音が聞いてきた。

思考で止まっていた脳を会話に向けるために、僕は華音の方を向き、結果だけを話すことにした。

「えーと、ね。さっきも言った通り、なりかけた、ただだからね」

「なりかけたってことは、全く研究されなかったのですか？」

「全くってわけじゃないんだけど、調べ尽くされてるってことはな

いと思うよ」

「それってどこまで……？」

「詳しくはわからないし、わかりたくもないけど、能力を使えるってことぐらいかな」

「根本じゃないですか!？」

華音が驚き、声を張る。

僕はその声にこそ、吃驚したが、落ち着かせるように

「使える、ってわかっていても、条件も詳細もわからないんだから、そこまで危惧することじゃないよ」

「……そうですか？」

「うん。だから大丈夫だと思う。これが多くの人に知られたら、どうしようもないけど、今のところは、その研究機関のトップを含めた少数しか知らないと思うし」

僕が存在はとても貴重だったのか、研究機関のトップが直々に僕のことを調べようとした。

僕の言葉に、華音は納得いくようないかないような無表情を浮かべた後、迷惑を掛けないようにと思ったのか、わかりました、とだけ言った。

なんか従順な華音は貴重だね

とかなんとか思いながら、竜也達の方に目を向ける。

竜也は華音の僕への態度に、少しムカついているように見える。

いやいや、こんなの珍しいくらいなんだから！

阪野さんは僕の話聞いて、未知のことに、どう対応していいのかわからないようだった。

萌葱達は、先程のまま。

そんな表情しないで欲しいのに……

竜也の視線が痛いので、僕は話をクラスメイト中心に進めた。

「というわけで、出来る限り、というか絶対能力について話さないでほしいんだ」

「わかったよ」

「もちろんです！」

無然とした竜也と拳を胸の前に持ってきた阪野さんからほぼ同時に返事をもらう。

生物的に両極端にいなそうな2人だなあ

「私からもお願い致します。陸奥くん、阪野さん」

華音が僕の横で、竜也たちに向けてお辞儀をする。

「いやあ、会長の頼みなら絶対聞きますから、安心してください！」

「私の頼み……？」

華音に言われ、竜也はデレッと返した。

華音の頼みというよりは僕の頼みなんだけど、聞いてくれるなら、なんでもいい。

「あの、羽間君。それで能力は……？」

ふいに阪野さんが言った。

「あー、忘れてた。見せた方がいい？」

「どっちでもいいですけど、これからチームを組むなら見ときたいです」

ふむ。確かにそうかも。

しかし阪野さんから、チームを組むって言い出したのは、驚きだ。2週間程度の付き合いだけど、少し信頼してくれているのかもしれない。

だったら僕も信頼しなくちゃ……

僕は多量の魔力を必要とするので魔術を受けなければならない。
直接の魔術の譲渡でも構わないけど、魔術を分解するところも見て
もらった方がいいだろう

だから華音に頼もうと

「華音」

とだけ呼ぶと、華音はそれだけで理解したように

「はい」

と返す。

ここからが本番だ

「みなさん、念のため少しだけ、離れていてもらえますか？」
危険が及ばないように華音は皆を遠ざけると右手に魔術を展開させる。

簡単で単純な、火炎魔術だ。

誰でも、というか、魔力をもつものは誰でも、僕以外は、難なくこなせる基礎的な魔術だ。

優遇学園で使えない生徒など当然他にはいないだろう。

火の玉が華音の手のひらを包み込んでいる。

火は酸素を吸い、魔力を消費し、ひたすら燃え上がる。

華音との距離は2mほどなので、全力なんて出さなくとも、一気に

魔術を分解できるところだ。

一気に能力を展開させる。

もちろん、分解と吸収の能力だ。

範囲が華音のところまでたどり着くと、途端に火は水を掛けられたように消えた。

その状況に、竜也と阪野さんの顔に驚愕が浮かぶのが視界に映る。しかしこれで終わらない。

能力の本領はここからだ。

使いたくないという気持ちは今でもあるが、ここで甘えていても仕方がない。

信頼してくれる以上、こちらにもそれに値する信頼で返さなければならぬ。

出来る限り無心になって

——僕は能力を発動する。

その瞬間、僕は異質へと変化する。

ここにいるとつい錯覚してしまうが、世界が止まったのではなく、僕が勝手に世界の枠組みを外れて動いているだけなのだろう。

世界から疎外された感覚。

華音の発動した魔術の級が低いからそこまでこの空間は保たないだろう。

なんとなく体内の魔力量がわかる身体が、怖くて便利だ。

……嫌気がさす。

しかしとりあえず能力の証明は必要なので、悪戯で、竜也達の後ろに立つ。

このままここに立っていても、使ったとは誰も思わないし……

到達して、僕は竜也の肩に手を置く。

そこで能力を解除した。

途端に色彩が戻るような

今まで色付けされていなかった、モノクロの絵に、色を塗りたくったような

そんな感覚が僕の手のひらに、僕の眼の中に入り込んできた。

「……………」

竜也たちが僕の姿を探している。

肩に置かれた手には気付いてないみたいだ。

目の前から突然消えたので、それで驚いているのもわかる。

「ここだよ!」

「うわっ!」

悪戯で脅かすと竜也はビックリして叫んだ。

そして恐る恐る後ろを見ると

「……なんだ刻季か」

「なんだってなに!？」

なんでそっちでは驚かないの!？

「……って刻季!？」

「驚くの遅いよ!」

反応がワンテンポ予想より遅い!

「羽間君！? どうしてそこに？」

阪野さんは、しつかりと驚いてくれている。

それに若干の喜びを感じるが、それは表に出さずに

「後ろに回り込んでしまった……テヘッ」

表に出ちゃった。

「てへっ……じゃねえよ！ ビックリしただろうが！」

「ごめん、ごめん。こうでもしないと、わかんないと思ったからさ」
竜也には悪いけど、少し楽しかった。

.....

そして僕は元の位置——華音の隣に戻ると

「……これが、僕の力だよ」

使ったことによる嫌悪感がどっと押し寄せてくる。

これにはあまり慣れない。慣れたくもないけど

「止まったって実感は無いけど、でも信じるしかねえな」

それはそうだろう。

時間が止まったというより、異質な空間で僕が勝手に動いていただけだから。

「受け入れられないのも、よくわかるけど、まあホントなんだよね」
「わかってるよ。別に受け入れられないわけじゃなくて、実感がないだけなんだ」

「そっか……」

受け入れられないわけじゃないと聞いて、ちよつとだけやった甲斐があった。

「阪野さんは？」

未だにおどおどが収まらない阪野さんに、落ち着くような口調を出来る限り装って聞いた。

「だ、大丈夫です！」

大丈夫って何がだろう？

今のどこか挙動不審な態度のことだろうか

「凄い能力ですね」

「そんなことないよ。別にこれで得をしたことなんて、そうそうないからね」

「それでも凄いですよ」

「そうですよ、刻季様」

華音が阪野さんに追従するように言ってきた。

「華音まで……」

「私もそう思います。……こう何度も拝見出来て感激です」

「やめてよ……」

本気で嫌だ。

出来れば使いたくないのに、嬉しそうな顔をしてそんなこと言わないで……

そして華音は、恍惚とした無表情そのままに、相変わらずの威力の爆弾をおとしてくださりやがりました。

「ところで刻季様。止まっている間に、キスでもしていただけたか？」

「……へ？」

ナニイッテルノ？

途端に部屋の温度が上がる……ような感覚を感じる。

熱いほうを見てみると、竜也と……萌葱まで、熱を発していた。

竜也はわかるけど、……なんで萌葱まで？

「そ、そ、そんなことするわけないじゃんっ！」

「「刻季——！！！」」

竜也と萌葱の声が重なる。

本気で逃げたいくらいの怖さだ。

主に萌葱から

「お前そんなことを、会長にしたのか！？ 羨ま……いや、妬ま……

……いや、酷いぞ！！！」

「あんたね！ ひとにはやっていいことと悪いことがあるのよ！
あんたのやったのは悪いこと！！！」

「誤解だから！ そんなこと少しも考えてない」

華音の話を信じすぎじゃない！？

竜也はまだしも、萌葱まで信じないのはショックだよ！

「「本当だろうね」」

2人が鬼気迫るように僕に聞いてくる。

……なんでこんな目にあってるの？

理不尽にもほどがある。

「本当だから！ そんなことするはずないじゃん！」

と弁解すると、萌葱たちは急に醒めたようになった。

「まあ、そうだよな」

「まあ、そうよね」

.....

……信じてくれて大変喜ばしいです。

無然とした気持ちになるが、危機が去ったのでよしとしよう。

そして華音はそれでも無表情だった。

これだけひっかきまわしても、どこ吹く風やらといった様子で、見つめているだけだった。

……と思いきや

「してくださらなかったんですか……？」

と悲しそうな声を出して華音は言った。

なんで残念そうなのか

「しないよ！」

まあ否定しかない。

実際してないし、しようとも思っていないね。

「そんな……」

悲痛な面持ちに変わる無表情な女性。

見ているこっちまで悲しくなってくるオマケ付きだった。

これ以上相手にすると大変なので、マシな竜也達のほうを見ると竜也が再び切り出した。

「この能力使えば、いろんなところ覗き放題だな」

「変態だ！」

変態がいる！

「変態とは失礼だな！ 別に俺は会長以外興味ねえよ！」
と思わず告白してしまっているが

「ごめんなさい。私は刻季様以外興味ないので……」

当然フラれる。

「刻季——！！！」

「何！？」

「お前この野郎……、お前——！！！」

「理不尽だっ」

なんで僕が怒られるのか、わかるけど、わからない。

元凶は華音なのに……

「ですから刻季様……ポツ」

「あたしも、刻季以外興味ないよ！！！」

「なんの話なの！？」

照れている華音に、どこからか、萌葱が対抗心を露わにする。

「まったく、いつも通り大惨事だな」

あまりに騒がしすぎて、呆れたような仁吾の声に気付く者はいなかった。

第23話 空間と住人（後書き）

どうでしたか？

話が進みにくいですが、刻季の心情が詠めてくれると嬉しいです

しかし、話が進まない……

次くらいにあの姉を出したいんですけどね

第24話 クラスメイトの色事（前書き）

タイトルはおなじみ、有っても無くても話にはまったく影響しません。

今回はだいぶ短めです。

前回のメの話といった感じになります。

第24話 クラスメイトの色事

それから僕たちが落ち着いたのは、10分程後のことであつた。
気づけば、昼休みの時間が限りなく限界に迫っていた。

もしかしたら華音ならなんとかしてくれるのかもしれないけど、これ以上クラスメイトから変な目で見られたくないので、僕は話をここで打ち切りにして、生徒会室をしようと華音を含め申し出た。
竜也は少し残念そうな顔をしたが了承した。
もちろん、仁吾や萌葱や阪野さんもだ。

しかし華音は

「少しお待ちください」

と僕たちを止める。

なんだろうか？

さっきまでの僕へのからかい？などをする気持ちは捨て、真剣そのものの態度で僕たちを呼びとめた。

「南雲さん、碓氷くん、陸奥くん、阪野さん。皆様、刻季様の学級内での事をお願い致します」

声と同時に頭を下げて、そしてあげる。

「我が君は魔術こそ使えませんし、能力も自身に制御を掛けてなるべくつかわないようにしています。ですから、実技の試験でも授業でも、なにかと不便なことも多くなるでしょう。それでも刻季様の為に動いていただけないでしょうか？」

口調こそ提案だったが、それは華音の要望でもあるように感じられ

た。

華音の要望でもあり、僕の願望でもある。

こんなこと普通自分で頼まなければいけないし、華音に頼まれなくても、自分でいずれ話すつもりだったけど、僕の為にやってくれていることがわかるので心底嬉しい。

少し滯桜姉みたいだ。

おせっかいだけど嫌ではなく、むしろ嬉しいおせっかい。

そんなことを15年間、いつでもしてくる姉。

それと今回の華音がかぶって見えた。

そして華音の要望に仁吾は

「もちろんっすよ」

とあたかも、自分の仕事を取られたような感じで言った。

萌葱もそんな仁吾と同じ表情をして、あたしが話すつもりだったのに……、と少しだけ不機嫌そうに呟いた。

流石は、この2人だった。

「わ、わたしこそ、よろしく願います」

阪野さんが、僕にむかってお辞儀をしてくる。

「いやいや、僕こそ、よろしく」

出来るだけ、気を使わせないように手を合わせた。

竜也も今までで一番頼もしそうな顔をして……今まで頼もしい顔なんてしたことなかったけど、今回はとても頼もしく見えた……僕と華音を交互に見て

「それが会長の為になるなら乗り気ではありませんがやります」
頼もしく、だるそうな言葉だったけど、竜也の気持ちがあんなとなく

だけどわかった。

華音の為と言いつつも、どこことなく決意が表れているような、そんな感覚……

「……これで会長とより近づけたら………ククッ」

………

………

………

だったらよかったけど、贅沢は言えないよねえ……

下心があるとはいえ、協力があるのとないのとは、大きく違う。竜也の実力はわからないけど、僕としては、心から頼みたいことなので、竜也の下心はきかなかったことにして

「ありがとう、竜也」

「まあいいってことよ！ 俺ら友達だろ？」

「う、うん。そ、そうだね。うん、そうだよね！」

少し釈然としなかったのは言うまでもないことだ。

仁吾と萌葱は堂々と、阪野さんはどこかやはりおどおどして、竜也は嬉しそうに、僕への協力をしてくれると言ってくれた。

2人に関しては入学してから仲良くなったのに、ここまで踏み込んできてくれる。

僕にとっても初めての事だ。

萌葱はそれこそ物心ついた時にはすでに信用している状況に達していたけど、仁吾に関してはここまで早く馴染めなかったし、むしろ

毛嫌いしているくらいがあった。

あの時はここまで仲良くなれるとなんて全く思っていなかったし、なろうと思うことすら嫌だった気がする。

そう思うとホントに、人生は小説より奇なりだよね。うん。

阪野さんは未だに壁を感じざるを得ないけど、仲良くしようとする気はビシビシ感じられるし、竜也は壁どころか、むしろ壁で囲まれた同じ空間に一緒にいるくらい最近は仲良くなってきた。

高等の1年次で、というより入学して2週間足らずで、こんなに信頼し合っているのは、それなりに理想の関係だろう。

僕は巡り合わせに感謝すると同時に、本人たちにも言いつくせない程の感謝をした。

もちろん、今回の機会を与えてくれた華音に対しても含まれている。言いつくせないけど、言葉にしないなんて軽い事は言わない。

だから僕は出来る限り、皆が視界に映るような場所に移動しては振り向き言った。

「みんな、ホントにありがとう。こんな言葉なんかで足りると思えないようなことを言ってくれたし、これからしてもらおうと思うけど、感謝の気持ちだけはずっと忘れないでいるよ。もしみんなが困ったら最優先で助けるから、なんでも言っただけいいよ」

純粹な感謝の気持ちというのは伝えたと恥ずかしいものだったけど、それ以上にお礼をいえて良かったという気持ちの方が、僕の中には強くあった。

僕の言葉に仁吾たちは揃って頼もしい顔を見せ、そしてそれぞれ

「親友なんだから当然だろ」

「刻季にはいつまでもあたしがついてないとダメなんだからっ」

「ぜ、是非、よろしく願います」

「まあ、これもなんかの縁だし、これからよろしくな」

阪野さんは頼もしいけど頼りない、実に器用な表情。

竜也は、今度は下心が見えなかった。

そして華音は

「私から刻季様にお願いすることは、私の為というより、ご自分の為になるようなことを最優先してください」

なんてことを言った。

最近はわりと華音優先のことが多かった気がするけど、結果的には、僕の為になっていることも多かった。

結社のことは、その一つだろう。

これから、長いこと付き合っていきそうなメンバーだった。

華音、仁吾、萌葱は言わずもがな、竜也なんかも、仲良くしていけたら嬉しいし、阪野さんもだ。

僕はその5人に向けて、笑顔を向けた。

すると一人一人の個性が出ている、しかし笑顔を返してくれた。

華音は僕を信頼しきって、仁吾は親友にむけるような、萌葱は過保護な親のような、阪野さんは、やはり恐る恐ると、

そして

竜也は笑顔の華音に見蕩れていた。

どこまでもしまりのない奴だね……

それでも良い奴には変わりはないだろうけど

それから教室に戻るとすぐに開始のベルがなった。

竜也は気持ちの悪い笑みを浮かべて、単体で気持ち悪がられていたが、今は気分が良かったので見ないふりをおいた。

第24話 クラスメイトの色事（後書き）

改めて、短いですね。

姉は次回に繰り越しです

楽しみにしてくださいだった方は、申し訳ありませんが、湊桜は然ると
きに出さないと効果はかなり薄くなるので……（笑）

第25話 無駄な抵抗（前書き）

タイトルを「すみません」にしようかと思いました（笑）
いや（笑）じゃねえよ！

冗談ではなく、結構ガチでこのように載せるか悩みました。
でもプロットの段階でこうしようと決めていたし、もともとUPし
ようとも思っていなかった作品なので、今回は（も）完全に自分の
趣味です。

暖かい目で読んでください……

第25話 無駄な抵抗

これまで日本の話しかなかったが、決して魔術や剣術は日本特有のものではない。

元々欧州から広がったモノが文化や歴史と共に発展したのだ。

文化の側面には、魔術師や宗教徒の争いがあり、歴史の側面に、技術の発展があった。

文化的なわかりやすい例でいえば、日本の仏教はどちらかといえば魔術派に属し、神道は宗教徒に属した。

欧米でも、魔術には文化的側面があるし、日本以上に文化との結びつきが強力だ。

そして歴史的な側面には、やはり戦争だろう。

日本の話だけではないが、政権や政府が何度となく変化していったのは、戦いが裏にあったことだ。

戦争には、魔術師の使う術でもなく、宗教徒の使う術でもない人海戦術が多かった。

魔術師にも宗教徒にも唯一無いといっていい、兵数の優位だ。

魔術師も宗教徒も戦いには、全く参加しなかった。

しかし、政権にはそれなりの興味があった。

それゆえに戦争などという面倒くさく、時間のかかる手を使わずに、政府の有力者を暗殺するなどして自分たちの思い通りにした。

お互いに国家からの報復などもあり、その時こそ言うことをそれなりに聞いているものの、時間が経てばすぐに同じことをした。

その繰り返しという、言ってみれば大したことのない日本の歴史なのだが、他国では少し変わってくる場合もある。

もちろん、日本のような国もいくつかあるが、大抵は魔術師がトップに君臨していて、教徒の弾圧をおこなっていたり、その逆もまた然りだ。

ようするに国家と魔術師が結合していたり、教徒が国家を併呑していたりと様々になっている。

国によっては、魔術しか存在していない国があったりする場合すらある。

未開の地には、呪術的な面が含まれている部族もいたりするので、そういうのがそれに値する。

それらが歴史との結びつき。

他国では、それぞれ各々違う呼ばれ方をしている魔術師と教徒だが、日本でこう呼ばれているのは、魔術は日本が古来より信じてきた魔羅の使う術から派生し、教徒は文字通り、神に捧げる者が多かったからだ。

魔術師の魔術はいうまでもないが、教徒の剣術も、戦争での、刀を振り回していた武士とは大きな違いがある。

もちろん、『武器』の発展が教徒の発展にも繋がっていたのは否定しないが、国家の軍との違いはそれではない。

ようするに魔力だ。

魔術師が魔術を使うべく、魔力を使用しているが、教徒も魔術と同じで魔力を使う。

魔術師が、『空気』や『物体』などを媒体にするように、教徒は、『武器』を媒体に魔力を使用し、剣術を行使する。

それは魔術と同じく、形状変化や付加効果など、多岐にもわたる。元が同じ魔力を使っているのも、それは当然のことでもある。

魔力を使う魔術、魔力を使う剣術。

それらを合わせて、この世界では『魔法』と呼ぶ。
魔力を行使する『方法』で『技法』で『違法』。

それがこの世界の『魔法』。

神にあらがう力。

あらがえる力。

閑話休題

そんな力を持つのは、冒頭に戻るが、日本特有というわけでない。
日本の魔法との結びつきは期間的な立場から見れば、世界に比べて
浅いものだといえる。

それは長年使える人口が一向に増えなかったというのもその理由の
一つだが、それ以上に研究というものをしてることがあまりな
かったからだ。

魔法はそこにそうある、だから存在しているのだ。

という何ともいい難い考え方が日本の中に長年横行していたために、
研究しようと気が起こる前に、研究とはなんだ？という考えで国内
が埋まっていたのだ。

国家はしきりに研究したがっていたが、魔術師や宗教徒がそのよう
なことを許すわけもなく、そのままの停滞状態であった。

打開策が約50年前にようやく取れる状況に至った。

魔・宗戦争の終結、それによる国家への魔・宗帰属がそれを行える
ようにした。

それを最初に行ったのが国家魔法研究機関だ。

文字通り国家による魔法の研究機関なのだが、そこから二つに分岐

し、今はより専門的に魔術や剣術を研究している、国家魔術研究機関と国家剣術研究機関がとなっている。

双方ともに国立で、そこに勤めているものは総じて、超エリート級
の存在であり、そこから学院の教授になる者、国家お抱えの者、そ
してうまくいけば魔術・教徒結社の一員として含まれることもあり
得るのだ。

短期間でも在籍していれば、その後の人生に拍がつくのである。

これだけ優遇される条件があるならば、誰しもが望んでその研究機
関に入りたいとなるだろう。

それこそ、何千倍という倍率を勝たなければいけないような機関だ。
きつと刻季の通う優遇学園にも、卒業後にここへ就職したいとい
う者は多いだろう。

そんな国立研究機関。

何故こんな話を長々としているのかは、刻季が、そして刻季に身近
な存在がやはり関係しているからに他ならない。

ここ最近すっかり、自室が自分の部屋ではないのか、と勘違いする
ほど部屋に帰ると迎える人（主に華音）がいたけど、今日に限って
は見当たらなかった。

今日は華音＋クラスメイトの会談の後、授業を受けて帰れるという
恐ろしい平和ぶりだった。

華音と会うまではそれが普通だったのに、それを平和と捉えるかは
さておき、静かなことは嫌うどころか、むしろ歓迎いたします的な

状態なので、僕はそれを享受していた。

寮内で食事を取った後、今日も仁吾の部屋で、そして今日は彼と竜也の3人でひたすら喋っていた。

珍しく竜也が来たと思ったら、話の内容は8割型華音に絞られ、「天原会長が」という切りだしを何回も聞いて、少しだけ鬱になった。

仁吾と僕が何度も話を変えようと、他の話を交えているのだけど、結局「天原会長が」と言いだすので、最終的に2人でただ聞いているだけの竜也の独壇場だった。

機嫌が悪かった今朝が嘘のようで、華音との繋がりが出来て、すっかり機嫌を直したどころか、上機嫌だった。

さすが、非公式ながらファンクラブに所属しているだけはあるね……ファンクラブでも珍しい華音の知り合いにレベルアップした竜也だった。

その後、僕は結局今日も疲れて自室にもどった。

部屋の電気を寝るために消すと、昨日、一昨日に比べ、穏やかに過ぎていた今日に終わりを告げるように、空から月明かりが窓から射し込んでいた。

月はもの寂しく、そして孤高の狼のように独りで闇の中に潜み、しかし隠しきれない輝きを放っていた。

ときどき雲がかかり、その隙間から放つ光も幻想的なものにしか見えない。

それを見ていると、ここが異世界なのかと勘違いしてしまうほど、浮世離れしているような情景だ。

月から兎が牛車を牽いて焦燥感を運んで来そうだった。

そんなことを想いながら、僕はベッドに入った。

まだ季節が変わったばかりだから、布団をしっかりとかける。いつもより狭く感じるのは、きっと焦燥感のせいだろう。

普通広く感じるものだけれど、こんなこともあるよね。うん。ここ数日で色々あって疲れてたんだろう。

疲れからかすぐにウトウトとし始め、眠りの前兆がやってくる。たまらなく睡眠欲に侵され、それに抗えず、抗おうとも思えない。

その時、

僕の右手が何かに誘われ、連れ去られるように、僕のことを無視して前方へ向かった。

その先には、なにやら柔らかいモノ。

一度掴むと、ふにゃんと揺れた。

「んっ……」

掴んだ時の音だろうか？

柔らかいものを握ると、たまに変な音を出すので、それだろう。

なにか柔らかいモノは握るたびに形を変え、そのたびに唸るような

「うんっ……」って音が鳴る。

どこか色っぽい音だった。

僕は眠いにも関わらず、それを握っていた気持ちが無駄にも逃げていかず、いつまでもその欲求に身を任せて、ウトウトしながら何度も、それをにぎにぎしていた。

何度も何度も……

「んっ……」

何度も何度も……

「あっ、んんっ……」

何度も何度も……

「いっ……、あんっ……」

「んっ」

夢の中で突然唇がなにかにふさがれる。

さきほどの柔らかいモノに勝るとも劣らない柔らかさだった。

一度ふさがれたと思いきや、僕の唇を貪るように吸われる。

そして、吸われたことによって出来た僕の上唇と下唇の間に、湿ったねっとりとしたものが侵入してくる。

僕はそれに抵抗するように、舌を動かし、食い止めようとする。

しかし抵抗むなしく、舌は絡め取られ、もう自分の意志では動けなくなるほどだった。

夢から逃げるように、僕は目に力を込めて、必死で開ける。

暗闇の中で、目を慣らすように、眼球をあちこちに動かす。

その間も、夢で舌を蹂躪されていた。

夢……、だよね……？

目が慣れてくると、月明かりが唯一の部屋にある光だということがわかった。

窓から射しこむ光が僕に見せてくれたモノは二つ。

一つは時計の時刻は眠り始めてからそこまで進んでいなかったこと。

もう一つは僕の目の前に誰かがいて、それが唇を食するようにしていたことだった。

逆光で見えにくい。

虚ろな目で、それでもしつかりと僕はその人物を定めるために見つめる。

ちなみに、いまだ唇は解放されていない。

口内のレジスタンスが必死に抵抗を見せているが、あえなく撃沈し、されるがままになっている。

ようやく、判定できるような力が目に戻ってくる。

ピントがあうように、見えてきた。

その人物は、華音でも、もちろん萌葱でもなかった。

だからといって腐り姫が好きそうな、竜也でも仁吾でもない。

——ここ（部屋）にくる人物といったら、この4人しか思い浮かばないが、僕の予想を外して、僕の一番身近な存在だった。

最近知り合った華音でもない。

生まれから、育ちまで、ほぼ一緒に過ごした萌葱でもない。

その存在は、僕の生まれから育ちまで全てを見てきて、その上で一緒に過ごしてきた存在だった。

——羽間滯桜

正真正銘、僕と同じ名字の、血のつながった姉である。

姉が僕の唇を貪っていた。

第25話 無駄な抵抗（後書き）

滯桜やっちゃってますね！

セリフが一つもない（笑）

いやホントすいませんでした（笑）

第26話 赤髪美姉（前書き）

お久しぶりです。

書かないとは言っていたんですけど、なんか時間できて書いたら、全然書けなくなっていました。

なんかもう前にもまして酷いですね。

タイトルはなんとなく四字熟語っぽいっていうのと赤い髪と赤くな
った姉ということです。

第26話 赤髪美姉

羽間 滢桜

中等時、魔術は実技・座学ともに主席で卒業。
刻季の4歳年上。

滢桜曰く「姉さん女房だね！」

.....

それには苦笑いしか返せなかった刻季だが、彼はそんな姉を尊敬し、
そして好意をもっている。

欠点として、度を超えるブラコンという点があるのは、刻季もち
ろん知っているが、それすらも嬉しく感じられるほど刻季もシスコ
ンなので、まあ問題はない。

問題は無い

きつと.....

問題大アリだよっ！

度を超えた姉上様は、寝ぼけ眼で見つめた姉の姿は、どうみても姉
弟ですることの壁から越えた行為をしていた。

濡桜姉となんか唇合わせちゃってますけどっ？
唇どころか舌まで絡ませちゃってますけどっ？

濡桜姉の唾液がこちらに絶え間なく送られ、こちらの唾液もひたすら分泌を続け彼女に送られる。

送られた液体は、とても甘美な香りをしていて、それだけで酔いそうになってきた。

行為に耽る濡桜姉を見て、僕は自覚する。

これまずいことなんじゃないかな？

と

そう思考が至ると同時に、僕は口が塞がれている状態だったので「むーっ！ むうーっ！」

と声にならない声をあげる。

こんなの軽く脅威でしかないよ！

濡桜姉は僕の声に気付いたように唇を離した。

と思ったら腕をがっしりと掴んで

「トーくうん。トーくうん！」

酔いどれ犬のように僕の名前を呼びながら、また唇を貪り始める。

月明かりが僕たちの唇たちの間を照らす。

それもやはり幻想的なモノだった。

見たことのない世界に住んでいる気分陥りそうになる。

……とは思ったもののこれはまずいよ。

実の姉が寝ている僕を押し倒して？それでキスまでしている。

父さんと母さんに顔向けが出来ない……
ていうか世間様に顔向けが出来ない……
これはホントにまずい。

「むー！ むー！」

これしか抵抗する方法がないので、ひたすらその意を表す。
それでも姉は唇を離すことなく、もちろん腕を離すこともなく行為に耽る。

逃げ場がない！

魔術でも使っているのか澪桜姉の力が強く、僕に逃げる隙を与えない。

腕を掴まれたまま、身体が全く動かせない。

弟にキスをするために魔術を使う姉がそこにいた。

たぶん本能的に使っているんだろうけど……

ん？

魔術？

魔術ならば

これが魔術なら、逃げる隙というものがあるよね！

この為に使うのは、嫌な気分になるが、使わなければ逃げる事が出来ない。

僕的能力

知っているだけでも、この能力は魔術を分解し、その魔力を吸収出来る。

それを使えば、澪桜姉を離すことも出来るはずだ。

能力のことは澪桜姉も知っている。

ひよっとしたら僕よりも知っている。

だからここで使うのは、良策どころか得策だろう。

気付かれても、なんの損失もなければ、これによる被害もない。…
…だろう。

そう思い立ったら、それ以外が解決策にらないと思い、僕は能力を範囲せまめで、発動する。

ちょうど僕と澪桜姉を包むくらいの範囲にしている。

魔術学校はどこもかしこも、魔術が張り巡らされているため、能力を使うとうっかりと何かを壊してしまう可能性もあるのだ。

中等の時に、競技場の魔術を解除してしまったこともあるから、それ以来注意している。

あれは、萌葱が庇ってくれなければ、退学していたかもしれない……

と、能力に対するトラウマを語れば夜が明けてしまう。

それまで、姉にキスされ続けるのは、体力的にも精神的にも限界にきたす可能性がある。

いや、こんなことされるのは、数分が限界だ。

あまりにも濃厚で甘美だ。

僕をどこまでも酔わせる。

姉なのに……。

能力を発動すると、澪桜姉の身体が少し軽く感じてきた。

澪桜姉も不審に思い始めたのか、唇は離さないが、舌を動かすのを止めた。唇は離さないけどっ！

……どれだけ執着しているのかわからないが、それでも、もう腕を動かせるくらいになっている。

片手で押えられていた、僕の両手をずらし、漣桜姉の手から放される。それでも漣桜姉は唇を離さない。

.....

もう怖いっ！

ここまできて離さない執念って何！？

そりゃあ僕だって、お姉ちゃんとチューするのが、嬉しいかどうかと言われたら、……嬉しいけど、それはもっとチュッって感じのソフトキスで、こんな腰が抜けちゃうようなのじゃないよ！
べ、別に腰抜けてないけどさっ

身体が重く、一刻も早く離れたかったので、艶やかに光る唇ごと、漣桜姉の肩を掴み一気に引き離れた。

くっついていた時は、そこまで見えなかったが、月明かりに照らされる姉は、残念そうな顔を浮かべながらも、それでも綺麗だった。

おっとりした表情だがはつきりした目鼻立ち、腰まで伸びた赤髪に、成熟している身体。

どこをとっても、漣桜姉は可愛らしく、美しかった。

華音・萌葱という、身近にもとんでもない美少女、または美女がいるけど、それに引けを取ることもなく、勝るとも劣らないくらい美人だ。

鼻肩目なのかもしれないが、誰よりも自慢の姉で、いつまでも自慢の姉。

大人な女性の部類に位置する立場の人間で、それなりに責任のある

仕事もしている。

そんな姉がキスを止めたらとても残念そうな顔をしている。

「トー君……、どおして？」

「どおして？　　ってそっちこそなんでかな……？」

滢桜姉が、部屋へ侵入してきて、その上唇を貪るように合わせていた理由が聞きたい。

「質問に質問で返さないで！」

「えっ……」

その声に少しビックリする。

それでも追撃は止まらなかった。

「どおしてお姉ちゃんとのキスを止めたの？　　それに能力を使ってまで」

「滢桜姉こそなんで……」

「だから質問に答えて」

僕の声は切られ、有無を言わさない口調で言ってくる滢桜姉。

さて、どう答えるべきか……

キスされているのが嫌だったと答えるのは言語道断も良いところだ。個人的にされるのが嫌なわけでもないし（こんなに深いのはちよつと……だけど）、第一こんな答えをしたら、滢桜姉がどうなるかしれたものじゃない。

ここは無難なところにいくしかない。

「いや、あのさ、息が少し苦しくなっちゃったんだよね」

これだ。これ以上の答えは無い気がする。

——回避完了

すると澪桜姉はニンマリと表情を穏やかに戻した。

「そっかぁ……、じゃあ今度は息継ぎしながらしよっか」

……………

——回避失敗

いや、まだまだ取り戻せるはず。

……と思いきや、澪桜姉は僕めがけて、僕の唇めがけて、突進してきた。

そのまま、またされるがままに、舌を隅々まで入れられましたとき。

どれだけ時間が経ったのか、わからない。

幸い、腕は抑えられていなかったので、ズボンにのびる手からは守ることが出来た。

それでも満足したのか、ようやくキスから僕を解放してくれた姉がベッドの僕の横に座る。

妙に色っぽい座り方で、ときどき僕の膝のあたりを指でこする。

誘われているのかな………ていうか腰がもたない……。

姉に××^{ビー}を誘われる弟がそこにいた。

でもひとまずキスだけで満足してくれたみたいだ。

それにしても澪桜姉とチューするのも久しぶりだなあ。

舌をいれるまで、は無かったけど、実家に住んでいる時は毎朝、毎晩一回ずつしてたしね。

この話を萌葱に知られた時は、軽く……いや、本気でひかれたけど、『澪桜さん、だもんね……』とよくわからないことを言われ、すぐ

さま納得された。

それに対し、こっちが納得出来なかった。

なんで、お姉ちゃんとチュウすることでひかれなきゃいけないの？

澪桜姉は『お姉ちゃんと弟はキスして（家族）愛を深めていくものだよ』と言っていた。

チューをしたら仲良くなるのは当然だから、それが間違っているとは思えない。

萌葱は、弟もお兄ちゃんもいないからわかんないんだね、とその時は一応納得したけど。

ごめん、
萌葱。

君が正しかったかも……

ズボンにまで、迫ってくる手を見た時、少しそう思ったよ……

ともあれ、今は解放されているので、もう安心だ。

濡桜姉もうっとりした目で、膝を、さすりさすり、としてくるけど、自分も腰が抜けているのか、誘うだけで、自分からなんかし
てきそうにもない。

僕ももう高校生だから、
、
、
なんか、
、
のことはもちろんわかって
いる。

澪桜姉もわかっていることだろう。

それはともかく、なんで湊桜姉がここに来たんだろう。

一応、学園の敷地内で仕事しているみたいだけど、入学以来会ってなかった。

澪桜姉は実家から通えるように、学園の理事会からしっかりパスをもらっているはずだから、帰らないのはおかしい。
もう夜も更け始めている。

19歳の女性がこんな夜遅くに帰って無いことは大変なことだ。

澪桜姉は、それはもう、魔術優遇学園に入れるくらいの実力者なんだけど、不安は不安である。

僕は澪桜姉に事情を訊いてみた。

「なんで、澪桜姉はこんな夜遅くに、僕の部屋にいるの？」

「トー君に会いたかったからだよっ」

「僕もそう言ってもらえて嬉しいけど、なんか用があったからじゃないの？ お父さんとお母さんもきつと心配しているよ」

「ちゃんと、『今日からはトー君の部屋にとまるから安心して』って連絡いれといたから大丈夫」

「えっ……？」

とまる？泊まる？止まる？停まる？留まる？

さてどれなのかな？

予想では、一時的に『停まる』のオッズが高いと思う。

一時停止的な、ね。

第一『泊まる』だったら大変だ。

僕の両親は、僕の入学を機に、澪桜姉のブラコンの解消の為に色々画策しているからだ。

例えば、

澪桜姉からの電話には、出来る限り出るな、とか

澪桜姉からのメールには、出来る限り返すな、とか

もし、寮に来たら居留守を使え、とか

自分の身体は自分で守れ、などなど
実の姉では有り得ないようなことまで、対象になっている。

同じ結社に入ることが決まったので、連絡を取ることは最低限必要なことだから、約束はいきなり破ったんだけど、それ以外は大丈夫。と思っていたら、ダメでした。

寮どころか、自室に知らない内に入ってきてたし、身を守るどころか溺れかけていた。

上記のは、別に関僕に対しての強制的な制約ではないけど、でも僕が出来る限り気を利かせて守らせなければいけない約束だ。

まあ無理だと、最初からある程度わかってたけど……

それはもういい。

しちゃったことは戻することも出来ないから、今後の事を考えよう。

さっき澪桜姉が言った『とまる』について聞かなければ、まだわからない。

ここは男子寮なのも澪桜姉は知っているはずだから、まさか『泊まる』なんてことはないだろう。

万が一バレたら結構まずい気がする。

「姉さん、今日は何時頃帰るの？」

とりあえず角の立たない聞き方をする。

それにほんわか、色っぽく返す澪桜姉。

「何言ってるのかな？ トー君は。『泊まる』ってさっきいったばかりでしょ？」

「で、ですよね……」

「うんっ！」

嬉しそうに頷く濔桜姉。

わかっていたよ、それ以外有り得ないことを、そしてそれに抗えないことを。

僕だってお姉ちゃんとお泊りしたいもん！

大好きなお姉ちゃんとお泊りするの、のどこがイケナイことなのかな？

お父さん、お母さん。

今まで一緒に暮らしてきたんだし、僕はお姉ちゃんに、お姉ちゃんは僕にベツタリだった。

それが入学と同時に離れなければいけなくなって、僕も悲しかったし、お姉ちゃんは号泣していた。

だからたまにはいいだろう。

たまには……

「今日からお世話になります」

どこか赤い吐息を吐きながら、お姉ちゃんが艶っぽく言った。

今日から……？

.....

.....

.....

それは僕も少し予想外っ

第26話 赤髪美姉（後書き）

刻季シスコンだなあと思う今日この頃……

話も進まねえなあとも思う今日この頃……

第27話 ♀（前書き）

海外の話もちゃんと書きたいです。
優遇学園の留学生とかね。

日本の内戦と海外情勢

そんなのが書くことが出来ればいいです。

それにしても滯桜さん書くと楽しいけど大変です。
でも滯桜さん好評だと思うので頑張ります。

……好評だよね？

第27話 ♀

世界の中で日本の魔術界は十指には確実に属しているといえる。

魔術や剣術が確立してからというもの、世界中ではかなり争いがあった。

魔術師と宗教徒の数だけ戦争があったといっても過言ではないほどだ。

それでも、約百年前まで大きな戦争になることはほとんどなかった。日本のような島国ならともかく、大陸内では国家間の戦争が当然のようにあった。

それは国家の政府が動かして起きる戦争はもちろん、水面下では魔術師と宗教徒が小競り合いをしていた。

例えば、魔術発祥の地とされるフランスでの内戦は魔術師と宗教徒の戦いだったとされるし、ロシア国家がロシア全域を完全に（魔術師と宗教徒も含め）統治するに至ったことも、日本国内を国家が治めるということになったのと近い魔術師と宗教徒のいざこざが原因だ。

イギリスのフランスからの独立も発端は魔術師と宗教徒の戦争があり、アメリカの独立も当然背景にはそれがある。

だが、大きな戦争というのは人類の歴史にはなかった。

それが崩れたのが百年前のことである。

——剣魔大戦勃発

それを日本では魔術や剣術が広まる前、一般的には世界大戦と呼ばれた。

当時でも魔術最強国家であったイギリスと、剣術発祥の地であり、剣術最強国家の中国との戦いが世界に広がり、大戦となった。

主要な国家では、中立を示していたロシア以外では、全ての国の魔術師と宗教徒が参戦したと言っても良いほど、大規模な戦争だった。ヨーロッパの国はほとんど魔術サイドに属し、アジア諸国は大抵剣術サイドに属した。

日本は魔術師が参戦することはなかったが宗教徒は軒並み参戦した。世界では異例のアメリカはユーラシア覇権の為に国家として参戦することになった。

そこまで広がった戦争
結果は決着つかず

その後、ロシアのモスクワで平和条約が為され、戦争は曖昧な形で終わった。

現在は一応ではあるが均衡を保っているといえるが、何かの節にそれが崩れることはいくらでも考えられる。

大戦以降、アメリカは世界最強の名をほしいままにし、今もユーラシアに目を光らせている。
事実上世界トップの国だ。

それでも魔術研究に関しては、日本はアメリカに引けを取らない。現在魔術界トップの国であるイギリス、それに発祥のフランスの次に、魔術研究は進んでいる。

日本は古来より地形的に封鎖的な面があったので、日本独自に魔術も剣術も進歩したのだ。

それが世界とも一線を描くことになった。

その日本、の中でも研究の最先端に進むのが、東京都内、もつといえは魔術優遇第三区の中にある『第三区日本魔術研究機構』だ。

そこでは世界最新鋭の研究はもちろん、古来より日本の血筋に纏う魔術である血系魔術の研究も行っている。

日本魔術と名は付いているが、決して日本の魔術だけでなく海外の魔術に関しても、国内では一番研究が進んでいる。

研究が進んだところで、新しい魔術でも発見したり発明しなければ、魔術の実力は上がらないが……

それでも機構で研究員を務めるというのは大変名誉なことであり、いくら優遇学園を卒業したからと言ってできることでも、家柄がいから出来ることでもない。

日本、いや世界でもトップレベルに位置する魔術の学がなければそこには配属はされない。

第六区間全てに日本魔術研究機構があるが、その中で最も研究が進んでいる第三区の機構は、それこそ針の穴のように通るのが難しいところなのだ。

簡単に言うと

南雲萌葱は、そこには勤めるに至らない。

魔術的なセンスも同年代でずば抜けており、家柄も師団家というところで文句なくいい。

それでも、現在の時点では、足りない。全く足りない。

研究に必要なのは、学術的な面はもちろん。

発見に愛されていることが大事だ。

極端な話、今までやってきた研究を今現在やってもほとんど意味が

ないということだ。

もちろん、過去の研究を再研究したことにより、見つかることもあるのかもしれない。

現に魔術や剣術というモノが世界に流布されて、再研究が必要になった例はいくつもある。

しかし、それは新発見には勝らない。

それに愛されるということは、研究者にとっての必需であり、名誉なのだ。

萌葱にはそれがない。

何故なら師団だからだ。

結局のところ、師団という良家に生まれると、良くも悪くも縛りがある。

それは血系魔術しかり、しがらみもだ。

継承魔術は古い家では血系魔術と呼ばれもする。

古い家は、古いモノから逃げられない。

それゆえに現状に甘え、耐えるしかない。

だから萌葱はそうはいかない。

萌葱の性格的な面からみても、革新という言葉があまり似合わないのは、わかることだろう。

師団の家に生まれ、師団の家で育つ現在。

それは幸せなことであり、同時に不幸なことでもあるのかもしれない。

それに対し、羽間澪桜。

澪桜は裏切り者の一家とされる『羽間』の一員で、血筋から見ても

革新的な存在だ。

弟にそれがあるのかと言われれば、頷くことはままならないが、漑桜自身は色濃く『羽間』の血を受け継いでいる。

それは血系魔術が漑桜に出ているということであるだろう。

『羽間』の革命に参加したわけでもないし、それがあつた時産まれではいなかったが、やはり血は血だろう。

古い家は、古いモノから逃げられない。

それは、性格的な面からみても、そうなのかもしれない。

『羽間』の血を色濃く受け継いだ漑桜。

その革新的な漑桜。

刻季が現在研究対象とされていないのは、彼女のおかげだ。

何故なら彼女は『第三区日本魔術研究機構』の研究員だからである。

刻季への研究志願が多発してきたころ、ちょうど刻季は14歳だった。漑桜は18歳。

刻季はその時、中等に通っており、漑桜は高等に通っていた。

優遇学園は魔術的な実力が優れていたり、魔力値が高い者に推薦が来るが、漑桜の通っていた高等学園は魔術の学力的に高い者が推薦で入学していた。

漑桜は入学する前、優遇学園と両方から推薦が来ていたが、国家からの志望により、優遇学園を蹴るはめになった。

だが、漑桜としてはどちらでもよかったらしく、そのまま学園でみるみる成績を伸ばしていった。

その時すでに、研究者の中でも天才と呼ばれていた漑桜は卒業後には家に戻り刻季の世話をするか、刻季のお世話がてら、家の近所の学院に通い学力を伸ばすか迷っていた。もちろん漑桜は刻季のお世

話中中心に考えている。

その指針を崩す羽目になったのが、研究者達の欲求である。

濤桜は高等在籍中に第三区の機構から研究者としての志願が来ていた。

来た時は、刻季と少しでも一緒に居たいからと、かなりの倍率を誇るものだったが、あっさり断った。

しかし、その時から、急激に刻季への研究欲が日本中の研究者達から向けられた。

刻季はもちろん断ったが、たびたび強引にさらわれかけた。

そのたびに、刻季は能力を使ったり、濤桜や萌葱から守ってもらうことになった。

それが最高潮に激化してきた頃

濤桜はある決断をした。

それは、機構の研究者となることだ。

機構の研究者となり、刻季への研究を機構が管理するとすれば研究者達の欲は治まり、刻季への欲求の熱意けんきゅうよくが減ると思ったのだ。

結果濤桜の狙いはドンピシャであたり、刻季への行為もほとんどなくなつた。

稀に以前のようなこともあるが、それでも自力でねじ伏せられるようなものだった。

機構は第六区全てにあるが、機構が研究するといえば、それは最高の結果がもたらされるし、当時に他の研究機関が手出しできなくなるということの表れでもある。

裏側の非合法的な研究機関はともかく、表立って研究している機関は、これで刻季に手出しが出来なくなつた。

姉のおかげで刻季は守られたのだ。

そうして現在も機構に勤めている。

昨日も、もちろん機構で研究作業をしていたが、刻季との電話の後、まるで仕事にならなく。

その上、同僚の男性共は憧れていたため少しショックだった。

男がいるのか……と

それは弟。

それが羽間濔桜という姉おとめなのだ。

常に刻季の近くが調子よく、刻季のために生きているといっても過言ではない。

だから機構で泣こうが、プロポーズ(?)をされてデレデレしているところを見られようが、濔桜にとっては問題ではない。

もっといえば、機構の男はどうでもいいそうだ。

きっと道端を這うダンゴむし程度にしか見てないのだろう。

たびたび、異性からのお誘いがあるが、全てポイ捨てするかの如く断り、断られた男は撃沈しているが、同性からの誘いにはある程度のっているので、機構ではうまくやれているといってもいいのだろう。……たぶん。

今日もお誘いがあったが、刻季のところに行くために蹴散らした。相手が弟だと知った同僚はどんな顔をしていたのだろうか。

『難攻不落の城』フロンという渾名が復活する日も近いのかもしれない。それが濔桜にとって、これ以上ない誉れだということが救いようのないところだ。

まことにどうしようもないあねである。

『今日からお世話になります』
そう言ったの？

実家から勤務先に通っている澪桜姉は確かにここから通えば近いが、
それでお父さんとお母さんが許すのかな？
それとも許されなくても来ているのかな？
きつと後者だろう。

お母さんはともかくお父さんが許すはずがない。

「姉さん。お父さん達にはちゃんと連絡した？」

「連絡したよ？」

「なんてかな？」

「『トー君のところにこれから住む』って」

「そ、そーなんだあ……アハハ……。……お父さん、それ聞いてな
んだって？」

そう訊くと澪桜姉は表情を幾分か凛々し耳元に手を持ってきた。

「『バカかっ！ そんなの許すわ……。ガチャ』だって」

「……それは、どうなのかな？」

「『許すわ』って言うてるから大丈夫だよっ、トー君！」

それはきつと『許すわけない』と言いたかったのだろう。

お父さんに同情してしまう。

僕の表情を見て、先手を取るかの如く澪桜姉は畏まり三つ指ついて

「これからよろしく願います。同棲は初めての経験なので、至らないこともあるかもしれないけど、姉弟^{ふうふ}仲良くやっていけたらいいと思います。今後は心身共にお世話していくから、お姉ちゃん初めてだけどたぶん良い気持ちになれると思うよ！」

.....

ツツコミどころが多すぎる……

姉弟って書いて夫婦と読むんだっけ？
それは知らない用法だねっ。

.....

しかし先手を取られた形になっているのでそんなこと強く言えない。
姉弟で住むことが同棲、とか
心身共にお世話する、とか
お姉ちゃん初めて、とか

一つも聞いてないっ！

とは言わない。

というか言えない状態だった。
要するに呆れていたのだ。

それもものすごく。

体中の至るところから呆気が溢れてきている。

ようやく出た言葉が

「ここ男子寮だよ？」

と思い出したように零れた。

そう。一泊くらいなら隠せるが、ずっとここに住むとなると話は別だ。

僕は今日だけなら濤桜姉と過ごしたいのかも思っていたけど、一緒に住むのはちよつと厳しい気がする。

というか無理ですっ。

入りたい物好きなどいないだろうけど、基本的には女子禁制だ。

特例として、というより、特例を作って華音は入ってきたけど、あれは生徒会長の権限を悪用したからだ。

正攻法でもなんでもない。

きつと華音はどれだけ手順を踏んでも無理だとわかっているから権限を使ったのだろう。

それが異例であり、合法的ではお世辞にも言い難い。

結論。

とにかく無理です。

しかし、僕の口について出た言葉を聞いた濤桜姉は首を傾げキョトンとした。

「あれ？ そうなの？ でも姉弟ふいふいなら大丈夫じゃないかな？」

夫婦とは聞こえない聞こえない。あーあー、姉弟姉弟。

「姉弟でも女はダメだよ！」

と僕が言うと、何故かデレっとした顔をし

「女なんて……。早くも俺の女って感じなの？ トー君」

「……………」

「でも姉弟だから当然だよ。あつ、厳密には姉弟じゃなくて婚約者同士？許嫁？かな。……フッフ、許嫁っていい響きだね！ トー君の近くで発するとよりいい言葉に聞こえるよ！ これがトー君効果だねっ」

もう対処法が分からない……。

漣桜姉は言い終えると、トーくうん、トーくうん、と言いながら抱きついてくる。

あー、柔らかいなあ。許嫁の身体は……。うん、これには抗っちゃいけないよね。漣桜姉にも悪し、何より本能に反するもん……。

と堕ちかけたところで思考が復活する。

それじゃ何一つ解決していない。

理性を振り絞り漣桜姉の肩を掴み引き離す。

すると、漣桜姉はとても悲壮した美顔を見せるが、それに気を取られるのは後でも良い。

今はちゃんと理性で行動しなければいけない。

本能にはもう少し眠っていてもらわなきゃ

「漣桜姉、よく聞いて」

と促すと悲しそうな顔をこくりとたてに振った。

「ここは男子寮だから女子は入っちゃダメなの。だからホントは漣桜姉が今ここにいるのもダメなことなんだよ？」

僕はそう諭すように言う。

なんだかんだ漣桜姉との行為に耽っていた僕の言うことじゃないかもだけど……

漣桜姉が泊まるのいいかも、とか思っていた僕が言うことじゃない

けど……

——すると、

「でもトー君……」

と一層悲しそうな面持ちをして俯く。

この漣桜姉もそれはそれは魅力的だけど、それに溺れたらどうしようもない。

それじゃ元の木阿弥だ。

ここは心を鬼にして

「ダメだよ、漣桜姉。いくら夫婦——違った。姉弟でも男子寮と一緒に住むっていうのは……。僕だって姉さんと一緒に住みたいな、とは思うけど、でも規則は守らないと、大人なんだからさ」

我ながらかなりの正論だ。

漣桜姉ももう19歳だ。

実家に住んでいるといってもほぼ独り立ちしているような大人だから、こういう言葉はズビシツとくるだろう。

しかし、漣桜姉のが伝染^{うつ}ったみたいだに夫婦って言っちゃったよ……。

漣桜姉は、予想通りズビシツと来ているのか、さらに俯きの角度を下げた。

なんだか悪いことをしているのかと良心の呵責に苛まれるようだ。自分のことは置いておいて都合よく言い過ぎたのかもしれない。

肩を掴んでいた手を優しく腕の方に動かし、顔を覗き込んだ。

「姉さ——」

と呼びかけた僕の声は漣桜姉が顔を上げたことにより、途切れた。

「トー君、じゃあこの知らない女メスの臭いはなんなのかな？」

「――えっ!？」

知らない牝メスの臭い？

僕動物なんて連れてきたかな？

それとも勝手に入って来ちゃったとか？

これからはちゃんと戸締りしないとね！

うん、色々持っていかれたら困るもん。

まったく、猫かな？犬かな？

それとも鳥とか？

もし鳥ならなんか和やかになれるし、別にいいかなあゝ

被害も浅そうだし……

被害っていつてもきつと、米粒程度だろうし、それならなんか微笑ましいよね。

――トー君

むしろ来てほしいくらいだなあ。

それが青い鳥なら完璧だよな！

うわっ、もしかしたら幸せになれるかも……

――トー君！

なんか夢がある話だ。

僕の知らない内に青い鳥が幸せを置いていってくれるなんて少し子供っぽいけどそういうの信じるのって大事だよな。

童心を忘れないって大事だ。

ってまだ、言うほど年とって無いけどさ。

「トー君!!」

「はい!」

想像に耽っていいようにしていた僕の意識を滯桜姉の呼びかけで戻された。

「現実逃避しようとしても無駄だよ、トー君。お姉ちゃんがトー君に近づく牝犬の臭いに気付かないわけないでしょ?」

うん?

牝犬?

やっぱり犬だったのか……

まったく、部屋の主がいない間に、入ってくるなんて言語道だ――

「だからそんなことしても現状は変わらないよ、トー君」

冷たい滯桜姉の声が響く。

冬かと錯覚してしまうくらい冷え切っている。

これだけで謝りたくなっちゃいそうだ。

想像通り、予想を遥か上回る形で滯桜姉は気付いていた。

滯桜姉が言っているのは、きつと華音のことだ。

この部屋にする女性の匂いなんて僕の知る限り華音しかない。

天原華音

僕の下僕を自称し、これまでの話の根源。

滯桜姉ともいずれ会わなきゃいけないだろうし、ここで話しておくのもいいかもしれない。

滯桜姉と今度会ったら話そうと思っていた事だし

という僕の浅はかな考えは改めざるを得なかった。

何故なら、今日の前にいる姉は、絶対零度の空気を醸し出しているのだ。

五感が簡単に寒さにやられてしまいそうになる。

これは……、この寒さはきつとそういうことだ。

――血系魔術

天原の継承魔術、天空魔術もしかり
南雲の継承魔術、形態魔術もしかり

古い12師団トゥエルフスのような家には、必ずある。

それは20旅団ブリゲイドもそうだ。

都落ちしたに近い『羽間』もそれを持っている。

両親達と僕の決定的な違い。

澪桜姉と僕の決定的な違い。

それは似ていないことでも無い。

髪の色でも無い。

決定的なのは、魔術が使えるか使えないか、ということだ。

魔術の家系に名を刻むに値しない。
それが僕だ。

ホント、嫌になる。

第28話 同性同棲（前書き）

こんばんは

とあるスレで私の作品を面白いと言ってくださる方がいて、それはもう感無量の思いでした。

ガチで泣きそうになりました（笑）

しかし、酷評もあり、悲しかったです。

ガチで泣きそうになりました（泣）

同じなろう作家様のお友達を作って慰めて欲しい気分です。

よければ、そのあなた。

お友達になりませんか？

……ちょうしにのりました。

すいません

気を取り直して第28話です。

第28話 同性同棲

ホント嫌になる。

僕は「羽間」ではないのか

そう自問してしまうくらいの嫌悪感に襲われる。

それは強大で脅威だ。

そんな僕の内心を知ってか知らずか、漣桜姉は止めることなく魔術をひたすら発している。

心なしか表情まで冷めてきているように見える。

室温は、いまや氷点下を下回っているだろうと思えるくらい、寒い。

それでも、僕は譲れない。

漣桜姉が弟^{ぼく}に対して嫉妬するというのは当然知っている。

それによる被害も酷いものだということのもわかつている。

僕だって、もし漣桜姉に恋人が出来たら必ず嫉妬にかられるだろう。現時点では有り得ない話だけど、将来はどうかかわかんない。

漣桜姉はモテるから、引く手は数多だし、その中に気にいった人がいれば、そうなるのも考えられる。

それは僕にとって嫌なことだけど。

そうなら漣桜姉との口づけもしなくなるのだろう。

お姉ちゃんだけど……。

濡桜姉の嫉妬は発展すると恐ろしくおぞましいモノになることはもちろんわかつている。

産まれた時から一緒に暮らしているので、そういう被害も何度かあったのだ。

それでも、今回のように血系魔術は使わなかった。

『羽間』の血系魔術。

寒暖魔術と家の中では呼ばれている。

それは魔力の届くところまで、魔術の範囲内の気温を変化させられることにある。

天原の天空魔術のような派手さはなく、南雲の形態魔術のような柔軟さはないが、これは厄介な代物だ。

羽間の誕生以来の実力者と呼ばれている濡桜姉が使うなら尚更

この空間に耐えきれず、耐えることもせず

「姉さん」

僕の冷え切った声が、冷え切った部屋に響く。

濡桜姉は僕の声を聞くなり顔を青ざめて、途端に魔術をやめた。

部屋に暖気が戻ってくる。

「あっ……ごめ……、トー君」
すぐに慌てて僕に謝る澪桜姉。

「別にいい」

「違うの！トー君。お姉ちゃんちよつと嫉妬しちゃって……」

「だから、別にいい」

「ホントに違うの！ 別にトー君の事嫌いになんてなってないから
！」

「だから……別にいいって……」

室温は戻っても、僕の声に暖気は戻らない。

その声が部屋に通るたびに、澪桜姉の顔色は少しずつきまり悪くな
っていく。

僕が『羽間』として受け継がなかったものとして、一番痛みを負っ
たのは、『血系魔術』だった。

魔術の家に生まれ、『羽間』の嫡男として育てられた僕だけど、結
局のところ魔術は使えなかった。

人一倍の『魔力』を有し、人よりも珍しい『能力』をもっても、『
魔術』と言う形では、血は僕に力を与えなかった。

通常の簡易的な魔術（術式が軽く、使用魔力も少ない——通称、簡
略魔術）は使えないが、血系魔術は使えるのではないか？
そう思われた時もあったが、それは有り得ない。

なぜなら血系魔術は、開花させるのが、簡略魔術より難しいものだ
からだ。

古い家に生まれれば使えるという簡単な話ではない。

そこに産まれてようやくスタートラインに立てるということだ。
そんな魔術が、簡略魔術も使えない僕に使えるわけがない。

能力があり、魔術がない。

魔力を使う術すべがあるが、魔術はない。

そんな矛盾した僕。

それが顕著にわかるのが、『羽間』の血系魔術だ。

誰を恨めば魔術が手に入るのだろう。

きつと誰を恨んでも、羨んでも手に入ることのない力。

それをいとも簡単に手に入れた姉に嫉妬しているだけなのだ。
だから、子供のようなワガママを滯桜姉に押しつけている。

僕はガキだ。

そんなことすらも嫌悪感の一部に含まれている。
それが嫌だ。

滯桜姉が使う血系魔術も、

それを許せない自分も、

そしてこの温まりかけた空間も、

冷え切った僕の声も、

滯桜姉の心配そうな眼つきも、

――嫌だ。

僕は特別なんじゃない。
異能を持った異端なんだ。

この寒暖魔術の魔力を感じるのとそれがわかってしまう。
そんなことを肌が敏感に感じ取ってしまう。
それも能力の一つなのだろうか。
それとも体質なのだろうか。

嫌だ。
嫌だ。

なにもかも嫌になる。

学園も
結社も
華音も
萌葱も
仁吾も
澪桜姉も

.....

突然。

グッと思い切り抱きしめられる。
冷えた身体が、熱を取り戻すかの如く温まり、心臓もドクドクと鼓動の音を響かせる。

「トー君。ごめんね、わたしがちよつとしたことで使っちゃって……。トー君が苦手だって知ってたのに、嫉妬にかられちゃってつい……」

それは、本当に申し訳なさそうで、そして心があったまるような声だった。

「澪桜姉……」

気づけば僕も声を出していた。

それも、澪桜姉同様、声に熱が籠っていた。

先程の冷えた声とは、彩りがちがうような、そんな声色だった。

「もうトー君の前では絶対使わないから……、お姉ちゃん使わないようにって思ってたんだけど、久しぶりにトー君に会ったこともあって、それでトー君の部屋から知らない女おんなの人の匂いがして……、それが寂しかったの」

澪桜姉は泣いているみたいだった。

抱きしめられていたのが、いつの間にか抱きつかれているような形になって、僕の胸に澪桜姉は顔を押しつけていた。

鼻をすする声がかすかに聞こえる。

「寂しかったの、逢いに来て知らない女ヒトの匂いがしているなんて浮気みたいなこと……」

浮気ってなんだ、と今は無粋なことは言わない。

体温が戻ってきて、自覚もおまけに戻ってくる。ついでにツツコミも

澪桜姉は確かに僕と一緒にいる時に血系魔術を使わなかった。

それは初めて目の前で血系魔術を使われた時からだったと思う。

僕は拒絶した。

初めて姉から拒絶した。

姉が持っているモノを僕が持っていないくて、悔しくて、たまらなく悔しくて

その先には、今と同じように漣桜姉の鼻声と泣き顔があった。

漣桜姉は、今までにないぐらい悲しそうな表情をしていて、僕のしたことを心配していた。

それを見て幼いながらに恥じた。

自分のしたことで姉が悲しんでいると知って、そしてそれでもなお、僕の心配をしていると知って。

それ以来漣桜姉は寒暖魔術を僕のいるところでは使わなかった。
今日まで。

きっと本当に寂しかったのだろう。

産まれてから一緒の存在ぼくとたとえ数日でも離れているということが。
これなら父さん達に怒られようと電話とかにはちゃんと出てあげべきだった。

「漣桜姉ごめん。もう大丈夫だから」

「ホント？」

顔を上げる漣桜姉の縋るような目にはやはり涙が零れていた。

その涙にぬれた顔も月明かりが照らしていて、美の女神に愛されているのではないかと思えるほど艶美だった。

神なんていないけど……

「ホントだよ。ホント」

「お姉ちゃんのこと嫌いにならない？」

「ならないならない。なるわけない」

不安げな滯桜姉を振り飛ばすように何度も、ならない、と連呼する。

それに呼応するかのごとく滯桜姉の顔から、憂いに揺れていた表情が消え去り、そこには美しさしか残っていなかった。

「よかったあ。お姉ちゃん、トー君に嫌われちゃったら死ぬしかなかったよ」

「は……はは……」

冗談だね？

面白い冗談だなあ。

滯桜姉は一度眼をこすり涙を拭うと、

「お姉ちゃんはトー君がどうだろうと、ずっと妻として支えたいと思っているからね。たとえトー君が魔術に見放されていても、わたしには関係ないからね」

ところどころツツコミしたくなる姉の発言だけど、真実味だけは籠っていた。

今僕が一番言っしてほしいことを的確に狙ってくる滯桜姉。

魔術が使えなくても滯桜姉は、僕に対する愛情を損なわなかった。

あたかもそれが当たり前のように

やっぱり……

「敵わないなあ。滯桜姉には……」

そうなのだ。

姉弟で夫婦と読んでいるこの姉には一生敵う気がしない。

「お姉ちゃんこそトー君にメロメロで敵わないよっ！」

楽しげな声を出す漣桜姉。

もう泣いていたことなんて飛んでいってしまったように明るかった。

「アハハ」

2人で顔を合わせ笑った。

声を出し、夜なのにそれをきにせず。

ひたすら……

.....
.....
.....

根本的な解決をしていなかった。

笑っちゃうなっ。アハハ……

なんだか最近すごい残念な人になっている気がするという悩みはいまのところ置いて、本題に移らなければならない。

漣桜姉どこに泊まるの？

議題はこれである。

さあ、どうにかして居着くのは避けてもらわなければならない。

寂しくなったら会いに来てもし、こっちから会いに行くのもいいけど、住みつかれると困る。

姉とはいえ、一緒に住んでいることがばれれば、厳罰モノだろう。それは回避しなければ……。

「お姉ちゃん、今日は遅いからいいけど、明日はどうするの？」
勇気を出して訊く。

暗にここはだめだよ、というのを伝える。

「明日？ 明日はトー君の朝ご飯作って、トー君の制服姿をじっくりしっかり写真にとって、それを悔しいけどお母さんにデータ送信して、トー君の学園まで一緒に行って、トー君がしっかり勉強してるかな？とか想いながら、仕事して、そんでトー君のお迎えに行くて、仕事の合間に買い物しておいたものでトー君の夕食作って、トー君と一緒に風呂入って（キャッ）、トー君と一緒に（ウフフ）おねんねするだけだよ？」

ホントに面白いお姉ちゃんがいて僕は幸せだなあ。

「ってなるかあああああああ！！！！」

「トー君、どうしたの！？」

「どうしたのじゃないよ、お姉ちゃん！ ここは男子寮なの！」

「うん、知ってるけど？」

「知ってるのになんで1日中一緒にビジョンなの！？」

「1日中じゃないよ！ 仕事中はトー君のことを想って仕事するって言ったでしょ！」

「それだけじゃねえかあ！」

それすらも僕に影響を受けている。

仕事の合間に買い物とかも行ってるし……

「まあいいや、予定はあくまで予定だから……。でも男子寮にこのままいられると僕学園退学になっちゃうかもしれないよ……」

「トー君退学になったらお姉ちゃんが一生養ってあげるね！ お礼はトー君との赤ちゃんでいいからねっ！」

「いいわけあるかぁ！」

そして嬉しそうに言わないでください。

「もおっ！ トー君さっきから怒鳴ってばかり……」

「誰のせいで……」

「別にトー君に退学してほしいなんて思っていないし、それだからってトー君との子供が欲しくもないとも思っていないよ？」

「子供からいったん離れてください、お願いします！」

濡桜姉はベッドから下り立つと、僕のことを腰に手を当て見降ろしと言った。

「一緒に住む方法が、なにもこの学生寮とは決まっていなくていいでしょ？」

「えっ？ ……どういこと？」

「だからトー君がここからでて行けばいいのですっ」

「……へ？」

「そしてお姉ちゃんと2人暮らししましょう」

なにをいつているのかな、この愚姉は……
おろかももの

出ていったら住むところなくなっちゃう。

お姉ちゃんが今住んでいるところは実家だから帰っても2人暮らしにはならないし……

だけど同時にホッとする。

男子寮に居着かないという言葉質を取ったも同然だからだ。

けどどういことなんだろう……？

その答えはすぐに返ってきた。

「学園と機構しごとばの近くに良い物件があったんで、そこを買いいます」

.....

なにをいってるのかな、この愚姉は…… P a r t 2

「そんなお金どこにあるのさっ！」

「ええと……、銀行だけど……？」

「なんで!？」

「お仕事してるからかな……？」

ぼんやりとしている滯桜姉。

対して僕の声は張り詰めている。

「お仕事って……! ……ああ、そっか」

思い出す。

滯桜姉の職場の給料の良さに驚いたことを。

そうだ。姉さんは天才だったんだ。

日本魔術研究機構は日本のエリート（魔術界の）が集まる場所。

そこで滯桜姉は研究者として勤めている。

当然のごとく倍率の高いその研究機関は、倍率と研究員の知性だけでなく、給料もバカみたいに高かった。

いくら国家の仕事こうむいんでも……、とはもちろん思ったが、それだけ倍率を維持するためにも必要なことなのだろう。

高待遇をするには、高能力でないといけない。

これが機構では明白なこととなっていると澪桜姉も何時だったか言っていた気がする。

待遇が良ければ、倍率が上がる。

倍率が上がれば、機構内の機能率も上がる。

機能率が上がれば、実績が出来る。

そうすると結局、待遇が良くなる。

こういった良循環が生まれる。

僕もこの末端にでも取り入れてくれないかな……。

と将来の事を本気で考えたことはいいでしょう。

僕に研究員なんて向かないんだから。

そして愚姉、改め金持姉。

それは19歳にしてはおかしいくらいのお金を持っていることだろう。

この土地のバカ高い学園内の家を買えてしまえるくらいには……

仕事ちゃんとしているのかな……

心配になってきた。

あの電話もそうだし

と不毛なことをしても仕方がないので澪桜姉と話を進める。

「お父さんとお母さんにはちゃんと言っているの？」

「言っていないけど、別に一括で買えるから問題ないかな？ って思うよ」

「問題大アリ……、は、まあいいや。それにしてもお金勿体ないで

しょ？」

「そんな！」

と大げさに言う濔桜姉。

溜めに溜めて言った言葉がこれだ。

「お姉ちゃん、トー君の為に働いているんだよ！？ お姉ちゃんには必要最低限のお金があれば十分だから、あとはトー君に使うの！」

「なにその、ヒモ男！？」

「いいじゃん、トー君！ お姉ちゃんが養うから大丈夫っ」

「いやいや大丈夫なレベルからかけ離れてるから！」

「だからお礼は2人の赤ちゃんで……」

「そっから離れて！！」

あなた実のお姉ちゃんですよね？

「とにかく！ 家を買うことはお姉ちゃんの中で決定しました。そしてそこにトー君と2人暮らしすることも決まりました。異論は認めません。譲歩もしません。ですがお姉ちゃんとのコスプレ・プレイは認めます」

「そこだけは認めなくていいよっ！」
やばい、これはどうしよう。

「ちなみにお金を出せば、本物のナース服が買えますがどうしますか？」

「ナース、服……？」

ふいに頭の中にナース服を着た3人が表れる。

華音

萌葱

漣桜姉

どれも甲乙つけがたく、似合っていた。

「トー君は、ナース服アリと……」

「何メモしてるの!？」

どこからだしたのか、漣桜姉はメモに『トー君、ナース服好き』と書いていた。

その上に『トー君、おっぱいが相変わらず好き』とも

相変わらずってなんだ!？

それより僕なんか胸に関する事で漣桜姉にしたっけ？

いやしてないはず。

なにより記憶にない。

うーん……

.....

やめよう。なんか怖くなってきた……

僕が知らないところでこんなことを思われているのは癪だけど、これ以上考えて藪蛇になるよりましだ。

「それじゃあ、トー君、引っ越しは明日です」

「いやいや、ちょっと待ってよ姉さん」

「コスプレの追加なのかな？」

「違うよ!」

「では、愛の巣に明日から突入です」

「あ、愛の巣!？」

「姉弟ならば当然です」

「夫婦じゃねええ!!」

夜の寮に僕の声が響いた。

しかしこれ、ホントですかね？

——天原邸内

現当主の音彦は一枚の資料を見ていた。

それは家の者に急いで調べさせた刻季の調査票だった。

今代こそ、『主席』ファーストを逃したものの天原の力は魔術界でも衰えてはいない。

その力は至るところに及ぼせる。

権力を使い音彦は刻季の資料に辿りついた。

（何者だ……！？）

それは感情があまり出ることのない華音の父にふさわしい音彦の感情だった。

そう、——驚愕。

彼は刻季の資料を見て驚く。

能力について詳細は載っていないが、そこには魔術界はおろか世界をも征服できそうな能力が書かれていた。

即ち、時空を超える力。

魔術などという物理法則を歪めるだけでなく、世界自体を歪める。
反則で驚異的な能力だ。

（これは師団の集結を急い方がいい。音弥と華音が陰でなにかやっているようだが、それよりもこちらの案件のほうが一大事だ）

資料を持つ手が震えているのに気付く。

それはどんな感情なのだろうか。

感情が希薄な音彦にとってそれがなんなのかわかっていなかった。

師団の集結は約2カ月後に控えている。

それでは遅かった。

この話を師団家で話し合い、結論を出したかった。
それが音彦の想いだった。

（南雲に話せば、聞き入れてくれるか？ いや、あそこの娘と『羽間』が仲良かったはずだ。やはり強権を使うしかないか……）

頭の固く古い音彦は、これ以上、刻季の情報を自分一人で抱えておくのは悪策と考えた。

あまはら えんじ きざくら くになえ くるまや しげつの ずいは すずたて せんどう とこやす
天原、宛寺、木櫻、國末、車谷、重角、瑞葉、鈴建、仙道、常泰、
なぐも ひびむら
南雲、輝村

この十二家で師団は構成されている。

この十二家には、緊急時に使う強権があった。

それは、使用状況によれば、権力を狂わせかねないものでもあった

が、一応師団家全てが保有する権利だった。

その権利は

――師団結集

物語が動き始めた。

第28話 同性同棲（後書き）

ようやく、初期段階を超えたのかな、とか毎章ごとに言ってる気がします。次章から話は進みます。

バトルパートも増えるつもりなのでお楽しみに。
宗教徒もちよろちよろ出していきます。

萌葱とのデート話いつ書こう……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863w/>

魔力世界の時操者（CHroNuS）

2011年11月27日08時00分発行